

ニ ヴ フ  
— 北 の 隣 人 —  
(試稿)



金 子 亨

2007 年春



# ニ ヴ フ ー 北 の 隣 人 ー

## 目 次

献辞：旧友チュンネル・タクサミへ .....	1
ニヴフの人たち：北の友だち .....	8
<b>I. アムール河下流のニヴフの人たち</b>	
1. カリマ村の人たち .....	11
2. インノケンチェフカ村の人たち .....	26
3. アムール河口の人たち .....	32
4. ニコラエフスク市の人たち .....	37
<b>II. サハリンのニヴフの人たち</b>	
1. リージアへ .....	46
2. サンギさん .....	50
3. ロクさん .....	58
4. ノグリキの人たち .....	62
5. ネクラソフカの人たち .....	75
6. ポロナイスクの人たち .....	82
7. ユージノサハリンスクの人たち .....	88
8. 樺太アイヌの人たち .....	97
<b>III. ニヴフの文化と言語</b>	
1. ニヴフ語の姿 .....	103
2. 『ニヴフ・ディフ』 .....	111
3. トゥンルンのこと .....	119
4. 古い歴史の仮説 .....	122
5. ニヴフの人たちのこれから .....	128

## 献辞 旧友タクサミへ



チュンネル・ミハイロヴィッチ・タクサミに私が出会わなかったら、この本はできなかつた。この生涯の出会いに心から感謝する。

### チュンネル・ミハイロヴィッチ・タクサミの貢献

彼は私にとってニヴフ人のなかで一番古い友達である。

古いと言っても、そもそもニヴフ人とつき合いができるようになったのは、ソ連邦が崩壊した1991年以後のことであるから、たかだか十数年にすぎない。「鉄のカーテン」がまだ降りていた頃、名を知っていても、とうてい会うことは出来ない人が多くいた。タクサミはその一人だった。ソ連の体制の下では、日本人が少数民族出身の研究者と会う機会があるとすれば、ヨーロッパのどこかの国で何かの学会会議が開かれて、そこでたまたま出会うというのがせいぜいであった。ソ連国内で開かれた公式の会議では、きびしい監視がついて双方ともかなりの危険を覚悟しなければならなかつたものである。タクサミ氏が日本側の招待で日本へ来られるようになったのも、1985年以降ペレストロイカがかなり進んだ期間、つまりソ連が崩壊する寸前のことだった。

チュンネル・ミハイロヴィッチ・タクサミは1931年生まれ、私よりわずか二年上という歳の近さもあって、親しいつき合いができた。彼が成田からペテルブルグに帰るときなどは、何度か成田に近い私の家に泊まってくれたし、私もまた何週間かペテルブルグの家に泊めてもらったりした。一緒にアムール河の村々に行ったときなどは、彼の従兄弟の家に一緒に泊めてもらった。アムールのニヴフの人たちとつき合いが出来るようになったのはもっぱら彼のお陰といってよい。

北方諸民族の文化と言語に関する調査を本格的に日本人がイニシアティブをとって始めたのは、村崎恭子さんが研究代表を勤めた「文部省科学研究補助金（国際研究）による『サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究』1990-1992」が最初だった。このときの研究グループもタクサミ氏に大変お世話になった。彼との本格的なつきあいが始まったのはこのサハリン調査からであった。

その二年後、金子亨が研究代表者になって「文部省科学研究補助金（総合研究A）による『北方ユーラシア先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型的研究』1994-1997」が始まった。このプロジェクトは当初三年継続し、多くの優れた研究者による共同研究が行われた。そして金子の定年退職後の1999年以降もそのプロジェクトは、友人の中川裕さんが研究代表者になって、もう二年継続されたが、この期間も一貫してタクサ

ミ氏は多くの研究調査でもっとも大切な研究協力者であった。これらのプロジェクトと併行していくつかの調査研究が中川裕さんや荻原眞子さんによって組織運営されたが、どのプロジェクトや調査研究でも彼の助力にあずかった。これらのプロジェクトは、彼ほどに学識と経験を持ち、しかも現地を知り、現地の人望の厚い人物が、これらの協同研究を率いてくれなかったら、その成功はおろか、実行さえ出来なかったに違いないと思われる。改めて、チュンネル・ミハイロヴィチ・タクサミに深く感謝する。

### チュンネル・タクサミの生い立ち

タクサミは、アムール河が北向きから西向きに大きく流れを変える辺りの右岸にある小さなニヴフの村カリマに生まれた。カリマは人口百人あまりの寒村ではあるが、ニヴフの都とも言われた古い村である（右写真は2003年夏、煤煙に煙るカリマ村、「カリマ村の人々」の項の地図を参照）。



この村には間宮林蔵もデレンからの帰途1809年7月26日に一夜をすごしたという（『東韃地方紀行』巻之下）。

そのカリマにはいくつかのニヴフ族きっての名家、チダー家、プフタ家、グダン家などがある。タクサミの母はこのチダー家の娘で、本家の建つ河岸の段丘に、しかし本家からは一段下がった場所に家を構えていたという。母は一人っ子のタクサミがペテルブルグに



いる間に亡くなったが、その墓はチダー家の墓地の隣にひっそりと左の写真のように建っていた。

母は彼をチュンネルと呼んでいたという。タクサミとは父の姓であるというが、どこの村の出身なのかは、ついぞ聞いたことがない。少年の頃、彼のまわりはニヴフ語だけで生活が行われていたという。村の生活語もニヴフ語だけだった。アムール河の河岸から数分ほど森に入った所に小学校が建っていたが、そこでも授業はニヴフ語だけで行われていたという。タクサミによると算数だけはロシア語で教わったというが、先生はニヴフ人だった。彼は村一番の、よくできる子だったらしい。村の学校を終えてからニコラエフスク・ナ・アムーレの学校に移り、その後にハバロフスクの上級学校に進んだ。そこで大いに頭角を現して、レニングラード大学（＝ペテルブルグ大学）に進んだ。当時の少数民族の子供は、よほど恵まれていてよくできる子であっても、ハバロフスクの教育大学へ行くのが普通だった。レニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）まで行けても、ゲルツェン記念国立教育大学、通称ゲルツェン大学へ行くのが普通だった。この大学は1920年代の末に「レニングラ

ード大学北方学部」から分離独立した非ロシア系諸民族のための教育機関であって、北方諸民族の子弟はここで学び、郷里に帰り、ロシア的社会主義建設に貢献するというのがその設立の理念であった。名門ゲルツェン大学に入学するのは、大変なことだった。地方の優秀な子供達だけが、「ゲルツェン」へ行って、北方民族用の教育を受けてロシア語・ロシア文化の先生となって郷里へ帰るとというのが最上級のコースだった。ところがタクサミは「ゲルツェン」ではなく、レニングラード大学(右図)の方に進学した。これは当時としてもごく稀な例外だったという。彼は始めから教師ではなく、学者になる道を選んでレニングラード大学を選び、そこで歴史を学んだ。自分の民族について研究しようと志を立てからだった。



## 研究者への道

レニングラード大学は、ネヴァ河畔に建つ赤煉瓦の建物である。大学の裏門をでると、正面にソ連科学アカデミーの図書館がある。そこから歩いて数分のところに世界最古の民族学博物館である「ピョートル大帝記念ロシア科学アカデミー人類学民族学民族学博物館」(通称「クンストカメラ」)が建っている。

タクサミは学生時代この恵まれた環境でアカデミー図書館とクンストカメラに通い詰めていたという。彼が大学にはいつから学位を得るまでの10年間は、ちょうどスターリンの死からフルシチョフ時代を経てブレジニェフ政権に到る激動の時期であった。この政治的な嵐にもまれながら、北方民族出身というハンディを懸命に乗り越えるために、彼は人一倍の努力を重ねた。一方では、ニヴフ人出身という利点を生かすことも忘れなかった。専門領域を歴史学から人類学へ拡大して、現地人の強みを発揮してフィールド・ワーカーとしても成長していった。そして、この間20年ほど、彼は長いこと郷里の村に帰らなかった。母と兄弟の死に目にも会えなかったという。

彼の学生時代の1960年代に、レニングラードには優れたニヴフ語の研究者がいた。クレイノヴィッチとサヴェリエヴァ、それにパンフィーロフの三人である。エルヒム・アブラモヴィッチ・クレイノヴィッチ(1901-1985)はすでにニヴフ語だけでなくいくつかの北方諸言語の権威であった。若い研究者ウラジミール・ジノヴィエーヴィッチ・パンフィーロフ(1928-?)はタクサミの生まれ故郷のカリマ村を中心とする地域のニヴフ語を専門のフィールドにしていた。ヴァレンシナ・ニコラエーヴナ・サヴェリエヴァ(生没不詳)もアムール下流のニヴフ語を研究対象としていたし、すでに豊富な言語資料を蓄えていた。この3人のうちサヴェリエヴァは当時まだ歴史学博士候補であったタクサミと一緒に自分

が集めた資料から辞書を作ろうとした。二人は、まず1965年にロシア語・ニヴフ語の辞書を、次いで1970年にはニヴフ語・ロシア語の辞書を出版した。これはまさに画期的な大事業で、これが今日まで作られた一番詳しいニヴフ語の辞書になる。タクサミにとっても、これが自分の民族のために行った最初の最大の仕事であった。その後も彼はハンディ版の辞書を作り、小学校用の教科書を何冊も出版した。郷里のカリマ村の小学校には、彼の辞書や教科書が何十冊も棚に並べられていて、毎年子供達に貸し与えられ、この何十年もニヴフ語の授業に使われてきた。これだけでもタクサミが自分の民族のために為した貢献は大変なもので、まさに顕彰に値する。

### ニヴフの研究者として

大学を終わってからタクサミは専門の民族学者として1970年代後半から80年代にかけてしばしば極東地域へ調査に出かけ、地元出身の学者として尊敬を集めるようになった。この時期、ソ連邦内では非ロシア系諸民族の生活を向上させ、その固有の文化の振興を計るという政策が再び掲げられるようになった。不思議な



若いフィールドワーカータクサミ (右)

ことに、この民族政策はブレジニェフの「ソ連人創設計画」と称する国民均一化教育と併行して進められた節がある。その理由は単純なガス抜きであったのか、それともソ連建国初期のレーニンの民族思想の生き残りなのかは分からない。いずれにせよ、まだ若いタクサミは、その少数民族研究計画にのって調査や講演旅行などの目的でしばしば極東へ出かけた。郷里ではしばしば地元の人々に歓迎され、旧友と親しく抱き合う写真が本や雑誌に見られるようになったのもこの頃である。そのころ生まれ故郷のカリマ村には彼自身が通った小学校を増築した木造二階建ての古い小学校がまだあった。この校舎も惜しいことに2001年の山火事で全焼してしまったのだが、火事の前年、タクサミとともに私もそこを訪れたとき、彼の古い友人というネギダール人の校長さんが「懐かしいでしょう」と校舎をすっかり案内してくれた。奥まった教室に博物館と称する宝物記念館が作られていて、そこにカリマ村出身の戦没英雄と並んで、著名学者としてのタクサミの写真も壁を飾っていた。「偉いじゃないの」というと、恥ずかしそうに「まあーな」という訳であった。

事実、タクサミは故郷だけでなく、世界的にも確かに偉い。自分の民族のために立派な辞書や母語の教材を作っただけでも優れた仕事である。歴史家として人類学者としての研究業績も多くの優れた仕事をしている。しかし彼が偉いのはこうした学問的な仕事のせい

だけではない。すでに1970年代から、彼は北方少数民族全体の問題に非常に積極的に発言を始めた。その発言は少なくともソ連時代は確かに彼の研究者としての立場からソ連邦の民族政策の立案に貢献するという基本的なスタンスから行われた慎重なものだった。それでも当時の政治状況からすれば、身の保全本がぎりぎり守られる程度の危険の多い行動であった。彼の中のニヴフが彼自身を駆り立てたに違いない。

1970年代の後半からソ連邦では全国的に先住民族の生活の全体にわたって後戻りの効かない変化が始まっていた。労働の集団国営化、集団居住化、全面的寄宿学校化、ロシア系民族の全国移住と生活の全面的中央管理などのソ連型改革が国土の全域に徹底されていった。冷戦に伴う核軍拡のさなかのことである。その中でタクサミはわずかの同僚とともに北方民族の伝統的文化を維持し続けようという発言を始めた。当時の状況からみると螻蛄の斧にすぎないようであった。そんなことでソ連の体制はびくともしないと誰もが思っていた。それはせいぜい地方の観光案内に役立ち、この国の民族政策を宣伝する役に立つ程度だと思っていた。だからソ連共産党もさしあたりこの程度の少数民族の発言は放置しているとも思っていた。だが、わずか数年後には全般的な状況が変わり始めた。アフガン戦争、チェルノブイリと続く危機に続いて、ソ連型の政治経済体制そのものが揺らぎだした。ペレストロイカが始まり、多少とも人間的な発言が社会的意義を持つようになったとき、北方諸民族の状況についての関心も高まった。タクサミたちにも新しい舞台が用意された。まだソ連邦という巨大軍事国家が崩壊する前の年の1990年3月に「北方少数民族協会」の創立総会がモスクワで開催されたのである。このときの議長がタクサミ自身であった。またこの会議では同じニヴフ人のウラジミール・サンギ（II-2「サンギさん」参照）が同協会の会長に選出された。サンギはサハリン出身の詩人であり、タクサミよりわずか数年若い。二人とも立派なニヴフの知識人であり、この二人はその後ともに北方民族協会やそれに関連する国家的な活動に重要な立場で関与し続けてきた。

### ニヴフ民族を代表して

1991年にソ連邦という国家が崩壊した。その部分的後継国家として作られたロシア共和国の新憲法（1993年12月制定）では「環境の保護と少数民族の伝統的生活様式の保護とは、ロシア連邦とその地方行政の義務である」（第72条）と謳われた。この条文自身がタクサミを主導者の一人とする先住民族全体の努力の結晶である。しかし北方先住民族の生活の実態はむしろ悪化の一途をたどった。社会主義経済と云われてきたものが一挙に全面的に壊滅し、工場も国営企業も消



クンシトカメラ

滅した。国家的暴力が政治的強請に変わり、「マフィア」と汎称されるロシア人暴力集団が公的な生活をあちこちで支配しはじめた。例えば、アムール下流の寒村で何人かがキャビアを密漁する。加工して仮瓶詰めした状態で、一晩かけてちいさな舟でハバロフスクへ運ぶ。そこで土地の小マフィアに渡して、なにがしかの現金収入を得る。そのキャビアは巡り巡っておしまいには大マフィアの手によって本場カスピ海ものとして日本のホテルでのパーティに現れるという具合である。

タクサミはこうした北方民族の生活実態をもっともよく知っている。上から下までの情報源を持っているからである。彼は怒った。その怒りを多くの良心的な人々と共に会議でセミナーで、パンフレットを作って、また友人とりっぱな本『北方先住諸民族の発展の諸問題』2003 を作って公に訴えた。

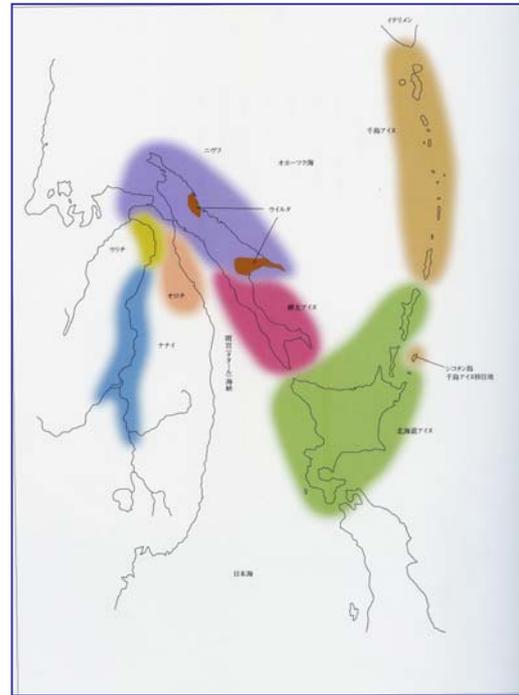
その本の中で、20世紀の100年間はロシア領内の北方諸民族にとって「もう止めてくれという嘆き」の世紀だったと書いた。そして状況は新しい世紀を迎えた今日も変わらない。「出口の無さ加減」はむしろ深刻にさえなっている。しかし彼は、北方民族がこの状況から脱出して「生態的安定を回復して」「生態共生を自主的に構築する」ことが可能だと信じている。だがそのためには「土地」を持つことが許容されなければならない。「そこで自由に快適に暮らすことのできる自分の領土」がなければならない。そこで「多面的な生活の総体を創造的に構築できる権利が保証」されなければならない。先住民族は「ロシアに属してきたが、それはあくまで世界の一部であるという意味合いだった」。今のやりきれない悲慘を理解して、そこからの脱却を計る北方民族の意思は、「ロシアの、そして外国のいい人達が理解してくれている」、だからいつか「統治の全段階で北方民族の代表者達による運営が可能な北方地域」を創設できるはずだというのである。夢である。しかしそれをイマージンし続けようではないか。

サハリン北端のネクラソクカの海岸でのことだった。タクサミと私は焚き火用の風倒木を集めに海岸を歩いていた。皆で釣った鮭を焼いて食べようとしていたのだった。向こうでウクライナ人とおぼしき小男が一人鮭を釣っていた。近づいて見ると、男は何匹かの鮭を釣り上げていた。しかしイクラだけをビニールバケツに放り込んで、オスは腹を割っただけで、母鮭はイクラを奪われたままの姿で海岸にうち捨てていた。突然タクサミが怒鳴った「ここはオレ達の土地だ。お前達はとっとと出て行け！」そこには、一人のニヴフが顔を真っ赤にして突っ立っていた。

## ニヴフ — 北の友だち —

日本列島の北の端にアイヌの人たちが住んでいる。平安時代以前には、今の仙台市と秋田市とを結ぶ線の北には蝦夷とかエミシとか言われる人たちが住んでいた。この地域に残っている地名の研究から、ここに住んでいた人がアイヌ語を話していたことがほぼ確実だとかんがえられている（山田秀三『アイヌ語地名の研究』全4巻草風館1982-1983など）。アイヌの人たちはおそらく縄文時代から今の東北北部から北海道全域と千島列島全域やサハリン島南部に及ぶ広い範囲に住んでいたと考えられている。

このアイヌの人たちが住んでいた地域の北西には、ことばと文化とが違う別の民族が住んでいたと言われてきた。アイヌの人たちはこの北西の異人のことをスメルンクルと呼んでいたという（間宮林蔵『東韃紀行』など）。この住み分けの様子を日本列島の今の配置関係で図式化すると、右のような図になる（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『樺太アイヌ民族誌』2006、88ページ）。この図で茶色の部分が千島アイヌの、緑色の部分が北海道アイヌの、赤色の部分が樺太アイヌの住んでいた地域を示す。その樺太アイヌの直ぐ北に接して紫色の部分がある。サハリン島の中部から北の端まで、



更にアムール河の河口部分を覆う地域があるが、この土地がニヴフの人たちが住んできたところである。しかしいつ頃からこのような配置関係ができたのかは明確ではない。アイヌの人々もニヴフの人たちも絶えず動き回っていたに違いないからである。交易をしたり、住み替えたりした地域はかなりの幅で揺れていたことだろう。例えば、緑の地帯は8世紀まで東北北部まで延びていただろう。

ニヴフの人たちのことをギリヤークと呼ぶことがある。ニヴフ語のサハリン方言を研究した服部健先生はずっとこの名称を使った。服部さんによると、アムール中流に住む諸民族、いわゆるサンタン人達はニヴフのことをギレミと呼んでいたし、明代や清代に中国語で「古烈迷」とか「古里迷」と名付けられたという。日本でもごく最近までギリヤークと呼ぶ方がむしろ普通であった。20世紀初頭までのヨーロッパやロシアの探検隊がギリヤークという名を使っていたせいでもあろう。

ニヴフというのは人間という意味であり、ニヴフ語でいまでも人間のことを一般にニヴ

フという。ちょうどアイヌが「人間」という意味であるのとよく似ている。つまり、ニヴフというのはニヴフの人たちの自称で、ギリヤークというのはアムール地域で使われてきた通称であるということになる。

上の地図に見るように、アイヌの人たちはいつ頃からか日本列島弧の北の住民になってしまった。ひょっとして縄文時代の末頃までは日本列島弧の主な住民だったかもしないが、いまとなってははっきりしたことは分からない。そしてアイヌの人たちは遅くとも13世紀くらいまで、ニヴフの人たちと隣り合わせに住んでいたのではないだろうか。こう考えると、大多数の日本国民を和人と呼ぶとすると、和人にとって、ニヴフの人たちは北隣の人たちの、そのまた北隣の民族であることになる。そして面白いことに、アイヌ民族とニヴフ民族、アイヌ語とニヴフ語とはお互いに関係がない。それだけでなく、お互いにどの民族とも縁戚関係がないと考えられている。どの言語も他に親族関係を立証できる親戚の言語が見つからない。共にお互いに孤立している。もちろんアイヌ語と日本語との間に親族関係はない。いろいろに試みられたが、その証拠は見つかっていない。ニヴフ語と日本語との間にも親族関係はない。類型構造を見ると、よく似ているのだが、それはどうい言語学的な意味で系統関係があるとは考えられない。

こうして見ると、上の日本列島弧北部には日本語と和人、アイヌ語とアイヌの人たち、ニヴフ語とニヴフの人たちとおそらく何千年以上にわたって連なって住んで来たにもかかわらず、お互いに親族関係がない人の集団が隣り合わせに住んできたということになる。人々とその言葉の不思議な連鎖である。不思議な人々と不思議な言葉の連鎖であると言えるのかも知れない。

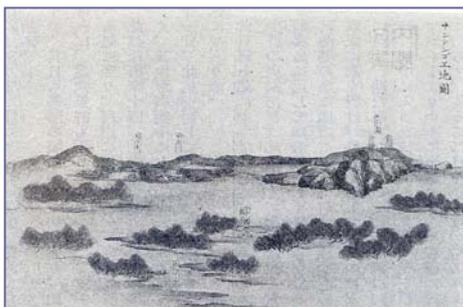
私は、このところ15年ほど、この隣のまた隣の人々と付き合ってきた。いい友達がたくさん出来た。そしてその貴重な人たちの何人かが、私より若いのに、死んでしまった。生活が悪いせいである。もってのほかの仕儀である。私はその人たちの姿を書き留めておこうと思う。言語と民族についてのむずかしい論議はひとまず棚上げにして、ここにこういう人たちがこういうふう生きて住んでいるということだけをお知らせしておきたいからである。

## I. アムール河下流のニヴフの人たち

### 1. カリマ村の人たち

#### 「カルメー村」

「23日ホルを発して日数4日を経、同26日カルメーと称する処に至り、ハラタ夷の家に宿す。酒肴の設けまたキチーの如し。」



これは間宮林蔵の記録『東韃地方紀行巻下』（東洋文庫484、p. 155）の一節である。彼は、1809年夏「満州仮府」、つまり清国の朝貢貿易基地を訪れたとき、往路はカラフト北西部の海岸から大陸側のキジ湖畔へ渡り、キチーでサンタン人から酒肴の歓待を受ける。その後アムール中流のデ

レンの交易所に赴き、そこで7日ほど滞在して清国の役人とも刺を通じる。帰路、林蔵は敢えてアムール本流を下り、その河口からサハリン島へ渡った。カリメー村に一泊したのはその時のことである。1809年7月26日（旧暦）であった。この文中「ハラタ夷」とは、林蔵自身の解説に従うと次のようである。

「此島スメルンクル夷の中、毎年満州の仮府に至り、貢をすすめ、賞賜をうけて帰り来る者をハラタ（長夷）・カーシタ（次夷）と称す。」「北夷分界余話付録 p.101」

つまり、満州語「喀喇達」、氏族の長の意味である。カリメー村、今日の言い方で、カリマ村には二・三の旧家があって、ソ連時代以前には、それぞれが申し合わせで順繰りに村の長を務めていたという。そしてソ連崩壊後の今日でもその旧家の一族は村人の信頼が厚く、漁猟の指揮をとったり、村の行政を指導するなどの要職を務めてきた。それだけではない。この旧家からは優れた人物が輩出して多くの分野で活躍している。例えば、その旧家の一つチダー家の当主グレゴリー・ニコラエヴィッチ・チダー氏は今もカリマ漁業組合長、ジナイダ・イワノヴナ・チダー氏はニコラエフスク・ナ・アムーレ市で医師を務めている。縁戚のタクサミ氏（別項献辞参照）は、ついこの前までロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（サンクト・ペテルブルク市）の館長を務めた国際的な民族学者である。タクサミによるとチダー家もかつてハラタだったという。ひょっとして林蔵は河岸の丘に立つチダー家で一夜を過ごし酒肴を楽しんだのかも知れない。

チダー家の他にプフタ家、グダン家などがハラタを務めた旧家であり、この家の人々も優れた仕事をしてきた。マリア・ニコラエーヴナ・プフタさんは幼いときにニヴフ語学者パンフィーロフのインフォーマントであった（I-4「ニコラエフスク」の項参照）。プフタ

さんの項参照)。後にレニングラードのゲルツェン教育大学で学び郷里に帰り、長年教師を務めた。グダン家には詩人だけでなく、いくつかの町で教師を務めたひとが多い。またグダン家は教師の家系である（デルハさんの項参照）。

カリマ村は大陸ニヴフを背負って立っていると言っても過言ではない。サハリンのニヴフ達もカリマ村という一目も二目も置く。ニヴフの人たちは、人口150人ほどの寒村をニヴフのメガロポリスとさえ言う。それもこの村の住民が昔からほとんどニヴフ人だったからだろう。今でも九割近くがニヴフ人である。昔から居る人達の中には、ネギダール人、ナーナイ人やオロチ人などいわゆる「北方民族」10人ほどが住んでいる。ニヴフと結婚してこの村にきた人達である。



カリマ村の広場で旧友に出会う

そのなかには、西シベリアのハンティ人も居る。彼女は、昔レニングラードの学生だった頃にニヴフの青年と知り合って、そのままカリマまでついて来てしまったという。今はカリマ小学校で長年教鞭をとったデハル氏の奥さんである。私達がカリマに着いたとき、タクサミ氏はカリマ村の真ん中で偶然そのハンティ夫人に出会った。25年振りの再会だという。立ち話は弾んで、早速、昼食は彼女の家でということになった（上図）。

チダー家やプフタ家の墓のそばにアイヌの墓が立っていると、グリーシャがそう教えてくれた。戦後の石造りの墓だが、ロシア語で刻まれた字がつぶれて読めない。そのため何時どのようにこの村に居たアイヌなのかも分からない。タクサミ氏も覚えていなかった。最後に、この村にも何人かのロシア人も住んでいる。彼らは村の学校の先生とか、通信技師であったりするのはいい方で、もとは出稼ぎだったはずが、何となく喰いはぐれて、そのまま居残ってしまったたり、あるいは漁業関係のマフィアの手先として世渡りしている者など数人が住んでいるだけである。

## カリマ村へ行く

この村にたどり着くのは今でも容易ではない。なにせこの村の河岸には5・6メートル



ほど板を渡した船着き場だけしかない。ちょっと大きな船だと舷を寄せる波止場がない。飛行場はおろか、バスでさえいまだかつて通ったことがない。

1998年の8月の始め、私たちの研究グループ、タクサミ、ロク、津曲敏郎、風間伸次郎の各氏と私の総勢五人はまずハバロフスクの空

港で落ち合った。早速、アムール河の岸边に立つインツーリスト・ホテルに宿をとり、小一時間ほど旧交を温めたが、そうゆっくりはしてられない。翌朝6時にはハバロフスク港発ニコラエフスク・ナ・アムール行き快速船に乗らなければならなかったからである。この船にはメテオール（流星）という愛称がついている。高速空中翼船である。轟音を響かせて、結構な速度で走る。メテオールは一日一便、ハバロフスク～ニコラエフスク間全長約1000キロのコースを丸一日ちょっとで走る。直行すればその日の夜には終点のニコラエフスクに着けるものを、何故か途中、夕方早くにボゴロツコイという寒村に着岸して、そこで一泊することになっている。この村はニコラエフスクまであとわずか40キロというアムール河中流と下流の境にあつて、その波止場にはおんぼろの退役汽船が浮かんでいる。その義理にも清潔とは言えない船室に全員が宿泊させられる。そこで仮眠をとって、翌日6時頃銅鑼の音でたたき起こされ、再びメテオールの船客になる。しかしそこから先は4時間ほどで終着ニコラエフスクに到着するという具合である。



ニコラエフスクへは飛行機で飛ぶという手段もある。ハバロフスク空港の国内便専用搭乗口からニコラエフスク行きの小型機に乗る。しかしそれは、落ちない方が不思議な小型のトゥボレフ154で、おそらく軍用機を転用したものだろう。だからこれに乗るのには相応の覚悟が要る。し

かしさすが飛行機だけあつて四時間くらいでニコラエフスクの空港に着く。確かに早い。でも土地の人々にとって飛行機はやはり高価にすぎるので、大体がメテオールの愛用者である。そして確かに船の方が安全でもある。それに、この飛行便は我々外国人にとってもなんにも便利ではない。まずこの行便を日本で予約することは出来ない。だからハバロフスクの空港で並ぶか、ロシア航空の事務所などで何とか切符を手に入れる他はないが、予定どおり切符が手に入る保証はない。それに到着した空港でなんやかやと検査を受けるので、持ち物に注意しなければならない。さらにロシア人官憲とのやりとりでストレス障害に陥らないように心しなければならない。

とまれ、このメテオールか飛行機かのどちらかでなんとかニコラエフスク市までは着いたとしよう。しかしカリマはアムール河に沿ってニコラエフスクから20キロほど上流の村である。バスも鉄道もない。船でその20キロほどを溯るしかない。そのための公共交通手段はメテオールだけだから、今度は上りのメテオールに乗るのだが、ニコラエフスクに到着した日に、上りの便にうまく乗れる保証はない。大抵はニコラエフスク一泊ということになる。うまく上り便をつかめたとしてももう一越えある。メテオールはカリマに止まらないからである。だから直近のトゥルまで乗る。そこまではニコラエフスクから三カ所インノ

ケンチェフカ、マーゴ、タハタの途中駅に停まっただけで、一時間半ほどで着く。さて、問題は、トゥルからどうするかである。

### トゥルーカリマへの窓口

カリマへ行くための最後の目標がメテオルのトゥル波止場である。この「トゥル」という発音はニヴフ語で、今は土地の人もロシア人風にトゥイルと言う。

さて、カリマにまともな波止場がないせいで六キロ程行き過ぎて、トゥイルまで来てしまったのだが、ここからカリマまでは、バスなどという文明の利器は存在しないから、河岸を歩くか、土地の人に小舟で送ってもらうしかない。



初めてトゥイルに着いたとき、同行のタクサミ氏は、「まあ、何とかなるさ。歩いたってたいしたことはない。子供の時よく歩いたもんだ。」という。しかし奇跡が起こった。どうしようかと波止場で佇んでいると、アムールと称する小型ボートが一艘勢いよく砂浜に乗り上げてきた。それに乗っていた四人のうちの一人が「おー」と叫んで、突然タクサミ氏に抱きついてきたのである。私は啞然として眺めていたが、タクサミ氏が振り向いて「俺の従兄弟だ。15年ぶりだ」と言って、涙を浮かべて、私にその従兄弟グレゴリー・ニコラエヴィチ・チダー氏の手を握らせた。これで交通問題は氷解して、私たちはこのグリーシャのモーターボートに乗ってカリマに着き、彼の家に厄介になることになったのである。

ところで、1809年7月、間宮林蔵がトゥイルについて次のように報告している。「この日経し処にサンタンコエと名づくる地あり。其昔、魯齊匪賊ホンコー河を乗下し、此処に至て居家を営み、傍夷を撫して其産物をかすめ、此辺の地方を蚕食せんと欲せしに、満州夷の為に討せられ、敗走して其国に去りしと云（年代不知）。其時賊夷の建し者なりとて、此処の河岸高き処に黄土色の石碑2頭をたつ。林蔵船中よりの遠眺なれば、文字は彫刻せるや否をしらず。衆夷此処に至りぬる時は、齋す処の米・麦・粟・草実など川中に散してこの碑を遙拝す。其意如何をしらず。」『東鞆地方紀行巻下』p.155/156

このサンタンコエがトゥイルである。ホンコー河とは今の名でアムグン河のことである。この河はちょうどトゥイルとカリマの間に北西からアムール

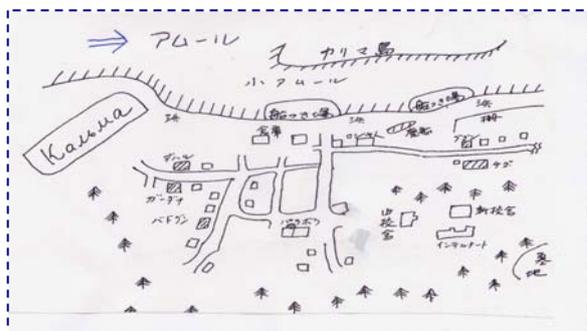


ルに流れ込む。合流地点には無数の中州と浅瀬があつて、何処が河の本体なのかまったく分からない。よほどの達人でないと近づいてはいけないという。

林蔵の時代、トゥイルの丘の上には石碑が立っていた。これはロシアの賊が建てたのではなく、永寧寺の境内に建てられた石碑（1413 及び 1428）のことである。永寧寺は、元時代の奴児哥（ヌルカン）郡司あとに明代に建てられたものであって、林蔵はこのことを知らされなかった。同行の「衆夷」がそれを拝して供物を水に捧げたのは、信仰習慣のためであつたらう。五百年にわたって永寧寺への信仰が記憶されてきたことに驚く。なおこの石碑二頭は現在共にウラジオストーク博物館（アルセーニエフ記念博物館）に移管されている（上の図がその石頭、2006年、呉人恵さん撮影）。

## チダー家の丘

ニヴフ族きっての名門チダー家の一族は波止場から100メートルほど川下の丘の上に



住んでいる。波止場から山手に向かって左手に折れると、小川に木の橋が架かっている。タクサミ氏によれば、この小川も昔ははるかに水量が豊かで、水もきれいだったので、よく手で掬って飲んだものだという。小川が涸れた

理由は分からない。森は切り開かれてはいない。産業を興した訳でもない。ただこの数年山火事が続いている。雪が少ないという。おそらく全般的な地球温暖化の影響かもしれない。

小川のともとにロシア人の一家が住んでいて、その奥さんらしい人が我々の通り過ぎるのをじっと眺めていたが、挨拶さえしない。とかくの噂でほとんど村八分の状態であるという。むしろ「あのロッチャ奴が。」と舌打ちするほどであった。「ロッチャ」というのはもともとニヴフ語で単にロシア人に対する民族呼称に過ぎないのだが、「彼はロッチャだがいい奴だ」というような表現から分かるように、決して中立的な表現ではない。ニヴフ人にとってロシア人はあくまで乱暴で残虐な異人であって、400年を超える植民地支配の歴史がこの言葉の背景を形作っている。

小川を越えると緩い丘が始まる。そのあたりが古くからのチダー一族の土地であるという。タクサミ氏もこの丘で生まれ育った。母がチダー家の娘だったので、彼はチダー家の外戚に当たる。彼の家は道路を隔てて本家の一段下にあったという。いま彼の家の跡には新しい平屋の家が建っていて、そこにはナーナイ人の小商人とそのユダヤ人の妻が住んでいた。彼らは犬を二匹屋敷内で繋いで飼



っていた。ニヴフは犬ぞりを使うので、昔から様々な種類の犬をたくさん飼う習慣をもっている。しかし原則として放し飼いである。放し飼いの犬はひどい喧嘩はしないし、人を襲わない。恐そうに見えても、吠えかかったり、咬みついたりすることはない。或る晩、タクサミ氏がこのナーナイ人に招待された。貴方の生まれた土地に住んでいるのですから、一度是非お食事をさしあげたいというのである。ところが懐かしい木戸をくぐった途端に茶色い大きなものがドーンとぶつかってきて、彼は左腕にひどい痛みを感じた。飼い犬が襲ったのである。幸い大した傷ではなかったので、消毒して包帯を巻いて手当をするだけで済んだ。ところが、このことから犬の飼い方をめぐってひと騒動がもちあがった。ニヴフは侵入者を襲う番犬というものを知らない。ニヴフの犬は、番犬でもペットでもなく、用犬である。犬糞の動力であり、魚の不要部分など廃棄物処理のために役立つから飼っているのである。つまり家畜そのものである。そういう文化を心得ないで、危険物を飼う者が身近に住んでいることは、ニヴフにとってはなほだ迷惑な話なのである。タクサミ氏の従兄弟グリーシャは、腕の傷に包帯を巻いてやりながら、異文化理解と混住というテーマについて小一時間も口角泡をとばしたのであった。

### ニヴフ人グリーシャ

グレゴリー・ニコライヴィッチ・チダー氏は名門チダー家の当主である。トゥイルからカリマまでの4キロほどを彼のモーターボートで送ってもらったのだが、ヤマハ製モーターの轟音の合間から彼が言う「あんた、おれの船のモーターも日本製だぜ。ヤマハさ。おれの名はグリーシャ。そう呼んでくれ。チュンネル（タクサミ）があんたのことをトルと呼んでいるから、おれもそうする。まあ、しばらくウチに泊まっていけよ。」



グリーシャは数年前に奥さんを亡くした。その後ひとりで娘を育てあげて、やっと娘に婿をとった。娘夫婦には本家の母屋に並んだ土地に二階建ての家を造って、そこに住ませた。彼自身は昔からの平屋に住んで、男やもめを続けている。男やもめに何とやらの類で、家の中も屋外の作業場やトイレなどは義理にもきれいとは言えない。乱雑に仕切られた家の中は娘が嫁にいったから一度も掃除をした形跡さえもない。私は彼女が使っていたベットを借りて寝たのだが、ベッドの下にはまだ娘のスリッパが脱ぎ捨ててあるままだという次第だった。台所の盥の中には去年収穫して砂糖煮しておいたアカスグリがジャムを通り越して、みごとに発酵して、すでに酒になってしまっているのだが、彼はそれをロシアパンに塗って食べる。少し不安であったが真似をしてみると、それはそれで

結構いける食べものであった。

普段は娘が一日に一度は父親の面倒を見に来るのだが、我々が厄介になっている間、彼女は、孫娘が喘息ぎみのために、ニコラエフスクの病院につれて行ってなかなか帰ってこなかった。そのためもあって、家は荒れ放題で、我々3人の男達もいい加減な暮らしをしていた。孫娘の喘息というのはこのところ毎年続く森林火災と関係があるに違いない。我々がカリマを最初に訪れた年は、殊にひどい火災がアムール地方を襲って、ハバロフスク



クの空港が煙で覆われる始末で、アムール河中流域では百メートルほどの視界もない。ニコラエフスクの港も何時閉鎖されるか分からないという程であった。森林火災はカリマ村にも迫ってきていて、村の山側に住んでいる人たちはいつでも逃げ出せるように大切な家財を袋に入れて積み上げていた(左図)。山に近い家の人たちは家財のつま

った袋を河岸の漁業コルホーズの前の広場まで運んでしまっていた。河岸にテントを張って、いつでも目の前の中州に避難できる態勢を整えていたのである。

グリーシャはカリマ漁業組合の組合長である。波止場の前の掘建小屋が彼の事務所でもあり、道具置場でもあり、酒場でもある。早朝四時にはチョウザメ漁に出かけ、八時頃には採れた魚を分配し、仲間とウオッカで豊漁を祝って一杯やるというのが、朝方の日課である。午後から会議が始まる。ソ連時代のコルホーズを引き継いだ漁業組合には難問が山積している。魚の種類を漁場別に細かく規制した漁業規則、上納金、販路の制約、資材の確保、更にソ連時代からの廃棄物の処理と利用法など、毎日何か問題が起こる。

アムールの魚は、個体が著しく減少している。チョウザメ漁は厳格な制限を守らなければ、今後の漁の保証はない。キャビアも昔の十分の一しか採れない。これではハバロフスクへもって行って高値で販売するなどにはもはや可能である。鮭鱒の遡上も少なくなり、漁量制限をさらに厳しくする必要がある。しかしグリーシャの不安はもっと深刻である。それはアムール河の全面的汚染であり、漁業の存立そのものである。アムールの漁業がこのまま衰退していけば、カリマ村の生業が消滅する。鮭鱒を主要な蛋白源としてきたニヴフの生活が破壊される。つまりニヴフが生き続けられなくなる。彼はことあるごとに、協同組合に仲間にこのことを訴える。ニヴフの仲間はみんな分かってくれていると彼は言う。

「ロシアのマフィアは別として」とかれは必ず付け加える。「じゃあ、どうすればいいんだ」が彼の口癖になってしまった。「まるでレーニンみたいだ」と彼は泣き笑いする。確かに彼の本棚にはレーニン著『何をなすべきか』が立っている。

私は彼のベッドの脇にある本棚に赤線がページ一杯に引かれて真っ赤になった 1955 年

版『経済学教科書』を見つけた。かつて私も昔ゼミで読ませられた本であった。そこに書かれていたソ連製社会主義経済の教条がこのアムールで通用するわけがない。しかし彼もソ連型の社会にニヴフの未来があると信じたのだろう。ソ連の末期、アムール沿岸のこの寒村にさえミサイル戦争用の衛星通信基地を建設しようとしたことがあった。村の広場に巨大なパラボラアンテナや通信用具が赤錆びたままで放置されている。その傍にはこのがらくたを運んだトラックまでが十年間そのままの形で居座っている。その周りを放し飼いの牛が草を喰む。絶妙なコントラストとでも言わなければなるまい。

「お前はいいよ。若いときに村を出て、学者になった。学問の世界でニヴフの役に立った。ニヴフの誉れだって言えば、その通りだよ。だけど、ここに住んでる奴はどうするんだ。何をすればよいのだ。それが分からないし、誰もそれを教えてくれる筈はないから、自分で考える他はないが、本当にシトー・ジェラーチ、それが分からないのだ。」

「昔は良かったなんて言うのは嘘だ。ロッチャ（ロシア人）が来てから何一ついいことなんかはなかった。しかしこのところはひどすぎる。何もかもロスケのマフィアにもっていかれた。コルホーズが潰れて、その後に漁業組合を立ち上げようとしたとき、初期資金にしようと思っていた小銭まで盗んでいきやがった。チュンネル、お前の言うニヴフ文化の再建などというのは、飯が食えるようになってからの話だ。俺だってニヴフ語くらいはいつでもいくらでもしゃべってやるさ。でもな、そんなことをして一文の得にでもなるか。」「トール、お前よく来た。でもな、ニヴフ語を聞かせるとか、ニヴフ語を守ろうとか何とか言うまえに俺たちがどういう暮らしをしているかをよく見ていってくれ。話に聞く日本と対等には言わないが、なんとか胸を張ってつきあえるようになるのはいつの時か知らないが、その時までニヴフ語とかニヴフ文化とかってものが生きてりゃ、それだけで万歳だ。どうだ、どうすりゃ、そうなるんだ。」



その二年後ふたたびカリマを訪れたとき、事態は全く改善されていなかった。グリーシャの娘さんが二人目の孫を育てていた。本家の隣に立つ彼女の家には、小銭がはいったのか、ウオッカの瓶がうず高く積まれていた。チダー家の親戚に当たる向かいの家では、グリーシャの甥が朝からウオッカを相当にきこしめしていた。とりわけ若者にとっては飲むしか楽しみがないのかもしれない。カリマの酔っぱらいは確実に増えていた。漁業がはかばかしくなく、他にこれといった仕事もない。カリマ村全体に慢性的アルコール依存症が蔓延していた。「シトー・ジェラーチ！ どうすれば、いいんだ！」も慢性的であった。

それから二年ほど経ったある夜、私は悪夢にうなされて真夜中に起きた。眠られぬままに、いま見た夢をタクサミ氏に宛ててメールで書き送った。



カリマ小学校

「カリマ村の河岸で、グリーシャと私は隣り合わせに銃をもって伏せて、次々と小舟で岸に上陸するロシア兵と銃撃を交わしていた。チェチェン戦争の真ただ中のような感じだった。カリマはグローズヌイだった。我々はロシア側の圧倒的

な砲火にさらされて、たちまちにチュンネルとグリーシャが学んだ小学校の木造校舎の前の縁の広場に追い立てられた。カリマ村はすでに壊滅状態であった。もう駄目かなとグリーシャと顔を見合わせたとき、我々二人をめぐって迫撃弾が降ってきた。」

### デハル氏とカリマ小学校

ある日、グレゴリー・ミハイロヴィッチ・デハル氏のお宅にお邪魔した。一家はカリマ村唯一の大通りから右手を入ったところに小綺麗なログハウスを建てて住んでいる。タクサミ氏の幼なじみであるという奥さんはハンティ人だが、それを聞けば、そういえば顔つきが少し西っぽいかと思われるが、それと分からぬくらいにニヴフに同化してしまっている。快活で博識の美女である。グレゴリー・ミハイロヴィッチは45年にわたってカリマ小学校の教師を務めた。病気のために校長を少し早めに定年退職してもう二年目になる。



ソ連政権が発足した頃、北方委員会という理想主義的な政府機関があった。そのころニヴフ語を含めていわゆる北方諸民族の言語にラテン式の書記法が作られ、母語の教育が推奨された。ニヴフ語のラテン式正書法は1926年には完成して、それを使ったニヴフ語教材も作られていた。しかし1937・38年のスターリンの大粛正によって多くのニヴフ人文化人が虐殺され、間もなく第2次世界大戦が始まった。ニヴフ語のラテン語表記は廃止されて、戦後まもなくロシア語表記法が強要された。しかし

公式の教科書はなかなか作られず、民族語の教科は事実上禁止されて、すべての教科がロシア語で教えられた。1970年代のブレジニエフ時代には「ソ連人」育成が国是とされ、ロシア文化への同化が強請された。当然のことに、少数民族の小学校でも民族語教育に対して強い圧力がかかった。それでも民族語教育を推進しようとするものは「民族主義

者」であり、トロツキー主義的国家反逆者の烙印が押されたものであった。もっとも学術研究の分野では、ソ連内少数民族の研究は細々とでも続けることができ、1960—70年代にも貴重な研究が営々と積み重ねられてきた、タクサミ氏の研究もその一つであった。また北方少数民族の教育のために専門の大学も作られた。レーニングラード（現 サンクト・ペテルブルグ）のゲルツェン記念教育大学がそれで、少数民族のエリート達は、この大学で学び、故郷に帰って、社会主義の理念とソ連への忠節とロシア文化への帰依と教えることが義務づけられたものであった。風向きに変化が見えだしたのは1980年代の後半、ゴルバチョフの主導によってペレストロイカとグラスノスチが発動されてからのことである。そしてそれは結局、ソ連という巨大暴力装置の崩壊をもたらしたのであった。

デハルさんは1950年代にゲルツェン大学を出て、郷里のカリマに帰った。そこで歴史と文学とロシア語を教えることになった。彼はニヴフの社会主義的建設について夢を語ったという。しかし同時にニヴフ民族の誇りについて、とりわけニヴフ語のすばらしさについて子供達に語りかけ続けてきた。しかし弾圧を受けた。何度もニコラエフスクへ呼び出され、「民族主義的偏見」を自己批判するように強要された。しかし彼は断固として弾圧に抵抗するという途を選ぶことは敢えてしなかった。それは危険すぎるし、元も子も無くしてしまうと考えたからである。表面は従順を装いながら、現実にはニヴフ語とニヴフ文化の教育を実践し続けたのである。



デハル氏のニヴフ語教育を支えたのはマリーナ・ニコラエーヴナ・パトカンス夫人（写真右）であった。彼女はもう40年もカリマ小学校のニヴフ語教師を務めてきた。昔は自分で教材を作って苦労したという。その教材はいつかまとめて後の役に立てたいとも語っていた。しかし今ではタクサミ・プフタ共著の『ブクヴァーリ（文字）』（1991年初版）などの教科書もある。この著者二人はともにカリマ村の出身者である。その縁もあって、子供に気が乗ってくるというのである。しかし問題はニヴフ語教員の後継者である。いまのところ彼女よりかなり年下のスラーヴァ・ペトロヴナ・カリマサマさんが手伝っているが、彼女に続く人が早く育って欲しいと切実に願っている。

## 伝承者カドナ夫人

デハルさんの真向かいにガリーナ・シャーリン・カドナ夫人が住んでいる。彼女は一人



暮らしで、さぞ不自由であろうと思われるが、何故一人暮らしになったかを聞くわけにはいかない。旧ソ連に生きた人々、とりわけ先住少数民族の人々に不幸の来歴を訪ねることほど犯罪的なことはない。何時どのようにして殺されたという話が出てくるかもしれないからである。カドナ夫人はカリマ村きっての民話伝承者である。話の途中にいつでも昔話が出てくる。その度にロシア語の会話が突然ニヴフ語に変わる。昔話の後にはしばらくニヴフ語の対話が続くこともある。ニヴフ語をよく知っている

人と一緒になければ、なかなかついていけない。いつかゆっくりと話してもらわなければと、機会をねらっているのだが、元気そうでもお年をめしておられるので、急がなければならぬ。カドナさんも小学校のニヴフ語の授業に大変協力してくれている由である。

カドナさんはタクサミ氏が小学校に通っていたときの先生だった。何十年ぶりに会った二人は何時間もさまざまな話をしてきた。話題は多く昔の同級生や先生たちに関わるので、録音も遠慮しなくてはならなかった。ニヴフ語で語られた伝承をいくつか聞いたかったのだが、それは別の機会にという仕儀になった。そして2005年の末、訃報を聞いた。お悔やみを言うと共に伝承を録音できなことが残念である。

## ヴァズグン一家

デハルさんの家から100メートルほど山側にニコライ・ジミトリ・ヴァズグンさんと奥さんのナジェージュダ・セルゲーエヴナさん一家が住んでいる。ニコライ・ジミトリさんはニヴフ人、奥さんのナジェージュダ・セルゲーエヴナさんはネギダール人である。家庭語はロシア語かニヴフ語であるという。ニコライさんは数年前カリマ小学校を定年退職して、好きな文学研究に打ち込んでいる。ナジェージュダさんはカリマ小学校及びカリマ・寄宿学校（インテルナート）の博物館長・図書館長の現役である。



ニコライさんは詩人でもある。何冊かの詩集を出版しているが、その小冊子を一冊いただいた。その中に次の詩がある。カリマの起源譚である。

## カリマ伝説

昔々から大きな太陽が  
何度も大地に夏を贈ってきた。  
昔からずーっと昔からだ  
子はその子にそう伝えてきた。

私達の先祖はものを言わなかった  
いやいやぼそぼそと言うばかりだった。  
でもそれではやはり心が痛むと  
神さまに毎日訴えたものだった。

ある時、嵐が荒れ狂った  
驚いてカモメたちが騒ぎ立て  
恐ろしい力で大波が盛り上がり  
泡も天まで立ち上がった。

波がこれでもかとばかり轟き  
どーんどーんと岩を打ちすえた。  
それでも翌朝、波は静まり、岬には  
イルカが何匹も打ち上げられていた。

人々は大喜びして踊りだし  
イルカの舌を鍋で煮た。  
みんなでご馳走を等分に  
イルカは有り難いと食べ合った。

その時ふと気がつくとうとしたことだろう、  
みんなみごとに歌を歌ってるんだ。  
よーし、決めよう。これからは  
この村をイルカって名前に。

こうして言葉が子孫に伝わった  
子供達には言葉が輝いて見えた  
その時からイルカの舌が  
天から私達に降ってきたんだとさ。

- 註1) イルカはニヴフ語でカルム qalm。ニヴフは鯨を大中小に分けて、大がポルジ pord<sup>1</sup>、中がケン qen、小がカルム qalm。このカルムがカリマ村の起源譚になった。
- 2) 「人々」とは原文でニヴフ。もともと人の意味。
- 3) 「舌」は舌でもことばでもある。原文はロシア語 jazyk。ニヴフ語では舌はフルフ hulx、言葉はティフ tif,dif,zif。この詩をニヴフ語にするとこのギャグが一つ落ちる。

### カリマ小学校

ニコライ・ジミトリ・ヴァズグンさんの夫人ナジェージダ・セルゲーエヴナさんにカリマ小学校を案内してもらった。カリマ小学校はタクサミ氏が幼い頃に学んだ学校で、1998年には二階建て木造の校舎も昔のままに残っていた。しかしさすがに床は抜け落ち、窓は破れ、階段は補修できないほどに壊れていた。そのためにこの由緒ある校舎の斜め前に1970年代に建てられた。旧校舎の筋向かいに築20年くらいの平屋のインテルナートが建っている。これがいま小中学校として使われている校舎だった。

インテルナートというのは、もともとトナカイ遊牧民や漁・猟師家庭など非定住民族の子供達を集めて教育するために作られた教育機関である。ロシア革命初期の若い情熱によって計画され実行された教育実践の具現であった。しかしその後、この教育機関は少数民族の同化、つまりロシア化の有効な道具になった。いくつもの異なった民族の子供達が親元を離れて共同生活を続けるのであるから、子供達言葉は共通語であるロシア語に統一されて、それ以外の言語を喋ると民族的特差別の対象になる。教師はほとんどがロシア人だった。少数民族出身の先生達がいたとしても、彼らも住民の全面的ロシア化を教育目標とした。この傾向には1970年代にブレジーニエフが共産党書記長兼国家元首となってからは一層拍車がかけられた。ロシア文化主導の「ソビエト人の創造」というのが教育の目標とされたのである。非ロシア人居住地域のインテルナートはこの教育原理の格好な実験場であった。民族的



特性の保持を歌いながらも全面的なソビエト化が進んだ。その後何年にもわたってレーニン・スターリンの肖像画の下で赤いネクタイをつけたピオネールのニヴフの少年少女達がガガーリン万歳と叫ぶ時代が続いたのである。

しかしカリマでは少し事情が違っていた。「インテルナートって言ってもね、みんなこの



村の子供ばかりでしたよ。ちょっと離れたところから来る子供達と一緒に寝て騒いでだけでした。小学校だけで十分だっていうのに、全国何処でもやっているからと言って、小学校のすぐそばに寄宿学校を建てたんですよ」と言ってナジェージダ・セルゲーエヴナは笑っていた。

古い小学校の壊れた校舎の二階の隅に「郷土博物教室」とでも名付けてもいいような小部屋がある。ソ連時代には大小の赤旗できれいに飾られていたであろうが、今はカリマ出身のニヴフの戦没者の写真が壁をうめているだけであった。しかし片隅にカリマ出身の著名人達の写真と顕彰文が張り出されていて、そのなかにはグリーシャのお父さん、すなわちタクサミ氏の伯父さんなどの写真に並んでタクサミ氏自身の若いときの写真も飾られていた。他にプフタ夫人がやはりニヴフの教育者として顕彰されていた。



図書室はインテルナートの方にあつた。ニヴフに関する文献は結構そろっていた。1930年代の始めに出版されたニヴフ語教科書もあった、タクサミ編『ニヴフ語・ロシア語辞典』、同『ロシア語・ニヴフ語辞典』も貸出用に10冊ずつ揃えてあつた。ナジェージダ・セルゲーエヴナさんが「これご覧なさいよ」といって大きな紙の束を一抱えもってきて、机の上に拵げた。何十枚ものニヴフ語壁新聞であった。ペレストロイカ以降カリマの子供達はカリナ夫人などから昔話を聞いたり、時事的な話題をニヴフ語で作文するなどして、定期的にニヴフ語で壁新聞を作ってきたのであつた。古い本や子供達が新しく作った貴重な文化財がこの小さな図書室にぎっしり詰まっていた。



その翌年、1998年の夏もひどく暑かった。アムール河は中流から下流にかけて再び森林火災の煙にすっぽりと覆われてしまった。カリマ村にも火の手が及んだ。川岸から一番森側にある旧小学校に火がついた。ついでインテルナートも燃え上がった。ナジェージ

ダ・セルゲーエヴナさんたちが駆けつけたときは、火の手がインテルナートの校舎をのみ込んでしまっていて、もう手のつけようもなかった。我々を案内してくれた小学校の博物室も新旧の宝物が詰まったインテルナートの図書室もすっかり灰になってしまった。

そのことを我々が知ったのは翌々年2000年の夏、三度目にカリマを訪れたときであった。我々はお金を集めてテレビとビデオを買って、カリマまで担いでいった。それを小学校に寄付してニヴフ語の教育に役立てて欲しいと思っただけのことである。川岸に降りて大きな段ボールの荷物を担いで小学校の方に向かって歩き出したときである。出迎えてくれた人が「そっちへ行ってもしようがないぞ」と叫ぶのである。聞いてみると、学校はもうない。去年の山火事で焼けてしまったという。我々一同ただ呆然として立っていると、デハル夫人が声高に何か叫びながらやってきて、「学校は焼けちゃったけれど、ニヴフ語の授業は家で続けてるんだよ。今日もこれから子供達がやってくるから、ちょうどよい。みんな家においで」という次第である。

デハル家のあまり広くない居間と寝室が教室の早変わりしていた。カリマ村は子供が多いところだと知ってはいたが、30人余りの子供達がぎゅうぎゅう詰めになってデハル先生の家にあつまっていた。そこへ我々一行5人とパトカン先生などが加わったのであるから、お客さんは廊下に並んで居間をのぞき込むという格好になった。居間の正面にプレゼントの大型のテレビとビデオが据えられて、我々研究班を代表して、中川裕さんがニヴフ語で挨拶をした。「日本からニヴフ語を習いに来ました。君たちもこの機械を使ってニヴフ語を習い続けてください。」デハル先生がわずかに横を向いて片手で目頭を押さえていた。一方子供達は早速にもアニメ映画でも見たくてしょうがない。しかし残念ながら我々はそれを用意していかなかった、今度来るときは自分達でニヴフ語アニメ教材を作ってもってこようと決心したものであった。

## アムールの山火事

アムール河は水が黒ずんでいる。中国語で黒竜江（Hei Long Jiang）、満州語でサハリエン・ウラ（黒い河）と呼ばれてきたとおりである。間宮林蔵はこの河をマンコー（満江）



と呼んだ。北東アジアの河は多く南か北の方向に流れているのだが、アムールだけは西から東へ流れる。河口は間宮海峡、別名タタール海峡。海峡へ出た水流はそこから北に向きをとり、樺太島の北端を巡ってオホーツク海に出る。オホーツク海が結氷して、北海道

東北海岸に流氷をもたらすのは、アムールの淡水が流れ込んで塩分が薄くなるからである。それに三千キロ余りの流域の広大なタイガから大量の栄養分を運び込む。流氷の下のプランクトンはこれによって繁殖する。オホーツク海の豊かさはアムールのお陰である。

← ハバロフスク近郊のアムール

アムールはバイカル湖の南東に源を

もつ。ロシア人がザ・バイカル（バイカルの先）と呼んだ地域、ブリヤートとモンゴルの土地から流れ出し、興安嶺を巡って、松花江を合わせて、沿海州の北、シホテ・アリン山脈の北端を北西に向かって流れ続ける。この河は古くから貴重な文物の交易のルートであった。14世紀元国の軍隊がこの河筋を通過して樺太に行政府を建てた。17世紀には「蝦夷錦」貿易が栄え、中国南部から何千キロのルートを通してアイヌの手から将軍や大名に売られたのである、韃靼産のタカの尾が大量に輸入されて、高級矢羽として戦国以来の武士に使われた。北方貿易は意外な規模で行われてきたのである。間宮林蔵が記録しているように、アムール河中流には清朝の交易所が設けられ、さまざまなツングース系の種族だけでなく、ニヴフもアイヌもこの交易に従事していた。彼らは豊かな交易の民であった。アムールの民は、ソ連の民族学者が愚かしくも記述したような、歴史から取り残された惨めな原住民では史上一度としてなかったのである（佐々木史郎『北方から来た交易民』NHKブックス No.772）。

間宮林蔵も「マンコー河は聞きしにも勝る大河にして」と書いているが、アムールは本当に大きい。カリマ村の向かいに小カリマという中の島があるが、そこを回って川中に出て、向こう岸をみると、遙か広い水面の向こうに芦原が続き、さらにその先にうっすらと対岸の山並みが望めるという具合である。

タクサミ氏と私がこの村を訪れたときは、アムール両岸の山火事が拡がって、焦げ臭い煙がアムールの水面の全域を覆い尽くしていた。ある朝グリーシャの家の寝床の中でラジオを聴いていると、「森林火災による煙のためにニコラエフスク港は当面全面封鎖とし、すべての船舶の入港を本日以降禁止する。封鎖解除の予



定は立っていない」という 煤煙に曇るカリマ アナウンスがあった。一大事である。

同行した津曲、風間両氏を含めて我々日本人三人の入国ビザの期限はあと三日しかない。タクサミ、ハザノヴァ、ペヴホフ氏らロシア人三人のサンクト・ペテルブルグ行きの飛行機の予約出発便も三日後と予約して

ある。タクサミ氏と私以外の友達ニコラエフスク近郊でフィールドワークをやっているのだから、私よりは条件がいいし、自分で何とかできるかも知れないが、やはり公務出張の予定は狂わせたくない。タクサミ氏と私は寝床から飛び起きて、早速グリーシャに折り入って相談をもちかけた。当然メテオールは走っていない。他の公的交通手段はない。グリーシャはしばらく考えた末に言った。「ニコラエフスク港には入れない。途中で捕まるかも知れない。しかし、よかろう、何とかして、おれが近くまで送ってやる。」

翌朝五時に起きて、外に出ると、チョウザメの生肉10キロ、鮭の干物十枚、イクラ小型バケツ一杯、パンの塊数個、ウオッカ四本、それに犬の毛皮のコート四枚が用意されていた。我々がそれらの物を担いで河岸に降りていくと、小柄なニヴフ人が一人で、四人乗りのボートのエンジンを点検していた。それが悪天候操船の名人セルゲイであった。どんな入り江でも浅瀬でも知っているという。セルゲイは「これはヤマハモーターだ。日本製で故障はしないから安心しろ」という。例の「アムール」という名のこの小型ボートである。平底の鉄製である。小回りが効いて安定しているようだ。タクサミ氏と私は後の席に座らせられて、犬毛のコートを頭からかぶせられた。間もなくボートはものすごい速度で走り出した。せいぜい50メートル先しか見えない水面を無茶苦茶な早さで走る、ときどき「誰か走ってるぞ」と言って、船を曲げるときにだけ横揺れがするくらいで、ひたすら見通しの効かない水面を滑る。2時間ほど走ったとき、セルゲイは河岸の見える入り江でエンジンを止めて、「一休みだ」といってチョウザメの生肉を切り分けて塩をつけ、それをウオッカで流し込む。黒パンにイクラを山盛りにして頬張る。しばらく船の流れに任せていると、葦の茂みに鶴が舞い降りた。よく見るとさまざまな水鳥が葦の茂みに隠れている。この茂みには小魚が集まるのだという。そしてまた怖しいスピードで走り出す。



「向こう岸へ回るぞ」といって大型船の航路を横切って、アムールの一番広い湾曲部を走ると、霧の中を五キロほど行ったところで波止場が見えてきた。マーゴである。そこから30分ほど走ったところで、グリーシャが言う。「これ以上はもう駄目だ。監視の船がいる。俺達はここから引き返すから、お前達はこのへんから車を拾って、何とかニコラエフスクへたどり着け」という。イノケンチェフカ村の海岸であった。煙と濃霧の中を小型船アムールで大河アムールを四時間あまりも走ったのである。まかり間違ったら、もちろん命はない。しかしグリーシャもセルゲイも平気なものであった。慣れているのか剛胆であるだけなのか分からない。多分両方な



のであろう。こうした我々はグリーシャと別れた。

「また来いよー」と彼は霧のアムールに浮かぶアムールから手を振った。我々も再会を誓って手を振った。

イノケンチェフカの海岸をよたよたと歩いて、村にたどり着いたのではあるが、村には一人っ子一人居ない。人々は鮭の遡上の情報を得て、村全体が漁に出てしまっていた。いくら待っても誰も帰ってこない。我々はグリーシャに分けてもらった鮭の干物で飢えを凌いで、やっとニコラエフスクへいく車を見つけて、ニコラエフスクにたどり着いた。なんとか無事に仲間と合流できたのであった。

## 2. イノケンチェフカ村の人たち

### 旧レーニン漁業コルホーズ

アムール河が河口に向かって真西に曲がった個所の北岸にイノケンチェフカという村がある、ニコラエフスクから西に30キロほどで、定期バスも日に四本ばかり走っている。この名は英語のイノセンスと同じく「純潔だ」という意味のラテン語起源の言葉で、何故かロシア人の男の子の名前によく使われる。この村の前に広がるアムールは広大と言うほかはない。良く晴れた日に南東を見ると、向こう岸らしいものがうっすらと見えるだけである。



煙霧のイノケンチェフカ

それもその筈で、アムールはこの町の岸まで真北に流れて、そこで北岸を大きく挟んで真西に曲がるのだから、方向を間違ったら何処まで行ってもどこの岸にも着かずに河面をただらうろろするだけになってしまう。

この村の西の五キロ程先で大支流アムグン河がアムールに注ぐ。アムールに帰ってきた鮭や鱒はここでアムール奔流を南下するか、アムグン河を遡るかの二手に分かれる。ソ連時代以来アムグンはアムール本流に比べて重金属汚染がいくらか軽いので、アムグンを選んで遡る魚の方が多いという。イノケンチェフカ村はこの分岐点の東側にあるから、遡上する魚が最も多い大変に良い漁場である。魚で生きてきたニヴフ人は昔からこのあたりの岸に多く住んでいた。旧ソ連はニヴフの生業を集団化することを目論んで、1960年代末に近在のニヴフの部落を解体して、現在のイノケンチェフカへ強制的に集団移住させて、「レーニン・コルホーズ」という国営集団企業を作った。

しかし1991年にソ連が崩壊して、国営企業が存立しなくなったとき、コルホーズの可動資産、トラック、トラクターなどは言うまでもなく、およそ取り外せる機械の類はこ

とごとくロシア人経営者たちと一緒にいつの間にかどこかに消えてしまった。残ったのは魚の処理台と廃屋と、それに流れ者のロシア系下級労働者だけであった。

インノケンチェフカ村全体の総人口は、約280人、そのうちニヴフ人が168人、ウリチ人4人、エヴェンキ人5人、ヤクート人5人という具合で、残り100人ほどがロシア人などである。このあたりの人口を調べたガリーナ・ジェヴィヤーノヴナ・ロークさんによると、この居残りロシア人は、役人、下級技術者、その他の半浮浪者ということであった。

タクサミ、ローク、金子の三人が初めてこの村を訪れたとき、私達は何故か分からぬままに、鉄筋コンクリート建ての村役場へつれていかれた。タクサミが来るぞという情報がニコラエフスクの役所からでも伝わっていたからであろう。何と言ってもタクサミ氏といえば、ソ連邦北方民族会議議長を務めた北方少数民族の代表者、ペテルブルクの考古学民族学博物館の館長である。ニヴフ族の英雄である。ニヴフ人を多く抱える地方の寒村としては相応の待遇をしなければ、あとから問題が起ころかねないと判断したのであろう。

村役場の前にはニヴフ人の主だった人たち10人ほどががやがや何かを話しながら集まっていた。やがて彼らをかき分けてロシア娘が現れ、我々に「どうぞこちらへ」という。つれて行かれた先は村長の執務室であった。

派手な衣服に大柄の体躯を包んだロシア女が出迎えて、私が村長の何某ですと言う。タクサミ氏が礼を返すと、何で特にここへ来たかと詰問する。タクサミ氏は、ニヴフの古老に会って話を聞くこと、ニヴフ語教育の現状について知りたいこと、それにこの村のニヴフの人たちの生活を見て意見を効きたいから来たと説明した。彼女は、我々の訪問の理由が主として文化問題であると聞いて安心したらしく、「私はマガダン地区の村からこちらへ回されて間もないが、コルホーズ解体後の生活条件はこちらの方が悪い。施設の修理などが自前の財源ではできない。労働意欲に問題がある、州からの資金が不十分である」などと一気にまくしたてた。一段落して、今まで外で待っていたニヴフ住民代表が招き入れられ、雰囲気のがらりと変わった。ニヴフの住民達は強い味方がいるとばかりに、日頃の鬱憤をはらすかのように、口々に文句を言い出した。一つ一つ具体的数字を挙げて新村営企業の給料がこのところ3週間遅配している、公共施設の改善要求を何度も出したが、いまだに履行されていない、居残っているロシア人に比べると労働条件がわるい、などにとロシア人村長を非難し始めた。村長はいままでの威勢はどこへやら、いつもと違うニヴフ住民の発言にたじたじとなつて、そのことは午後に住民集会があるのだから、そこで具体的に話そうと言いつつ出した。ニヴフ住民側もその返答に折れて、予期しなかった村長への要求事項は午後にまわそうということを手を打った。

## グダン家の人達

その日の午後にはタクサミ氏がニヴフと北方諸民族の現状と課題について講演をする予定になっていた。それに引き続いてタクサミ氏を交えてニヴフ住の集会を開くという予定もきまっていた。それまでにまだ数時間ある。私達一行は集会までの時間をグダン家で過ごすことになった。グダン家はもとカリマの出身で、本家が今の世代になってインノケンチェフカ村へ移ってきたという。確かにカリマのグダン家はチダー家の向かいにあったが、老婦人と数人の若者が居ただけだった。それにひ



メテオール船中で

き替えインノケンチェフカのグダン家は今の代になってからであるにもかかわらず、もう何軒もの親戚をまわりに持つようになっている。

もともと私達一行がこの村にくるようになったには偶然の出会いという因縁があった。ハバロフスクからニコラエフスクに向かうメテオールの船内で、タクサミ氏がニヴフ人らしい夫人を見かけて話しかけた。聞いてみると昔カリマ村でチダー家の向かいに住んでいた人の娘さんであることが分かった。今はインノケンチェフカ村に住んでいるという。そこでお婆さんは健在か云々という話になる。そこで、なにはともあれ、その村を訪れて、古い知り合いのお婆さんに再会しようということになったものである。

この村のグダン家の媪たちは実によくニヴフ語ができる。我々はその日の昼食をグダン家でご馳走になり、グダン家の長老であるアンナ・ニコラエーヴナさん（右）と隣に住むお婆さんとの対話を録音することが出来た。彼女は80才くらいだと思っていたら、何と65才だという。生活の苦勞が偲ばれる老い方である。お孫さんや親戚の人達も呼ばれて、にぎやかな昼食になった。



様々な種類のサケとチョウザメの料理、それに魚とベリーの和えものなどが所狭しとばかり机の上に並べられた。穀類は米をよく食べるという。中国産であった。村のマガジーン、つまり小型スーパーマーケットで易く手に入るそうである。またそば米

を炊いたものもご馳走になった。それもラプシャと名付けられるロシア式の薄い粥ではなく、ご飯風に炊いたものである。このようなそば粥はアムール一帯で昔から食べられている。むしろこれが本来の蕎麦の食べ方なのかも知れない。

会話はロシア語だけで行われた。孫の世代はもうニヴフ語はできないそうである。アンナ・ニコラエヴナさんも親子でニヴフ語を使うことはないという。村に二・三人いる同年の友達との会話でもせいぜい単語が出てくるだけで、ニヴフ語で対話することはもうなくなって久しいとのことである。

## ニヴフ住民討論集会

食事も録音も済まないうちに、子供が使いに来て、みんな集まったから早く来いという。村の海岸に近い道路に「北方民族文化会館」と看板を掛けた建物がある。村の人達の工芸品などが展示されているそうであるが、それを見るゆとりがない。文化会館の向かい合わせに今日の講演会兼住民集会の開かれる村民文化センターがある。こちらの方が集会所らしくてかなり広い。

私達がついたときにはすでに30人ほどのニヴフ人が集まっていて、まもなく例のロシア女の村長さんもお供をひき連れてやってきた。お供の女性は、これも中年のロシア女性で、インターネットの校長さんだそうで、少数民族教育に関心をもっている由であった。村長が我々三人を紹介したあとで、タクサミ氏が記念講演をした。静かな語り口の、上手な講演である。

「私自身はカリマの出身で、若いときレニングラードへ出た。そこで勉強をして、ロシア人と結婚して、娘を一人もうけた。娘は私の生まれ故郷に来たことはない。ずっとロシアの西の端で生まれ育ち、そこで大学へいった。母がロシア人であるので、自分自身はロシア人であると自己規定している。しかし父親の私は違う。私は自分の民族とその文化を決して忘れたことはない。あくまでニヴフである。ニヴフがロシア人の娘をもっているということになる。

私は今サンクト・ペテブルグの考古学民族学博物館の館長を務めて、毎日そのために働いている。久々に郷里へ帰ってきて見るに、ニヴフの生活は、ロシア全土がそうであるように、確かにソ連時代に比べて決して楽ではない。この町もコルホーズが解体されて、段階的に自由経済が導入された。それで生活が良くなるかと私も期待した。しかしむしろ苦



しくなった。当面解決不可能な経済的問題はたくさんある。それを処理するにはまだ何年かかるだろう。なんとか努力したい。

そして経済的・政治的な問題だけでなく、ニ

ヴフの文化の問題についてももう一度考えてみてほしい。ここに日本からニヴフの文化と言語の問題に大きな関心を持っている私の友人を連れてきた。私達ニヴフとニヴフの文化は日本でも関心を持たれていることの証拠がここにある。私達の伝統文化をどう残すか、言語をどう復活させるかという問題についてもこの機会に是非さまざまな角度から考えてほしい。ロシア共和国の北方民族会議もいくつかの提案をしている、具体的な政策を計画している。それを参考にしてこの町でも、ロシアの北方民族の一つであるニヴフの将来を創造して行ってほしい。」

タクサミ氏は一時間ほどインノケンチェフカのニヴフ人に熱っぽく語りかけた。

フロアからニヴフ自身の問題ではなく、ロシア共和国内の他の少数民族の状況についての質問がいくつかあった。ところがある青年が、

同席していた村長に質問したいと切り出したとたんに、会場の様子が一変した。第一は、鮭鱒漁業権配分に関する不公平是正の問題についての質問だった。コルホーズ解体後にできた村営漁業組合へ納める収穫量が個人消費分に比べて多すぎて、組合から支払われる給料に見合っていない。



次いで、更に具体的な問題が出た。端境期に関わる賃金の支払いが滞っているが、支払予定は村の予算上どのような処置をするつもりか。網、ガソリンなどの配分予定はどうなっているか。教育資金の配分はどうなっているのかまったく不明瞭であるなどなど。ニヴフ人の男女とも活発に、時に興奮して村長と教育長にたいして鋭い行政批判を続けたのであった。

経済的問題に関する議論がたまたま沈静したときには、文化と教育に関する具体的な問題に話題が及ぶことがあった。国費や村の予算から教育にまわる資金が少なすぎて、このままでは学級の閉鎖もあり得るという訴えがあった。村長はニコラエフスクの当局に頼んではいるのだが、今のところ文教予算は減る一方であって、どうしようもないと繰り返すばかりであった。

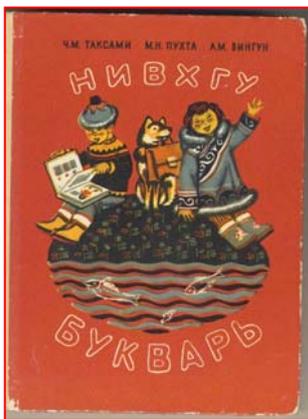
### インノケンチェフカ村のニヴフ語教育

この村の学校ではかねてから教科としてニヴフ語を教える計画があった。しかしいい教師がいなかった。グダン媪は決して壮健と言うわけではないので、お願いするわけにもいかない。ニヴフ語を教えられる人は他に村全体でせいぜい二三人しかいない。誰もが結構な



歳で引き受けてくれない。困っていたら、若い孫娘のワレンチェヴァ・セルゲーナ・グダン夫人（右図の女性）が、子育てにも一段落したので、その役を何とか引き受けてくれそうになった。彼女はハバロフスク大学でロシア文化を専攻して村に帰って来たのだが、ニヴフ語は小さい頃からおばあさんに教

えられていた。しかし体系的な教育となるとまったく自信がなかった。そこでハバロフスク時代に買っておいた辞書と教科書を読み直した。タクサミ編『ニヴフ語－ロシア語辞典』と『ロシア語－ニヴフ語辞典』（共に1983年度出版）とタクサミ・プフタ・ヴィンゲン編『ニヴフ文字』（初級教科書）とタクサミ・ポレイチェヴァ編『虹』（中級読本）を頼りに勉強した。分からないことがあると、お祖母さんに教えてもらった。



こうして村の学校でニヴフ語教室が始めた。近所の人達が見物に来た。最初、生徒は10人不足だったが、ともかくも、正規のニヴフ語の授業が始まった。今では、この授業に関心をもって続けて熱心に出席するようになった生徒は20人を越える。そろそろ先生が足りない。ワレンチェヴァさんを補助する助手がほしい。若いニヴフ語の教師を養成する場所は、ロシア全土でおそらくただ一つ、ペテルブルクのゲルツェン記念国立教育大学北方民族学部のニヴフ語科だけである。そこにはサハリン出身のガシーロヴァさんがいる。しかしそこでも若い教師が十分に育っているわけでもない。当時、ガシーロヴァさんが唯一のニヴフ語担当専任として働いていた、タクサミ氏も週に一度そこへ非常勤講師を務めていただけだった。だから教師養成問題はタクサミ氏自身の問題でもあった。かれも同じ問題を抱えていたわけである。誰もがそう簡単に解決できる問題ではないと分かっている。彼は、地元で一人二人と育てて、その人達をペテルブルクに送って何年かかけて育てるしかない、まずはお互い頑張ろうじゃないかと答えた。これが唯一のまともな回答というわけである。だからこそそれから数年後の今、彼は人類学考古学博物館長のを定年退職してから北方民族研究所（学部から昇格）の正任教授としてニヴフ語教師の養成に当たっているわけである。

教科書と辞書については、アムール方言用にタクサミ編のものが必要最低限にはあって、初等教育には十分である。これは彼女のように自主的にニヴフ語を教えているひとにとっては貴重な教材である。そしてこの教科書を使いこなせる若いニヴフ語教師の養成こそが当面の最大の問題であることは間違いない。

インノケンチェフカ村でもニヴフ語を話せる人は数人に限られている、どなたもすでに60歳を越える。そして年寄り同士が集まっているときでも、ニヴフ語で話をするのはまずないという。また家族の会話ではロシア語しか使われない。若い世代がニヴフ語を理

解できないからである。この村は、人口の半分以上がニヴフであるにもかかわらず、ニヴフ語はすでに老人の記憶のなかの言葉にすぎない。ニヴフ語の継承は二世代にわたって断絶しているのである。タクサミ氏が訴えたように、この村でのニヴフ語の再生は「外国語としてのニヴフ語教育」から始める他はない。みずからそのようにしてお婆さんのことばを学んできたワレンチェヴァさんの働きは実際に大きいな試みなのである。どうしたらそれを支えていけるか、それがいま問われている。

### 3. アムール河口の村々

最初にこの地域を訪れたのは、1998年夏のことであった。文部省（当時）の研究補助金を使って、タクサミ氏、ロク氏と金子の三人がチームを組んで、アムール北岸を訪ね



た。もともとの計画では、ニコラエフスクを基地にして、まず河口まで行って、さらに河口に沿って2キロほど北上しオーゼルナハまで行くつもりだった。そこにはニヴフが何家族か住んでいるという話だった。まずはその人に出会ってから、小舟を頼んで河口を横切って、南岸の岬の町まで行ってみようというつもりだった。アムール河が間宮海峡を作っている一帯をアムール潟（アムールスキー・リマン）と言うが、北岸のオーゼルナハから南岸プロング岬までの

水上距離は20キロあまりある。しかし天気によっては向こう岸が見えることもあるそうだ。よほど晴れて風がない日ならば、船を出してくれるかも知れないと期待した。

ニコラエフスク・ナ・アムーレに「北方諸民族会館」がある（会館についてはI-5「ニコラエフスク」の項参照）。会館の世話をしているのは、北方民族文化センターの会長さんでもあるマリア・カンジンコさん、ナーナイ族だと言っ



ていた。大変に親切な夫人である。夫のディミトリーさんはオルチャ族だという。このディミトリーさんがご自分の自慢の日産車で全行程を面倒みてやろうと言ってくれた。結構な年代物の車で、しかも道路はところどころしか舗装されていない。だいたい穴ぼこの砂利道なので、大いに心配ではあったが、彼の腕を信頼してお願いすることになったものである。

#### オレミフ村の人達

ニコラエフスクから10キロほど東に走ったところにパラヴィンカという村がある。そ

ここにはニブジー一族のニヴフが昔から住んでいる。タクサミ氏の知り合いの人々はまだ十分



にニヴフ語を話すというので、立ち寄ってみることにした。しかし村に入って見ると、人気がない。道路脇のマガジン（キオスク）に立ち寄って訪ねてみると、ニブジー家の老夫婦はニコラエフスクの病院に入っているという。その他の村人達はというと、昨日からカラフト鱒が上り始めたというので、総出

で定置網を揚げに出たということであった。

パラヴィンカを後にして次の目的地オレミフ村に向かった。オレミフまではパラヴィンカから30キロ余り。総人口250人ほどの漁村である。ニヴフ人の家族が30軒ほど、約140人、ネギダール人が20家族、約60人ほどが住んでいる。他にはニヴフ人とロシア人、ニヴフ人とネギダール人が結婚した家族が何軒かあるという。ほとんどが先住民の家族によって占められたというめずらしい村である。

しかしこの村も、ロシア共和国の僻地の例にもれず、失業者が多く、一日中アルコール浸りで過ごす若者があちこちにたむろしていた。それでも当時すでに明るい兆しもないではなかった。ソ連製のコルホーズが解体された後に、村人たちの経営になる漁業協同組合が出来ていた。ソ連時代の診療所からロシア人医師がいなくなった後に、サナトリウムも作られていた。村人がロシア人の医師を呼んできたという。看護師はニヴフ人の娘達である。先住民の村人達が村の要職にあった。農協の会計主任、小学校の数学の教師、三軒あるマガジンの経営者などがニヴフ人達であるという。

### アンナ・イワーノヴナ

オレミフ村でヴズグン一家を訪ねたとき、アンナ・イワーノヴナさんが丁度サケを三枚おろしと五枚おろしにしてマーを作っているところだった。

マーというのはニヴフ語で一般に干し魚を意味するが、ただマーと言えば、鮭鱒を開いて干したトバのことを言う。ただおろし方に何通りかあって、頭を切り取り、腹を抜いて、中骨を取るところまではどの方法も共通しているが、そこから違う。三枚おろしでは、左右の皮付き肉の部分のまま干す。一方、五枚おろしの場合は、中の肉だけの部分を別に取り分けて、その外側の皮付きの部分と別に干す。中身が一番高級なマーとなる。おろした魚肉には一枚ずつ尾に近いところに切り目を付けて、そこへ干し棒を通す。紐でつるすようなことはしない。それ



を庭の軒下に吊し、硬くなるまで干上げる。イクラは勿論貴重品である。ニヴフ語でフグルという。ただフグルというと鮭鱒の生卵のことで、それを干したものの別の名で呼ぶ。それはコムクという。頭はスープにも入れるが、サケの頭のとっぺんにあるヒズ（氷頭）もやはり貴重品である。ニヴフ語でプクという。一家の主人とか賓客しか食べられないそうである。スープの残りの頭や腹と骨はニヴフの大切な家畜であるイヌの餌になる。しかし白子、つまり鮭の精囊を食べるのは見たことがない。これはイヌの栄養源なのだろうか。



アンナ・イヴァーノヴナはまだ64歳だった。しかしこの国では女性の平均寿命が65歳なので、老婆のうちにはいる。ご主人はいない。どうして亡くなったかを聞くことなどは到底できることではない。病気かも知れない、事故かも知れない、とにかくこの国では何でも起こりえるからである。ただ彼女には40歳近い息子が二人いる。長男は失業中で、別居してどこかで暮らしている。次男は中型船の船長であるが、今のところ遠出の仕事がないので、アンナと一緒に暮らしている。しかし間もなくまた船に乗る仕事があると意気込んでいた。



アンナの住む家は丸太づくりで古く少し傾げている。仕切のある部屋は三つ、それに台所と土間の仕事部屋が付く。調度品はどれも古く汚れて、掃除とか整頓とかはさしあたって念頭にはないように見える。船長の次男はテレビを見たり、友達と飲んだりして日々を過ごす。アンナは明るい働き者であるが、次男と自分との食料をなんとか自給するために一日働きずくめである。部屋を片づける余裕などはない。

ニヴフの家にはきまって裏に100坪未満の菜園がある。そこで芋と根菜と薬物を育てる。そこで一年中の食料と翌年のための種を作る。マガジンで買うものは、ロシア式の黒パン、穀類、調味料、それに韓国製のカップラーメンなどに限られる。タンパク質は基本的に鮭鱒から摂る。しかし一家で入手できる鮭鱒の匹数は法的に規制されていて、その年



は22匹だった。もっともロシアの法規の常で、その拘束力は無いに等しい。特に次男が海の商売だから、その気になれば、多少の融通は利く。けれども一家の生活の水準は、現在の北方の寒村の家庭の例に漏れず、極貧というほかはない。では食っていけないのかというと、そうではない。ある意味では、古くからのニヴフの伝統的生活様式

に従って、それなりに食べていけていると言うのである。今の深刻な問題はアルコールである。家の物置小屋の後ろに何十本ものウオットカの空き瓶が山積みになっていた。僅かに手に入る現金がほとんど質の悪い酒に化けてしまっている証拠である。

この村ではアンナを含めて二・三人の60歳代の人達がまだニヴフ語を話すことが出来るという。しかしもう一つ下の世代になると、幼年期からインテルナートと称する寄宿学校で教育を受けた人達であるから、この世代になると、ひと言もニヴフ語を知らない。お婆さんの言っていることはひと言も分からない。ニヴフ語は昔々の言葉であって、全くの「外国語」である。流行の英語よりも馴染みがない。そしてこの村にはニヴフ語の伝統文化や言語を守ろうという人はひとりもないようだ。ただ、民族的な漁労方法だけは受け継がれている。栄養源が鮭鱒に限られているという理由からだろうか、基本的生業の中に伝統漁労だけが生き残っているという。



アンナ・イワーノヴナの家を後にしようとしたとき、彼女がそこまで乗せていってくれという。ガンコーランが今ちょうど熟れているから、それを採りに行きたいと言う。ガンコーランの群生するところは秘中の秘だし、滅多にお目にかかるイチゴではない。彼女を乗せていくどころか、私達もその群生地を見たい。そこで一行は浜辺の森のなかへ分け入った。夕方、アンナがいくつかの籠にいっぱいイチゴを摘んで帰ったのはいうまでもない。

#### チェルドバツハ村—一つの典型—

オレミフから東に10キロばかりいったところにチェルドバツハという寒村がある。この村は大きく開けたアムール潟に面して、前は間宮海峡の北部なので、水は北に流れている。晴れた日にはアムールの南岸とサハリンの西岸が一望できるという。私達一行が訪れた日は確かに晴れてはいたが、アムール沿岸は奥地までかなりの森林火災が起きていたので、その煙で視界が効かない。西南に対岸らしい影がかすかに見えるだけだった。もともとの私達の計画では4人乗りのモーターボートを一艘やとって、アムール河口を横断して向こう岸のプロング岬まで行くはずだった。しかし誰に聞いても、この視界ではそれは到底無理だし、いまの晴れもう長続きしそうもない、それだけは諦めるように忠告された。翌日になって振り返ってみると、確かに風が出て、白波が立った。土地の人の天気に関する知見は尊重しなければ命を落としかねない。



その日はそれで南岸に渡るのを諦めて、むしろチェルドバツハから陸路北に向かおうと考えた。この先のオゼルナツハ村とその先にプイルにはニヴフ村があると聞いていたからである。しかしそれも無理だった。チェルドバツハから出ようとして道路脇を見ると、「この先通行止め」の立て札が立てられていたからである。これも言うことを聞いておかなければ危ない。それでチェルドバツハにゆっくりすることになったが、しかしそれはそれで収穫があった。

チェルドバツハ村の人口は今100人に満たない。しかしかつては十数軒のニヴフ家族とネギダール人やナーナイ人の数家族が住む安定した村落だった。間宮海峡に開けた豊富な漁場をもち、盛んな鮭鱒漁業と加工の基地として機能していた。1970年代にはニヴフ人によって自発的に漁業コルホーズが設立されて、村を挙げての共同作業が順調に進められたという。

しかし1980年の始めに不幸がやってきた。ニコラエフスク地方行政機関がコルホーズの脇に地域漁業訓練場なるものを建設した(上図)。木造平屋建ての大きな家に20余りの粗末な部屋を作り、そこに秋の漁期をねらって集中的にロシア人の若者を一部屋に5・6人詰め込んで、定置網の仕掛け方から魚の冷蔵に至る作業を実地研修させたのである。更に訓練場の製品をごっそりとニコラエフスクやハバロフスクへ輸送し、そこで缶詰に加工してソ連中央の都市部へ輸送した。

このためにニヴフの漁業は潰れた。コルホーズのメンバーは一人また一人と村を去って、ニコラエフスクへ出て行くものもあれば、親戚を頼って遠い部落に落ちついた者もかなりいたという話である。そして今日この村に残った者といえば、僅かに二軒、ホトコン家とカルフ家の一族10人足らずだけになってしまった。



インノケンチ・ミハイロヴィッチ・カルフさん(下左図手前)はこのカルフ家の長老である。といってもまだ60歳代で、先祖はタクサミ氏と同じカリマの出身で、幼い頃よく一緒に遊んだものだという。インノケンチさんの奥さんは病気で伏せていて家事もままならない。この村には病院がないし、ニコラ

エフスクまで通うまでの金はない。薬も飲んでいないようにみえた。

夫婦には三人の息子がいる。三人とも失業中で、きまった現金収入はない。目の前の海でとれた鮭鱒を時々生のままでおんぼろのサイドカーに載せてオレミフやニコラエフスクまで運んで売る。これが唯一の現金収入となる。一家の食べ物は岸近くで捕った魚と裏庭の作物しかない。冬の焚き物はと聞くと、流木とロシア人の家だという答えが返ってき

た。

カルフ一家は旧ニヴフ部落の一等地の高台に住んでいて、かねてからニヴフ部落の尊敬をあつめていた旧家である。そしてもう一軒村に残ったのは50メートルほど先にあるホトコン家である。この家族も生活にゆとりがありそうにも見えないが、それでも娘をニコラエフスクの実業学校に通わせている。彼女はあか抜けた美人で、カルフ家の三人の息子の憧れの的らしいのだが、当の娘は同じ村の若者にはまったく興味をしめさない。彼女が下手にニコラエフスクのロシア人でもつかまえたら、村は同胞をまた一人失う羽目になる。結局、この世代に村の将来を託すのは無理な注文なのかも知れない。

カルフとホトコンのニヴフ人家族の他に、この村にはネギダールとナーナイの数家族が海岸にへばりつくように暮らしている。どの家もひどいあばら屋で、凍てつくアムールの冬をどう乗り切るのはなはだ心許ない。どの家もツングースらしくブタとイヌを飼っている。どれも放し飼いである。河岸では子供達が裸足でイヌと追いかけてこしていた。学校に通っている様子はない。数年ほど前には近くにインテルナート（寄宿学校）があったというが、それも今は潰れてしまった。一番近い学校はオレミフにあるが、よほど都合がいいときにサイドカーに乗せていってもらえるだけだそう。あとは毎日イヌと河岸を走り回り、岸に打ち上げられた半死のサケを拾って帰ってそれを夕食に食べるだけである。



ロシア人も何人かはその辺に住んでいる。空き家になった訓練施設や資材置き場などに住んでいるらしい。ときどき町へ出かけては盗品のバイクなどでおそらくそれも盗品の品物を売りに来る。黒パンは2ルーブル、カップラーメンが3ルーブルでもってくる。ハルフ家の息子とはバイクの部品などを交換しあうなどのつきあいがあるらしい。ロシア人はここでもやはり要注意である。

二軒のニヴフ家族、昔からのネギダールとナーナイの貧困家族、それに食い詰め者のルースキ(ニヴフ人はロシア人をこうも蔑称する)、これがチェルドバツハ村の全住民である。彼らはアムールの恵みである鮭鱒を毎日、そしてそれだけを栄養源として摂って、やっと飢えをしのいでいる。この土地にかつて安定したニヴフ人の集落があったことを思うと、ソ連時代のコルホーズ建設後に推進されたロシア人の植民と漁業訓練施設の建設などの一連の政策が先住民の生活を根底から破壊した。これが取り返しのきかない犯罪行為であったことを思い知らされる。タクサミ氏と私は、それを思って、「これはカタストローフだ」と溜息をついた。この村の状況は今日ニヴフ人と北方民族全体が歩んだ辛苦の途の一つの

典型と見てよい。しかも全ての例の中の最悪の典型であろう。カルフ老は「出口がない、それが見つからないんだよ」という言葉だけを何度もニヴフ語でつぶやいた。私はもう少しニヴフ語をはなしていただけないかと何度か頼もうと思った。しかしその言葉はとても口に出せなかった。この悲惨の最中に、言語保持のためにニヴフを話してくれなどどうして頼むことができようか。それが実感であった。

定置網で何匹かの鮭を捕る



此处も昔は良い漁場だった



あの辺りに大きな村があった



## 4. ニコラエフスクの人々

### ニコラエフスクというところ

ニコラエフスクはアムール河口ただ一つの都会である。間宮海峡のアムールスキ・リマンと称するアムール河口の潟から30キロほど入った北岸にある。この町は古くからの港町で、旧ソ連時代には北方艦隊の基地と司令部があった。一時は海軍の兵隊であふれ、上級の軍人の家が建ち並んでいた。軍に群がる施設が町中に広がり、往時は人口5万人を越える軍港都市だった。しかし北方艦隊の解体とともにかつ



ての栄華はいま跡形もない。2万人以上の軍関係者がロシアのどこかに帰還して、町の大通りを飾っていた将校用住宅は取り壊されて、廃墟のまま無惨な姿をさらしている。今もこの町に残っているロシア人は殆どが落ちぶれた食い詰め者たちで、道路工事などで食いつなぐか、さもなければ名目上は失業中である。しかしかれらとて食わなければならない。そこで何らかのマフィアに属して日常的に悪行を働くことになる。マフィアの手下になれない者達は、老人から若者にいたるまで、朝からウオットカをがぶ飲みして、公園で寝るか、さもなければ、町をただごろついている。しかし行政府はソ連時代と同様に今もロシア人に握られていて、その上の方は当然マフィアと繋がっている。むしろ行政府自身がマフィアの事務所を兼ねているというべきかも知れない。そのために余所者がこの町に滞在するためには警察の許可が要るだけでなく、ちょっとしたお金を包まなければ、写真一枚自由に撮ることさえ出来ない。私達一行の調査のためには、タクサミ氏がわざわざ市役所へ出向いて、ペテルブルク人類学考古学博物館館長と元北方民族協議会議長という肩書きを利用して可能な限りの自由を許可してもらった。さもなければ、私達が滞在するだけでも、科学研究費からなにがしかを包まなければならない羽目になったことだろう。そしてそんな項目は会計報告に計上できないはずである。

ニコラエフスクの人口は今のところ約2万人余りである。ニヴフ人だけで750人は住んでいるという。ニヴフに次いで多いのはナーナイ人、ウリチ人、ヤクート人などである。この人達はずいぶんと古くから自分の木造家屋に住んでいたが、ソ連時代に集団住宅に移り住んだ。それがソ連式の「近代化」だった。多くが鉄筋の入っていないコンクリート六階建てアパートである。どの家の壁にもラジオが付設されている。モスクワからのニュースと音楽、地方ニュースと行政からの指示が一日24時間放送される。かつてはスイッチを切ってはいけなかったという。それが習い性になって、今でも一日中モスクワ仕立ての

音楽をかけっぱなしにしている人が多い。

ニコラエフスクに行くには二通りの方法がある。一つはハバロフスクからニコラエフスク空港へ飛ぶ方法である。一日一便が飛んでいる。飛行機はトゥボレフ 154



(右図)、義理にも安全だとは言えない。仮に事故があっても公表されないのではないかとさえ思う。乗客名簿などはないから、故郷の家族には何となく知らせて、覚悟してもらっておかなければならない。



もう一つはやはりハバロフスクからメテオル (=流星、左図) と称する高速水中翼船でたどり着く方法である。こちらの方が安全であるが、本来なら10時間くらいで着くところを途中強制的にボロツコイ波止場で一泊させられる。古い廃船をホテルと称して、狭く汚れた六人部屋に泊めさせられる。そして翌朝10時頃ニコラエフスクの港に入港する。ニコラエフスクエラエフスクの波止場は、旧軍港の片隅に作られているが、町に行くには旧軍事施設の空き地を通ってしたたか歩かなければならない。

ニコラエフスクの町はアムール河にそって長い広い道路、ソヴィエツカヤ街を中心に出来ている。河に沿って広い公園が作られていて、本来は美しい古い町である。この通りにそって市庁舎などの建物が建ち並び、港湾近くにはまだ昔の賑わいをうかがわせる商店が建ち並んでいる。旧繁華街には日本人の立てた商館もあって、キオスクとして今も使われている。

### 「尼港事件」のこと

ニコラエフスクの町は19世紀の中葉までまだロシア人の小さな哨所があるだけで、後に次第にロシア海軍の軍港として整備されるに至った。しかし20世紀になるとロシア人からも、日本人からもオホーツク海の軍事的にまた漁業基地としても重要視されはじめた。



日本商店跡

1910年には島田元太郎が市街の中心部に島田商店を営んで、オホーツク鮭鱒漁業の根拠地としていた。いわゆる尼港事件が起こった1919年の人口統計によると、日本人が291人、中国人2、329人、朝鮮人916人がこの町に住んでいたという(原暉之『シベリア出兵』1989, p. 523から)。

「尼港事件」というのは、欧米連合国と日本帝国による反ロシア革命干渉戦争の最中に起こった悲惨な事件で

ある。1917年末にペテルグラード（現サンクト・ペテルブルグ）で始まったロシア革命は、各地でパルチザン戦争を展開して、コルチャック軍団などの反革命勢力を駆逐しながら次第に東進し、1919年末までには極東の各地で革命政権を樹立するにいたった。この間ロシア革命の進展を阻止しようと、アメリカ・イギリスを盟主とする連合国が反革命干渉戦争を展開したが、日本も早速にこれに荷担し、干渉戦争の開始と同時にニコラエフクにも陸戦隊を派遣し、その後しばらくこの町の軍事的支配権を握っていた。しかし1920年の2月に「ニコラエフスク地区赤軍」と称するパルチザン部隊が町に入城し、現地の日本軍の守備隊と一時的に和平協定を結んだ。その後、赤軍と日本軍との間にはロシア白衛軍の処置を巡って何度か深刻な交渉があったが、遂に3月11日の深夜日本軍は赤軍の本部を急襲した。この奇襲は赤軍本部を焼失させるなど緒戦で成功を収めたようにみえたが、たちまち意外に頑強な抵抗を受けて日本側は遂に敗北した。多くの在留日本人がこの急襲に参加して、島田商会に立てこもって闘い戦死した。この戦闘の直後、勝利した赤軍は生き残った在留邦人と軍人の多数を虐殺した。その数700人という。これが第一次の尼港事件と言われるものである。



革命軍司令部跡

第二次の尼港事件はその3ヶ月後に起こった。日本軍は失地回復のために日本海経由で軍艦を送った。しかしこのときアムール河口付近を含む「サハリン州」ではロシア中央政府の緩衝国家極東共和国創設計画に反対する過激派パルチザンの一派がすでに政治・軍事的支配権を握っていた。彼らはサハリン島内で反過激派に対する大量虐殺を行った後に、海峡を渡って、ニコラエフスクを占領し、そこを基点にハバロフスク、ウラジオストックに進出しようと計画していた。ちょうどその頃、日本軍がニコラエフスクに接近してきたのであるが、彼らは当面日本軍の上陸を阻止できないと判断して、アムゲン河下流方面に撤退を試みた。その際に日本人捕虜130人を含む反過激派を虐殺し、ニコラエフスク市街に火を放って、全域を焦土と化した。この市街の硝煙を島田元太郎も艦上から眺めたという（原 同上書）。しかし反政府的な過激派も事件のわずか一ヶ月後に、より理性的な革命勢力によって壊滅させられ、ニコラエフスクはロシア革命軍正統派が支配することになった。これが第二次の尼港事件である。

このよう二度にわたる「尼港事件」を経てニコラエフスクにソ連共産党政府の支配が確立するのであるが、ニコラエフスク博物館にはこの事件に関して一室が設けられて、いくつかの資料が展示されている。しかし写真などに付けられた解説はソ連時代の公式見解であって、実際の史料と違っているものが多い。ある時タクサミ氏が尼港事件の記念碑を見にいこうと市内のゴーリキー公園に私を案内してくれた。しかしそれはどこにももうなか



った。1970年代までは確かに立っていたという。今はその場所に「大祖国戦争英雄記念碑」という仰々しい石像が立っているだけである。タクサミ氏は、外国人にかかわる歴史的事績を撤去してそれを不細工な彫刻と取り替えるというソ連とロシア人の非人間的な処置について怒

りを込めて語ったものであった。

### 「北方民族の家」

ニコラエフスクの街の中心ソヴェツカヤ大通りの中程に、「北方民族の家」（右図）が立っている。人々は単に「センター」と呼ぶが、正式には「先住北方諸民族文化センター」といって、「北方諸民族協議会ニコラエフスク支部」が運営することになっている。隣には鉱物収拾で著名なニコラエフスク博物館があったが、それがゴーリキー街に移転したので、その建物もセンターが使えることになっているという。共に広い公園を隔てて港が見える閑静な一角にある。



私達がニコラエフスクで最初に草鞋を脱いだのはこのセンターだった。センター長のカンジンコさんが港まで迎えに来てくれていて、早速センターの応接室へ案内されたからであった。一休みしたら、早速に歓迎会であった。歓迎会が開かれる広間には伝統文化保存クラブの人達が作ってきた作品が壁一杯に展示されている。それを一つ一つ見ていると、何か懐かしい顔ぶれの人々が次々に集まってくる。鍋をかかえてくる人もいれば、深皿を持ってくる人もいる。そのうちにテーブルがしつらえられて、持ち寄りのご馳走がびっしりと並べられた。センター長のアレオ・アレクサンドロヴナ・カンジンコさんが「さあ、タクサミさん、貴方はここへ」などとみんなを席につかせる。

カンジンコさん（下図中央）はナーナイ人であり、夫のディミトリ氏はオルチャだと言っていた。近在のマーゴ村からはネギダール人の夫人が二人やってきた。津曲敏郎さんと風間伸次郎さんは早速にこの人達と話し込んでしまった。カンジンコさんが「さあ、皆さん」と叫んでも、話はとうてい終わらない。明日からすぐにマーゴへ行ってネギダール語の聞き取り調査をする段取りを決めてしまったそうである。インノケンチェフカからは昨日船中で知り合ったグダン家の人達が友



達をつれてかけつけてくれた。私はウリチだという夫人もいた。「じゃあ、オルチャじゃないの」と聞くと、「いいえ、私はウリチ、本当はナーニなんだけれど、でもお祖父さんはアイヌだってよ。」という。さっぱり分からなくなってきた。これはゆっくりと確かめなければと思っていると、カンジンコさんの歓迎挨拶が始まってしまった。

センターは毎日のように講習会を開いている。民族工芸品の制作と民俗芸能の伝承が主な内容であるが、まだ指導者は十分いるとのことである。但し、民族語の講習はしていない。少なくともナーナイ語、ネギダール語、ニヴフ語の講習には十分に先生を確保できるのだが、生徒が集まらないということだった。しかし問題はむしろそこにはないようだ。いくつもの少数民族が住んでいる地域で、それら全体のための協議会が個別民族語の教育に抵抗を感じるのは当然であろう。共通語を求めるのがむしろ自然の成り行きである。その場合共通語はロシア語であるが、それが現実にはそれぞれの民族語を消滅の危機に陥れてきた元凶でもある。つまりこのような地域で今、民族語を教育する意義が見いだせないのである。もしその意義を見いだすとすれば、それは実際的な意義ではなく、むしろ理念的なものにすぎないであろう。北方諸民族協議会の内部で、伝統芸能の継承とならんで、民族語の再生のもつ意味を改めてじっくりと討議してから歩み出す必要がある。しかしその議論はまだ始まっていない。

### ニコラエフスク民族舞踊大会

私達がニコラエフスクに着いた翌日、民族芸能大会が予定されていた。会場はセンターのホールである。近在の村々からもたくさんのグループが独自の出し物をもって集まってきた。それぞれにこの一年間熱心に稽古した成果を発表しようというのである。小学生から青年までの20を越える団体が次々に舞台上に上って民族舞踊を披露した。どれも上手な出来映えではあった。しかし何故か違和感が残る。その最大の要因は民族音楽がほとんどロシア的にアレンジされていることである。それは伝統的音階によるのではなく、全ての民族音楽がロシア民謡風の半音優位のメロディーに変わってしまっている。しかもこの変化は500年もの接触の間に培われたロシア化の結果とは思えない。むしろソ連時代後、特に「大祖国戦争」の熱狂とその後半数十年間に起こった一般的な流れのようである。



違和感のもう一つの原因は民族混淆的な振り付けにある。とりわけニヴフ、ネギダール、ナーナイの衣装やしぐさが混ぜ合わされている。事実、踊り手たちも必ずしも民族別に編成されていない。ニヴフのグループにネギダールが何人か加わっているという具合である。



しかしこの民族と様式の混淆は、生活の実態そのものでもある。ひとつの地域に混住して仲良く暮らしているのだから、生活様式も芸能の様式も混じり合って当然である。決して目くじらをたてる筋合いのものではない。それは余所者の勝手な思いこみというものであろう。しかしやはりある種の歴史のペダンティズムが欲しいと思うのは、無理というものだろうか。

### ニコラエフスクのニヴフ人

ジナイダ・ニコラエヴァ・チダー夫人は海軍病院の歯科医であった。カリマ村の名家チダー家の長女だけであって、高貴な物腰の知性豊かな女性である。カリマ村のグリーシャの姉でタクサミ氏の従姉である。ソ連時代に北方艦隊・オホーツク艦隊の基地として繁栄したニコラエフスクには直接に海軍軍人のための施設で多くの人々が働いていただけではない。学校も病院もあった。とりわけ海軍病院は当時の一級の施設を持ち、多くの優れた医師と看護婦が配置されて、海軍軍人だけでなく、一般の人も病院を利用することができた。ソ連が崩壊してオホーツク艦隊が解体されたとき、当然、海軍病院も消滅した。彼女も職を失い、失業手当さえ当たらなかった。しかしフルシチョフカと呼ばれる粗製濫造な集合住宅の3DKのアパートメントだけはそのままに使うことが許された。彼女はその一室に使い古しの医療器具を持ち込んで、町の人たちに歯を治療している。もちろん何ほどの収入にもならないが、町のひとびとは大喜びである。ニヴフやウルチの人々はサケやチャウザメを手みやげに持ってきては、治療の後にはサンクト・ペテルブルグから取り寄せた高級紅茶でお茶飲み話をして帰るといふわけである。娘が一人いて、ハバロフスク大学で英語を勉強している、将来はジャーリストになりたいということであった。

チダー夫人のように海軍解体後に職を失ったひとびとはかなりの数にのぼる。その人達は小売店や床屋を開いたり、昔賑わった軍港の棧橋付近で闇市風の店を経営したりしている。しかし町全体の購買力は惨めなほど低下していて、生活必需品がたまたま売れる程度の商売にしかならない。町には活気というものがまったくと言ってよいほど見られない。そしてもっと多くの人々が失業中である。

夫を亡くした後、ブリヤート人と再婚して年金生活を営むニヴフの老婦人と出会った。昔は海軍の軍事施設で働いてそれほど悪くない生活だったという。同じように海軍時代の年金で生活している先住民族の人々は意外に多い。ニコラエフスク全体でニヴフだけで7

50人あまりが住んでいるとのことであった。そしてこの人々の生活は楽ではないが、ロシア人のような荒れた惨めさは感じられない。現金収入はパンを買うのにやっと間に合う程度だが、それでも気楽に生活している。さすがに原住民である。

タマーラ・ニコラエヴァ・バヴァレンコさん(右図)もそんなニヴフ夫人の一人である。タマーラさんはアムール河口南岸の間宮海峡に突き出たプロング半島の寒村アレフカの出身、完璧なニヴフ語話者である。ニコラエフスクの住宅街で5階建て築40年ほどのアパートに住んでいる。早くに夫を亡くして、海軍の雑役で働いていたが、今は年金暮らしである。息子達は



それぞれに独立して、郷里の村で漁業をしたり、オホーツク漁業に出たりしているという。タクサミ氏と私は彼女のお宅で一部屋づつ借りて一ヶ月ほどお世話になった。日本人もニヴフと同じく生魚を食べると聞いて、朝はチョウザメの生卵、つまり無塩キャビアをいただいた。夜はチョウザメの肉のステーキ、翌日はまたサケのステーキとイクラという具合であった。たまには穀類が食べたいと言うと、蕎麦粥にサケの焼身をのせる。健康で立派な食生活をさせてもらった。それだけではない。タクサミ氏との対話はほとんどニヴフ語だったので、ニヴフ語の会話というものがどう弾むかを教えていただいた。

センターでノンナ・ペトローヴナ・ザレーダローヴァさんと知り合った。彼女はアムールもかなりの上流のブラーバの出身で、ウリチ族だという。日本人が来たと聞いて何となく懐かしくてやってきたという。何故?と聞くと、「おじいさんがアイヌでね、名前も忘れちゃったけれど、南樺太の出身だった。昔からアムール地域に住んでいるのかどうかは分からないけど、故郷にちゃんとアイヌ名の墓がある」という話だった。数日後お宅に招待されて大変なご馳走になった(左図)。その時ご主人に会ったのだが、彼はナーナイだという。立派な木造の新築にたくさんのトバが干してあった。賑やかで幸せな家である。



### マリア・ニコラエーヴナ

故マリア・ニコラエーヴナ・プフタさんに初めて出会ったのは1998年のことだった。北方民族センターが私達一行のために歓迎会を開いてくれた夕べにプフタさんが出席してくれていた。タクサミ氏と共著の『ニヴフ語文字』1991の共著者として名は知ってい

た。プフタさんが席についたとき、同僚のロクさんが「あの人がプフタさんだよ」と耳打ちしてくれた。上品な媼である。しかしまだ60歳代の半ばであろうか。背をきちんと伸ばしかなかい笑みを浮かべながら隣の人と話し合っていた。



プフタさんはカリマ村の出身で、1960年代にパンフィーロフが『ニヴフ語文法』（1965刊）を書くためにカリマで言語資料を集めていたとき、彼の主なインフォーマントだった。当時20歳代だったろう。彼の主な研究協力者であった。私達が今日この本で出会うニヴフ語文の多くは若いプフタさんのことばである。その後、彼女はレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）のゲルツェン記念教育大学に進学して、ロシア語・ロシア文化を学ぶ。卒業まもなく郷里に帰り、当時多くの先住民族の才媛がそうであったように、ロシア語・ロシア文学の教師として働いた。主な赴任地はニコラエフスクとその近郊だったという。

ロシア語・ロシア文化の教育という仕事に勤しみながらも、プフタさんは母語ニヴフ語のことを一日も忘れなかった。1980年代にペレストロイカが始まって、人々の自発的行動に対する政治的制約が溶けかかってからは、どうしてもニヴフ語を子供たちに伝え残そうという意欲がますます強くなっていった。少しずつではあったが、ニヴフの子供達にあてた本を書きはじめた。小さな子から母語を教えなければと、一歳から教えるニヴフ語の教科書を書き始めた。ニヴフ人の若い母親に覚えてほしいと願ったのである。

センターでの歓迎会の翌日、プフタさんから連絡をいただいた。相談があるという。昼下がりセンターでお目にかかるとう、実はニヴフ語会話帳の原稿をもっているのだけれどなかなか出版に漕ぎつけられないで困っているというお話だった。その年、私達の科学研究費プロジェクトでは、ニヴフの文化に関する映像資料とニヴフ語のビデオ教材を作るという計画を立てていた。ニヴフ語の教科書を作るつもりはなかったのう、すぐに色よい返事ができなかった。しかし帰国してもその話が耳に残ってしようがない。ニヴフの人達のおかれている現状を見るにつけ、今はビデオ教材でなくもよい、物語のパンフレットでも会話帳でもなんでもよい、できるだけ多くの多彩なニヴフ語の教材がニヴフの子供たちにはすぐにでも必要なのだという声がか幻聴のように聞こえ、念頭を去らなくなってしまった。どうしてすぐにでもプフタさんの会話手帖を作るという仕事に手を貸そうとしなかったのか悔やまれてならなかった。申し訳のないことをしてしまった。

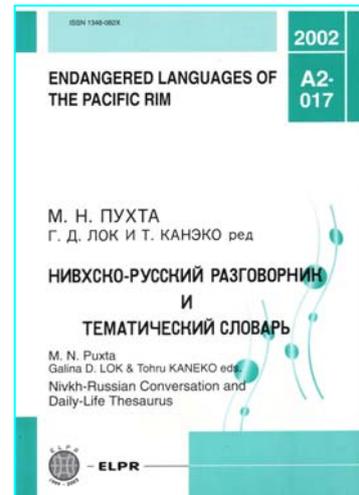
次の年の夏、ニコラエフスクへ飛んだ。早速、丹菊逸治氏とともに私はプフタさんをお宅に訪ねた。昨年の非礼と短慮を詫びて、お書きになった教科書の出版のためにお手伝いをしたしますと申し上げた。プフタさんは大変喜んでくれた。私達はニヴフ式にイクラと

サケとチョウザメをたっぷりとご馳走になって、原稿をお借りした。

原稿のデジタル化を始めたが、これが予想以上に面倒な仕事になった。いくつかの問題を解決するために、私は何度か旧知のガリーナ・ジェレミャーノヴナ・ロークさんに相談にのってもらった。ノグリキの彼女のお宅に通って、日に8時間10日ほどをかけて、原稿をチェックして、なんとか大体の問題についてだいたい処理の見当をつけた。しかしプフタさんから原稿を預かってから2年も経っていた。それでも日本語の訳をつけた原稿がやっと出来上がった。折しも科学研究費の文部科学省特定緩急領域(A)「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」がこの原稿を出版してくれることになった。こうしてマリア・ニコラエーヴナ・プフタ著、G. D. ローク編『ロシア語－ニヴフ語会話帳及びニヴフ語－ロシア語分類語彙集』(2002)が出来上がった。

出版数は250部だった。200部は「現地還元用」なので、私はまずプフタさんに送った。20冊一パックにして5回ほど送ったところで、プフタさんから手紙が来て、「ありがとう。本当にありがとう。ニヴフ民族とその子供達にとって大事業ですよ」と言ってくれた。その手紙の端に、カリマのグリーシャ当てに20冊、インノケンチェフカに20冊などと送り先が書いてあった。

しかし翌年の8月、訃報が届いた。プフタさんが亡くなった。ハバロフスクの病院で息をひきとったそうである。葬儀はすんでいた。駆けつけることも物理的に無理ではあったが、それもかなわなかった。



## II. サハリンのニヴフの人たち

### 1, 追悼 リーヂア・ヂェレミヤノヴナ・キーモヴァさん

#### 四姉妹

リーヂア・ヂェレミヤノヴナ・キーモヴァ（旧姓テヴク）さんは四人姉妹の長女だった。次女はナターリアさん、手芸家であり音楽家でもある。三女がガリーナさん、民族学者でノグリキ博物館副館長、私たちの研究グループの古い仲間である。四女がアレキサン



ドラさん、ニヴフ語月刊新聞『ニヴフ・ディフ』の編集者である。

リーヂアさんはアムール河口に面した樺太北西海岸の小村テニギの生まれ、北樺太方言（アムール方言に近い）で育った。

「ロシア語はペテルブルクで習ったの」と言って、今も本物のニヴフ語を闊達に話していた。

リーヂアさんは15歳でレニングラードに赴き、当時モイカ運河の岸に建っていたゲルツェン教育大学で数学と製図を学んだ。卒業後しばらくはウランバートルなどの高校で数学を教えた。そこでブリヤート人のウルマン・キーモヴァさんと結婚した。

リーヂアさんは1970年代の始めに再びサハリンに帰ってきた。しかし生まれ故郷の村にではなく、北サハリンの中心地ノグリキ市近郊カタングリにある中学校に教職を得て、そこに住むことにした。関心は専らニヴフの文化にあった。教職の傍ら、まず白樺樹皮や魚皮の手芸に打ち込んだ。たちまちに才能が顕現して、見事な刺繍の長衣までもが次々に作られた。展覧会が随所で開催されて、その度に国際的な賞賛を受けた。いくつかの作品はペテルブルクの人類学考古学博物館、通称「クンストカメラ」などのほか、大阪の国立民族学博物館や北海道白老町のアイヌ民族博物館でも見られる。



リーヂアさんは絵描きでもあった。私が何度か泊めていただいた部屋には斬新な色調のアブストラクトが何枚も掛かっていた。一方では、おとなしい水彩もよく描いた。私が戴いて家の玄関に掛けてあるのは、トゥミ川の冬の魚釣りを描いた美しい水彩で、リーヂアさんの優しさを偲ばせる。

お嬢さんがシチリアに居る。イタリア人と結婚してかなりの遠くへ行ってしまった。それでも時にはオリーブ油やシチリアワインが送られてくるし、リーヂアさんも「ちょっと

ワイン飲んでくるわ」と言って気軽にシチリアに出かける。この極少数民族の家族にとって世界はそう広くはないようだ。

そのリーヂアさんが2003年8月28日に亡くなった。まだ64歳だった。肝臓腫瘍だったという。その前の年(2002年)の末にユージノ・サハリンスクのシュテルンベルグ会議でお目にかかった時は、変わらず美しく太っておられて、「これイタリアものよ」とワイングラスを結構傾けておられたから、ご病気とは考えられなかった。それなのに、もうあのリーヂアさんとお目にかかれたいとはとうてい想像もつかない。

### 劇団「北の風の地」

リーヂアさんはブリヤートで郷愁が疼いたという。夫の生まれた土地が嫌いだというのではない。私はやっぱりニヴフなんだと思い始めてから、北風の吹くサハリンの地がどうしようもなく懐かしくなった。ニヴフの白樺の皮細工、サケ革の小物入れや靴、民族衣装と刺繍、そういったものを自分で作りたくなった。実際にブリヤートのフェルトを使ってニヴフ風の帽子を作って、それに伝統的なニヴフ刺繍をほどこしてみた(右図)。しかしブリヤートにはバイカル湖はあっても、サケの上るトイミ河はない。草原は広いが、テンの棲む森がない。それに流氷の海がない。



リーヂアは夫を説得して、とうとうサハリンに帰ってきた。1970年代の中頃だったと言う。ノグリキに帰って、中学校で数学と絵画を教えながら、刺繍と細工に熱中した。絵を描いた。アブストラクトも水彩もなんでもやってみた。布を編んで刺繍を付けた。それを着て自分の振り付けで踊った。リーヂアの仕事はたちまち認められて、間もなく民族芸能マイスターの称号をもらった。



ミフ」と言う名をつけた。ロシアの西で学んで

中央ナターリアさん

いたときから、懐かしんでいた「北の風」に因んだ名前をつけた。

劇団の出し物はニヴフの民族音楽と民族舞踊、自前で刺繍を施した衣装を着て、自分で作った楽器で演奏をする。そしてリーヂアのこの仕事を支えてくれたのが直ぐ下の妹ナタ

ーリアさんだった。ナターリアさん自身も刺繍の芸能マイスターで、何時だったか、お宅でご馳走になったときに、ご自分が美しい刺繍をほどこした靴をいただいた(右図)。それに彼女は民族楽器トゥンレン(III-2「トゥンレン」の項参照)のすぐれた演奏家でもある。



リーヂア・ナターリアの姉妹二人を軸に結成された劇団「北の風の地」はこれまでに何度もロシア各地で公演を行ってきた。また1993年の「世界先住民族年」北海道大会では札幌でも公演をした。この北海道公演がリーヂアさんたちにその後も頻繁に北海道へ来るきっかけになった。アイヌの団体が催し物を企画すると、「北の風の地」が直ぐにやってくるという慣習ができてしまったようだ。

公演の度にナターリアさんはちょっと寄り道をする。彼女は網走が好きだという。北海道立北方民族博物館を訪れて、山の上を散策することを楽しみにしている。しばらく網走に住んでいたこともあった。気候と風土が生まれ故郷にそっくりだし、流氷をとんとんと渡っていけば、ノグリキに着くような気がするので、特にその季節の網走が良いと言う。この人達はやはりオホーツク文化人の末裔なのだろうか。

### 「ニヴフ民族文化センター」

リーヂアさんの秘めた目論見は、ノグリキに「ニヴフ民族文化センター」を作ることにあった。ある日の夕方、食器をかたづけたテーブルの上に何か黒い物体をどかんと載せた。

「これはね、古いニヴフの冬の家よ」。縮尺25分の1の模型だった。それは半地下式の防空壕みたいな穴蔵で、南側に数段の階段がついて、2メートルほどの土間に入る。骨組みは木、それを独特な仕方で縄を使って縛り合せてある。土間の中央には炉が掘ってあり、斜めに煙突が突き出ている。とても暖かいのだそうである。



翌日、ノグリキの街の東の端に立つ市立地域博物館で、昨夜テーブルに置かれた模型の倍のサイズのものが、同じ大きさの夏の家と並んで展示されているのを見た。リーヂアさんの説明では、この冬の家と夏の家を野外に実物の数倍の大き



さで丈夫に作って、その周りに新しい博物館と教育施設を配置する。教育施設では、民族芸能の伝承だけでなく、もう殆ど消えかかっているニヴフの母語を、二つの主要方言それぞれに分けて教える計画だという。もう展示物もかなり集まっているし、教育施設の図面も引いてあるという。「この家を中心にして、ここに学校を建てて、ここはニヴフ語教室、ここは刺繍教室になるの...」とリーヂアさんは言う。「ただニヴフはみんな貧乏でしょう。オランダやアメリカやそれに日本の企業がノグリキのすぐ沖で石油を掘り返して儲けてい

るでしょう。サハリン1・サハリン2に参加している企業がね、地域民族還元分として資金を出してくれないかな？」

私はこの話を何度もサハリンに支店を持つ銀行やジャーナリズムの知り合いに話してはみた。不景気の最中のことであったから、「地域少数民族の小さい望み」などに聞く耳を持つ人は無かった。たしかにサハリン・エナジーは先住民族のためにいろいろなサービスを提供してきた。シュテルンベルク会議が開けたのもその援助があったからではある。しかしニヴフの人達は本当に貧しい。それに現在の市立ニグリキ地域博物館の建物はあまりにも惨めだ。ましてやノグリキの「ニヴフ民族文化センター」の建設に資金を出そうという話はまだ聞かない。確かに、ニヴフの人たちの間にもさまざまな異見はあるが、リーヂアさんの夢に共鳴する人は多かった。だが、いまリーヂアを失って、彼女と多くのニヴフの人たちの夢を実現する道はまだ何処かに在るのだろうか。（「残された夢」『言語』 vol. 33. no. 1. (2004-1)所収）



## 2. ウラジミール・ミハイロヴィッチ・サンギさん

サンギさんは1935年、ノグリキ近郊のナビル村の漁師の家に生まれた。サハリン出身の国際的に高い評価を受けている作家である。同時に少数民族の具体的な諸問題についてもかねてから積極的な発言をしていて、サハリン州では州政府の重要な顧問役である。とりわけ州政府内部で働くライグンさんやアチョートキナさんや先住民族問題を担当する有為の政府関係者にとってかけがえのない助言者でもある。

### ニヴフの作家サンギ

サンギさんは、20歳の時ノグリキの高等学校を出て直ぐにレニングラードのゲルツェン記念国立教育大学に進み、民族学と歴史学を学んで、6年後の58年にサハリンに帰ってきた。郷里で教職に就いて郷土史、特に北方民族の文化史を教えながら、ノグリキ地区教育監査官の役を務めた。この頃、サンギさんは精力的にサハリン先住民族の民話と伝説を集めていた。とりわけニヴフ族のさまざまな家系についてサハリン中をくまなく歩いて詳しい調査をおこなった。その最初の成果が1961年に出版された『ニヴフの伝説』(下図)だった。



30才のサンギさん



徳永文庫蔵

この本はサハリン内で出版されたのにもかかわらず、モスクワでも大変な評判をとった。そのために、早くも1962年にはソ連作家同盟に加入を許可されて、モスクワの高等連邦文学養成所を終了して、ソ連邦公認の作家としてデビューした。そのデビュー作が1965年モスクワの<ソビエト・ロシア>出版社から出された作品集『最初の狩り』だった。ニヴフ人の生きる自然とそれに包まれて暮らす人々の知恵を描いた短編集である。この作品集のうちの一編が田原佑子さんの訳で日本語になって『サハリン・ニヴフ物語』(北海道新聞社2000年刊)に収められている。

作家サンギさんの次の仕事は自分のルーツを書くことだった。サンギさんは、時代を曾祖父の時代にまでさかのぼった。それはちょうどチャーホフがサハリンを訪れて、『サハリン島』(ちくま文庫版チャーホフ全集第12巻所収)で書いた世界である。サンギさんの家ケヴォング家の息子が放浪の旅に出て、さまざまな民族のいろいろな人々に出会う。そしてアヴォング家の娘を娶るとい筋の長編小説「ケヴォング家の嫁取り」である。単本でも出ているが、『サンギ作品集第一巻』(ユージノ・サハリンスク出版社2000年刊)に所収されているので手に入りやすい。「これはウチの、つまり僕の話なんだが、面白いと思

うけれど」という自薦の言葉付きでサイン本をいただいたことがある。ニヴフ語だけではなく、ロシア語の達人でもあると思わせる動きのいい小説である。日本語訳を期待したい本である。この長編を詳しく紹介する代わりに、サンギさんの詩をひとつ訳しておこう。「ケヴォングの嫁取り」のこころを思い出させるような詩である。

「

### クスとクウス

果てしないタイガと御影石の山が  
はるか昔から僕たちを隔ててきた  
しかし言葉という賢きものは時に  
語ともの名とを、よく似た響きで一つにする

古きニヴフの言葉「クス」

幸せ、幸運をあらわすこの言葉は  
優しいヤクートの言葉「クウス」の中に  
鏡に映りこんだように入っている

種族は違って気になることは同じ  
種族は違って考えることは同じ  
だから望ましいものはみな似ている  
娘、それはクウス  
幸せ、それはクス

どんな所でも、どんな時も、  
幸せと夢は僕たちを暖めてくれた  
僕たちに与えられた愛をもって歌え  
大切な母の教えのように

僕は信じる、僕は知ってる  
ヤクート人は、恋人の心への近道を見出だし  
家に灯すような暖と幸とを  
「クウス」という言葉の中に灯すのだ

なのになぜ、女よ、苦々しげに意地悪に  
あなたは舟に櫓を置いたの？  
その冷たい瞳で僕を遠ざけようとしているの？  
僕たちを分かつ遥か彼方へ

別々の世界へ、別々の運命を携えて  
それが僕とあなたを永遠に引き離した…  
ああ、思えばあなたは近くにいた  
あれほど近くにいたのに、霧の中に漕ぎ去った

僕の泣き叫ぶのをあなたは見ようとはしない  
でも切々たるこだまはボートの後を追いかけて  
追いかけて霧の波にしがみつく  
僕には聞こえる、霧が僕のために泣いているのが

「クス」と「クウス」、二つの愛の言葉  
でもどちらにも一つの優しい心  
ヤクートが何を言っても、何と呼んでも  
ニヴフはそれを理解し、それに答える

」

(月刊新聞『ニヴフ語』2000年2月号から、熊野野葉子訳)

サンギさんには1961年以来たくさん作品がある。どれか一つを代表作としてあげるのは憚られる。みなそれぞれに巧みで美しい。しかし長編「カヴォング家の嫁取り」と詩集『ニヴフのうた』1989の二つはどうしても見逃せない。ロシア作家同盟作家らしくどれもロシア語で書かれている。しかしサンギさんはニヴフ語の達人でもある。いつでもニヴフ語で作品を出せる。でも読み手が残念ながらもうごく少なくなっているから、サンギさんはやむなくロシア語で書いている。ニヴフ語の作品は、ちょうど上の「クスをクウス」のように、月刊新聞『ニヴフ語』にときどき発表される程度である。もちろんサンギさん自身もこの母語の状況を変革する努力をしている。実際にその活動を必死に続けてきている。その努力が実って欲しいと切に願う。

## ニヴフ語教科書の著者—サンギさん

サンギさんはニヴフ語の教科書も作った。つい先年亡くなったニヴフの言語学者ガリーナ・アレクサンドロヴナ・オタイナさんと一緒にニヴフ語サハリン方言（ニヴフ語南東方言）の初級教科書を二冊作った。アムール方言（同北西方言）の教科書タクサミ・プフタ・ヴィングン共著のニヴフ語教科書に見合ったサハリン方言用の教科書である。まだソ連という国があった頃の本なので、多少はソ連臭さが鼻につくけれども、この教科書が出たこと自体が画期的なできごとであった。しかも随所の作家としてのサンギさんがみずから詩を書いている。例えば初級第2巻には次のような美しいページがある：



チルフ

(秋)

チルヴァイト

(秋がきた)

タットウン オズトット ニ パツハトホ トウルドゥ

(朝起きてぼくが窓を見ると)

チハルフ チョムシクン ククドゥグン。

(木の葉が落ちていた)

クトゥリロホ プウウトゥ トツルロホ トツウルドゥ

(外へ出て空を見上げると)

パイガグン ユゴロホ ヴイドゥグン。

(鳥たちが南へ飛んでいった。)

V. サンギ

サンギさんは他にも学習用の冊子を何冊も書いている。民話や伝承を教科書風に書いたものである。また珍しいものに、プーシキンの詩「坊さんとその阿呆の召使い」のニヴフ語訳がある。こうした仕事見ると、サンギさんが母語の保護と再生にかける熱意が並々ならぬことが分かる。そして若い頃レニングラードから帰って故郷の町で何年か教師を務めて、その後も教育行政に携わってきた長い経験が教材作成にも十分に生かされている。

サンギさんはニヴフ語サハリン方言（南東方言）の辞書を編纂中である。オタイナさんのノートやネクラソフカ村で長いことニヴフ語の教師を務めているポレイチェヴァさんと共同で作っている。完成品は私の手元にまだないが、ちゃんと出来たら贈るからとサンギさんが言う。一日も早く手にとって、サビエレヴァ・タクサミさんたちのアムール方言（北西方言）辞典と比べてみたいと願っている。

## サンギさんの自然保護活動

いまサハリンの先住民にとってもっとも重大な環境問題は、ノグリキ沖の石油・天然ガス開発である。ノグリキ沖の石油はつとに知られていて、第一次世界大戦後のソ連成立期に日本がその開発権を獲得していた。しかしいま問題になるのは、アメリカのエクソン・モービルが開発を進めるサハリン I とオランダのロイヤル



ヴェンスコエ沖<FoEJapan>から

ダッチと日本の三井物産、三菱商事が開発するサハリン 2、及びそれに続くサハリン 3 以降の開発計画である（「サハリンの環境問題」の項参照）。そして最近ロシア政府はこれら多国籍企業がロシアの生態的環境を危機に陥れていると称して、サハリンの開発に文句をつけてきた。ことの帰趨はまだはっきりはしないが、サハリン 1、2 と続いた開発が一定の段階まで進んだ頃を見計らって、ロシア政府とそれが支配するロシア企業、例えばガспロムなどが、従来成果を横取りしようと策謀していると見られていた。事実、2007年4月20日の各紙の報道によると、ロシアの天然ガス独占企業ガспロムがサハリン 2 の経営権の過半数を移譲させて、この国際プロジェクトを奪い取ることをロイヤル・ダッチ・シェル、三井物産、三菱商事に承知させたという。伝統的ハイエナ商法である。

実際にロシア企業とロシア政府が共同でこの開発を独自にかつロシア式に続けるのであれば、サハリンの環境破壊はさらに深刻になるだろう。開発の主導権を誰がもつかに多少の違いはあるだろうが、いずれにせよ、サハリンの生態的環境は先住民とロシア国民が主体的に監督して自分たちの生活環境を守るための活動を始めて、それを世界中の多国籍な団体が後援する形をとる他はない筈である。その意味でもサンギさんを含む先住民の自然保護活動が少しづつでも成果を上げることを願い、それを支援・鼓舞したいと思う。

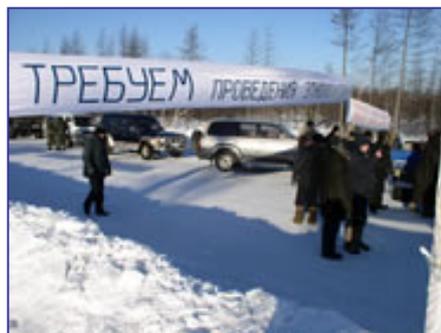
これらの石油・天然ガス開発がサハリンの生態的な環境に対して与える影響は主に次の点に集約されるようである：

- 1) ノグリキ北方に住むオオワシやコクジラなど絶滅が危惧されている動植物及び、またニシンの産卵地域と考えられている沿岸地域に対する壊滅的な影響。
- 2) 石油採掘現場からの油流出の可能性及び石油・天然ガス採掘現場の汚染。
- 3) パイプライン敷設に伴う生態系破壊及び土壌汚染。土砂流出、水質汚濁の懸念。サケが産卵する河川への分断などの深刻な影響など。
- 4) 漁業資源への被害。原油ターミナル建設に伴って海底浚渫作業及び土砂投棄が行われているので、オホーツク海のような繊細な自然環境に対する否定的影響は深刻だと思われる。

る。特にこの地域の水中・海底は未調査である。

5) 先住民族や地元の住民の生活環境に対する深刻な影響がすでに見られる。ノグリキ沖に砂州状に連なる半島では、とりわけ外洋側で、漁業被害がでている。特にサケ・カラフトマスなどの遡上・産卵が脅かされている。またヌイヴォ湾内部の海獣の生態に異常が見られると報告されている。

こうした事態にたいして地元の先住諸民族はすでに何度も関係会社や機関に対してアセスメントを徹底して、十分な対策を立てることを要求してきた。最近では2005年1月にニヴフ、エベンキ、ナナイ、ウイルタなどサハリン北部の先住民族が「建設道路封鎖などの抗議行動」を行なう決定をして、サハリン・エナジーなど石油会社に対し、開発が先住民族の環境と伝統的な生活に与える影響を判断する



2005年の抗議行動<FoEJapan>から

「民族学的アセスメント（文化影響調査）」の実施を求めた。また、これに先立って先住民族の代表は、国際協力銀行（JBIC）など関係四銀行に対して、石油会社との問題解決を行なう「調停役」としての役割をはたすことを要請するレターを提出した（レター全文は FoE Japan<開発金融と環境プログラムの公式サイトに掲示されている）。この要請レターの発起人の一人がサンギさん自身であった。その書簡にサインした時のサンギさんの肩書きは「ノグリキ地域ニヴフ長老議会議長、国連経済社会フォーラム組織人権国際連盟部族長」というものだった。この「ニヴフ長老議会」とは長く休眠状態であった組織だが、民族学的アセスメント要求を行っていくためにサンギさんの努力によって復活されたものだという。また「国連経済社会フォーラム組織人権国際連盟部」とはジュネーブに作業部会が置かれている人権委員会に所属する機関である。そこで日本から来たアイヌ民族の代表や委員にしばしば出会ったとサンギさんは語っていた。

サンギさんの活動は、自然環境保護運動のなかで抗議する側だけに限られていない。それだけでなく、サハリン州政府の内部にも活動の基盤をもっている。州政府の固定した役職には就いてはいないが、さまざまな委員会や協議会の委員として活動しているし、そのために州政府から先住民族の重鎮として遇され、ロシア作家同盟の正規会員として尊敬を受けている。更に同族のライグンさん、ナチョートキナさんのような仲間が政府内部にいる。そのようなサンギさんの活動は重い価値をもって政策に反映される。サンギさんはサハリンの環境保護にとっても貴重な働き手なのである。

## ニヴフのテリトリア

2003年の夏のある朝、同僚のガリーナ・ロクさんの家で原稿の校正をしていたとき、サンギさんが訪ねてきた。ニヴフの習慣で、お茶と二皿ほどのご馳走をつまみながら、小一時間ほどゆっくりとお話を聞くことができた。いろいろな話が出たが、とりわけニヴフ民族自治地域を創設したいというサンギさんの将来計画について記しておこう。

話はニヴフ語とニヴフ文化の継承の問題から始まった。伝統的文化を引き継いできているひとが一人一人歯の欠けるように亡くなっているので、集中的で総合的な教育計画を立てることが是非とも必要だという話である。ニヴフ人の有力者は長いことすでにこの問題を論議してきたが、多くの問題で州政府の教育行政の基本的な路線と衝突してきた。かつてのブレジニエフ時代のように画一的なソ連人育成



というような強制はもはや無い。しかしロシア人主導の教育行政は決してなくなってはいない。とりわけ地方政府が民族教育に理解を示さないし、そもそも理解する能力におそらく問題があるようだ。ことごとくに衝突が繰り返されてきた。サンギさんらはすでに総合的民族教育計画を州政府に提出しているが、

それは未だに行政の机上に眠ったままだという。しかしこのような状況を抜本的に解決する道は一つ在る。それはより根源的な問題を提起することだ。ではそれは何か？それは総合的民族教育計画を独り立ちさせるのではなく、大きな衣に包んで、民族の相互扶助体制を創造することだ。こうしなければ、結局は元の黙阿弥になってしまう。つまり、ニヴフのテリトリアを作ることが肝腎だ。ニヴフの生活そのもの、植物的・動物的生態系、海・河川の水系、自然系、利用可能な海洋資源の系、精神文化、それにももちろん言語を一切取り込んだ生活空間を作ることが出発点になるはずだ。さしあたり大きな土地はいらない。まずは30キロメートル平方ほどの広がり、32キロの海岸域、サケ・マスが遡上産卵する川が二筋。そこを根拠地にして民族の伝統的な生活空間を創造することから始めたいとサンギさんは語る。

この計画は最初いたるところから反対された。サハリン州政は反対、自然保護審議会もダメ、エコロジー問題最高委員会も取り上げない。ノグリキの所属するオハ区域議会は怒り出すという有様だった。私は戦いつづけた。何と言われようと主張し続けた。もう何年も喧嘩し続けている。何処へ行っても「ニヴフのエトノス的生態的な自治地域の創設」について語り続けている。州政府にも何度もその計画書を書き送った。そしてやっと最近になって州政府は私の立場を自然保護国家委員会 (Goskomprirod) に送った。そして委員会が私達から直接に面会して話を聞きたいと言ってきた。委員会は基本的に計画に同意すると

私は見ている。今のところ委員会独自の案を持っているようだが、私の計画を基本的に承認しているようでもある。明日か明後日にもユージノ・サハリンスクへ出かけて、状況を説明してきたいと思っている。うまくいくと、世界で始めて先住民族のエトノスの・生態的な自治区域ができることになる。私のアイディアは1988年からのものだが、やっとここまで来たのだと思う。私の感じではうまくいくと思う。あとは州が嫌がるるところをどう調整するかが問題になるという。

民族生態自治区域ができれば、その公用語はもちろんニヴフ語になる。学校でも幼稚園・保育園でもニヴフに伝統的な文化を学べるようにしたい。四年ほど前になるが、州に行き、今の教育制度はまずい、これでは民族性なしの国民を作っていくばかりだ。ニヴフという自覚がただの地方人というだけになってしまっていると言ったことがある。その状況を改善できる場がこの自治区域だと思うとサンギさんは言う。先住少数民族が自分で独自の道を切り開く必要を何度も訴えて、そのために自治区域の創立がどうしても必要だと主張する。私はちょっと心配になったので、お金は？ロシア人達は本当に援助する用意があるのだろうかと聞いてみた。政府は財政援助の用意があるとサンギさんは言う。第一にロシア連邦全体として、先住少数民族を保護する法律がある。第二に北方諸民族の社会組織を育成するという法がある。第三に地域の自然生態保護に関する法がすでにある。こうした全国的な法規に従って、サハリンでも2003年5月に法律が二つ通った。それに基づいて援助が行われることになったという。このことは別にきちんと調べて北海道にも役立てようと私は思ったのだった。

## サンギさんと日本

サンギさんはよく日本に来る。最近では、1997の秋に北海道大学のスラブ研究センターに招聘されて、「サハリンの搾取と生態的危機」という講演を行った。また2005年には東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所の招聘で三ヶ月ほどを日本で過ごした。このときはサンギさんが昔からもっているニヴフ語の音声資料を一部デジタル化するという仕事を引き受けてくれたのだったが、サンギさんの生活は決して快適ではなく、さほど気のはいる仕事ではなかったらしいのだが、よく働いていただいた。それもニヴフ語を残し伝えようと言う強い意志があって出来たことだと、感謝している。サンギさんだけでなくニヴフの人達は北海道が好きなようだ。網走や北見の土地の様子が故郷とそっくりだと言って喜んでいるので、あの人達はやはりオホーツク文化人の末裔かと思ってしまうほどである。サンギさんにもゆっくりと好きなのところを旅して歩いて欲しいと思っている。

### 3. ガリーナ・ジェミャーノヴナ・ロークさん

#### 「ロークさん」

ガリーナ・ジェミャーノヴナ・ロークさんは私達がニヴフ研究を始めて以来の親しい同僚である。私達は彼女を「ロークさん」と呼び、ロークさんも私達を例えば「Cupaycu（白石さん）」のように「さん」付けで呼んで、殆どの調査や研究会にご一緒してくれた。むしろ私達の調査やデータベース作成はロークさんなしには不可能だったとさえ思われる。ロークさんは私達が何時・何処へ行けば、誰に会えて、どんな話ができ、どんなデータが得られるかをあらかじめ全部知っていたふしがある。つまりは最優秀のトラベル・ガイドである。それに彼女自身がすぐれたインタビューアーであり、同時にカメラマンでもある。

ある時、7人のチームで北サハリンのネクラソフカ（II-4「ネクラソフカ」の項参照）を訪ねた。そこで大切な人達にあつて話を聞き、映像資料を作った。4日後チームを二手に分けて半分はアムール河口の村アレフカに向かい、他の半分は北サハリンの町ノグリキを訪ねることにした。ロークさんはどこかから車を調達して来て、まず乗れと言う。途中オハ市に立ち寄って、スーパーで多少の買い物をして、昼食を摂る。さすが地元の人だけあって、なんとかまともなものを食べさせる小レストランを見つけてくれる。まだ私達はノグリキのどこへ行って、どんな宿に泊まるのかを知らない。聞いても、「まあ、ませておきなさい」と言うばかりである。夕方になってノグリキ市内の、とあるアパートの前に止まった。ロークさんはつつかつかと一階の家に入って行って、ついてこいと言う。そこが姉のリーヂア・ジェレミャーノヴナのアパートだった。私達はそこでリーヂアさんのお世話になり、長逗留をすることになった。その間もロークさんは毎日朝早くやってきて、今日はヌイヴォ、明日はカタングリと案内してくれて、行く先々でダットとカメラを回して歩いたものだった。



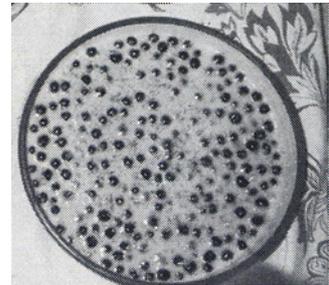
#### ノグリキ市地域博物館主任学芸員

ロークさんはサハリン有数の民族学研究者である。ロークさんの正規の職は「ノグリキ市地域歴史民族学博物館主任学芸員」であり、副館長を兼ねている。主な研究対象はサハリン地域の植物とニヴフの食文化である。ロークさんはニヴフの食文化に関して総括的な研究も書籍もないことを嘆いた。大変に忙しい最中に、せめて目次でも作ってみようと、「ニヴフ料理」というパンフレットを書いた。それによると、ニヴフ料理は基本的に次の種類に分類されるというのである：

- 1) 前菜：魚スープ、野鳥のスープ、イクラスープ、昆布スープ、芹とイクラのスープ等
- 2) 干し魚料理：皮付きトバ、刻みトバ、焼きトバ、三枚干しトバの料理
- 3) 生魚料理：焼き魚、煮魚、わたの煮物などの料理
- 4) アザラシ料理：アザラシ肉の煮物、アザラシのシャシリク、内臓の煮物
- 5) 魚と果実類の料理：モース（ガンコーランなどのゼリー）、果実と魚の和え物、カラフ、トマスのミルク和え、昆布和え、ホロムイチゴと魚の和え物

もちろんこの他にもさまざまなヴァリエーションがある。その製法もひとによってさまざまであるが、基本的に上の材料と作り方が伝統的ニヴフ料理のタイプであるという。ロクさんはこの目次をもとに詳しい記述に務めている。

この中でガンコーランなどの果実で作ったモースという料理は特別なお客さんを接待するためのメニューである。プフタさんの辞書では「魚皮をゼラチンに加工して用い、それに砂糖とバターを加え、イチゴ類の果実ガンコーランなどを加えて作るデザート用料理」とある。だが、これだけでは、どういうもの



か分からなかった。ある時、北サハリンのネクラソフカにヴェーラ・エレミエーエヴナ・ヘインさんのお宅に招かれたとき、ヴェーラさんがこのモースを作ってくれた。まずサケのトバから皮をはがして水にうるかしておく。十分に柔らかくなったところで、平底の木の器(オロンという)に入れて、板のついた杵(ママスという)を使って1時間ほどゆっくりと擦りながらゼラチンを作る。それに水を加えながら、バターと砂糖で味付けする。最後にガンコーランを並べて、全体を蒸す。途中で牛乳を入れたような気がするが確かではない。とにかく大変に手間のかかる料理である。上右の写真は白石英才氏がその2年後に伺ったとき作ってくれたモースの写真である。



## ニヴフ語の先生

ロクさんは私達にとってニヴフ語の先生でもある。1998年に文部省(現文部科学省)科学研究費の国際研究で正規の研究協力者として日本にお招きしたとき、私達は房総の海辺の宿で3・4日合宿をした。ロクさんは九十九里の太平洋を見て「これは広い海だ」と言って飽かず眺めていたのに、研究熱心な仲間は直ぐに部屋へ呼び入れては、手にはいる

限りのニヴフ教科書を読んでもらう。タクサミ・プフタ・ヴィンゲン編の初級教科書「アイヌ字母」1991からタクサミ・ポレーチェヴァ編「虹」1992を始めとして、ニヴフ語新聞「ニヴフ語」の最新号にいたるまで、およそ当時手に入る限りの本を持ってきて、次から次への読んでもらい、それをダットに記録した。私達はまずそれでニヴフ語をおぼえたのだった。

故プフタさんの読本「ニヴフ語・ロシア語会話＋ニヴフ語シソーラス」1995・2002に日本語訳をつけるとき、私は二度もノグリキのロクさんのお宅に入り浸った。一週間もロクさんを缶詰にしてプフタさんの原稿を一字ずつチェックした。1ページに1語くらいは、アムールではこう言うだろうが北サハリンでは違うという単語がある。この言い回しは知らない、多分カリマの言葉かな、という表現がある。一日に8時間以上もこんな勉強をした。出来上がった本にはそれでも私自身のせいで結構まちがいがいる。いずれにせよこの本が出来てプフタさんを介してニヴフの子供達の手に渡ることができたのは、もっぱらロクさんのお陰である。本当に教師且つ協力者である。

同僚の白石英才さんは「ニヴフ語音声資料」をすでに3分冊も出しているが、これもロクさんとの共編である。白石・ロクのチームはニヴフ語北方言の地域で特にオハヤネクラソフカを訪ねてニヴフ語を保持している人々の音声を採った。それを整理して英訳と日本語訳を付けて刊行した。(1)と(2)は文部科学省特定研究「環太平洋の「消滅の危機に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」資料A2-015(2002)とA2-036(2003)、第3集はオランダのリームスデイク大学「タイガとツンドラからの声」叢書として刊行された(2004)。いずれも白石・ロク編である。どの巻もCDが付いているので(右図)、話し手の音が生で聞ける。今では当然のことではあるが、実にありがたいと思う。



ニヴフ語の生の会話を始めて聞いたのもロクさん(左)とリーヂアさん(右)との間の何気ない夕食後の対話だった。この姉妹は二人になると、ニヴフ語とロシア語を都合よく使い分けて何時間でもお喋り続ける。録音しようとするが、すぐに見つかって、ダメ、ダメと取り上げられてしまう。まさか非合法手段をとるわけにもいかないので、黙って聞いているしかない。しかし人の噂話にでもなると、たちまち誰にも分かりそうもない姉妹語になるので、到底ついてはいけない。そこで音なしの写真(上)で、その様子を紹介するだけにしよう。これらが私のニヴフ語教師達である。

## 調査マン・ロクさん

ロクさんは最上級の調査マンである。1999年の調査でタクサミ氏と私がカリマ村に行って、そこで山火事で何日も足止めをくっていた間、ロクさんはニコラエフスクに留まっていた。ゆっくりしていればいいものを、その間どうも駆け回っていたらしい。一週間後に再会したとき「かねこさん、これ面白いデータでしょ」と見せてくれたのがニコラエフスク近郊の人口調査であった。この資料は何処にも出ていないし、手書きのオリジナルは私のファイルにしかないので、この場を借りて公表して、ロクさんの労働を讃えることにしたい。

なお地域名は便宜のためにローマ字書きとする。

ニコラエフスク近郊人口動向 (G.D.ローク 1999)

地域	ニヴフ	ネギダール	ウリチ	エウエンキ	ウデハ	その他
Nikolaevsk.n.A.	417	37	55	50	1	? 187
Krasnoe/Palovinka	87	?	3	7	9	nanai 11,alyut 3, mansi 4
Oremif	55	3				
Gnyrrax	24			3		
Tnejbax	29			5		yakut 5
Ozerpax	14	3	2			nanai 7
Puir	68		7			
Makarovka	43					
Innokencevka/ Saxarovka	163			5		chukchi 4, jakut 5
Vlasvevo	17					Nanai 11
Mnogoverninnoj	108		17	22		nanai 22
Clya	26		6	4		
Orelj/Clya	15	3		3		
Mago/Ovsjannoe Pole	98	41	11	3		yakut 2
Nidzni-Pronge	180					nanai 7
Aleevka	83					

調査マン・ロクさんの凄さは、この数字をニコラエフスクの役所の台帳から集めたのではなく、現地の人々からの情報にもとづいて、それを現地の役場の帳簿と照らし合わせて確認したことにある。こうして見ると、アムール河口地域でニヴフが非常に多いことに改めて驚く。ロクさんも「これは何とかしなければね。でも、どうやって？」と嘆く。

#### 4. ノグリキの人たち

##### ノグリキという町

サハリンの中心地ユージノ・サハリンスクから夜汽車に乗って北に走る。ほとんどの車両が上下二段の寝台車で、寝心地は悪いとは言い難い。友達や土地の人々と話し込んでしまうと寝不足になりかねないような旅である。所要時間は約10時間、翌朝には終点ノグリキに着く。ここが線路の終わりであることが納得できるような鄙びた駅舎である。しかも駅は町からは2キロほど離れていて、まわりには荒れ果てた野原の他には何一つない。もちろんタクシーなどは存在しないから、町の人とのつきあいがないと、駅から町まで荷物を背負って歩かなければならない。しかも行くべき道を示す標識もないし、歩道などという洒落たものは未だかつて作られたことはなさそうである。

それでもこの町は古くから開けていた。北サハリンの生活の拠点であり、要衝とさえ言える。それも二つの重要な理由によって。理由のひとつは、この町で北サハリンの一番長い河、トゥミ川がオホーツク海に注ぐ。河口の東の海上には南北に長い砂州の半島ができていて、この砂州と河口との



間が大きな湾を成している、オホーツク海の荒波と寒風を防いでいる。毎年夏の終わりには川にたくさんのサケとカラフトマスが上る。赤い腹の魚で大きな湾が一杯になる。それがトゥミ川の支流に上っていくところをあちこちで捕まえる。湾の中にはアザラシもたくさん住んでいる。そこに木箱に金網を張った罟を仕掛けてアザラシを捕まえる。一日に一匹かかることさえある。その肉も脂も皮も大切な生



活の糧である。そのためにニヴフの人達は古くからノグリキを中心とする地域に住んでいた。ずっと昔から鮭鱒と海獣をとって暮らしてきたのである。

ノグリキにはニヴフの人達が1000人ほど住んでいる。人々はなんだかだと動き回るから、一

桁まで詳しいような人口統計よりも、この程度に大雑把に勘定した方が実態にあっている。サハリンのもう一つの少数民族、ウイльтаの人達もノグリキの北50キロほどのヴァル村を中心にトナカイ飼育をしているので、この地方のウイльта人もノグリキの住民とみてよい。実際にウイльтаの人達の総勢、200人足らずのうち、十数人がノグリキ市内に住んでいる。主に若い人達で工場や公共の仕事などに就いているからである。

この町に住むニヴフの人達のみながもともとノグリキに住んでいたわけではない。大多数はいろいろな地域から集まって来た人達である。古い小さな在郷に住んでいる人達が、生活がたちかなくなってしまうと、仕方なしに町に出てきた場合もある。ロシア革命後には強制的な集団化によって、地方も村が潰されて、余儀なく都会へ移住してきた場合もあった。こうして近在の村だけでなく、サハリン西海岸の村からも人々がノグリキに集まって、町を作った。そのとき人々は自分の出た村の方言も担いでやってきた。だからノグリキにはさまざまなニヴフ語方言を話す人達が集まっている。北や西から移住してきた人はニヴフ語北西方言を話す。大陸のアムール方言と近いことばである。一方、トゥム河の中流から移ってきた人はサハリンの南東方言を話す。サハリン中部のポロナイスク周辺とほぼ同じ方言である。私達の同僚ガリーナ・ロクさんはきれいな北西方言を話す。一方、ロクさんのうちでお目にかかったウラジミール・サンギさんは南東方言だった。サンギさんの弟がサハリン中部のポロナイスクに住んでいるが、この一家もサハリン南東方言を話している。だから言語調査をするときには、話し手の出身地に気を付けないと資料がさまざまな方言でごちゃごちゃになってしまう。

町の北の方にニヴフの人達が昔から住んでいる木造の家屋が建ち並ぶ地域がある。そこはトゥミの河口に近くて、漁にも便利だし、湾の向こうの洲のような半島に船で通うにも都合がいい。川岸から家並みを見ると、古くからの懐かしい暮らしが見える。一軒ずつの家には決まってジャガイモや野菜を自家用で作る畑があって、昔からこの作物と漁猟とで暮らしの根本が支えられてきた。『ニヴフ・ディフ』の編集員でサハリン教護博物館の学芸員であるレーナ・ニトククさんに始めてお目にかかったのもこういう家だった(右図)。昭和の中頃までは日本の田舎でもこんな家に住んでいたものだった。子供の頃の追憶がこの風景につまっている感じだった。ニトククさんのお宅は

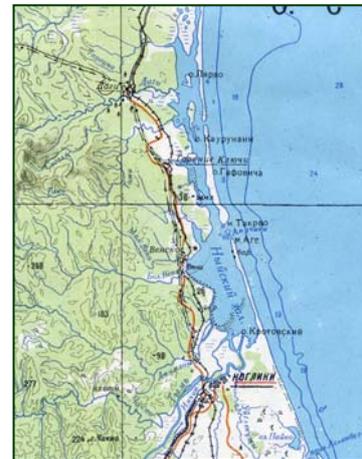


5部屋の木造平屋づくりである。家の裏から見ると小さな畑があって、ジャガイモと野菜が植えてある。家の玄関側から見ると、赤土の道路に沿って垣根が立っていて、垣根越しにレーナ・ニトククさんが少女時代に使っていたが部屋が見える。その窓の下に小舟が休んでいた。夏の昼下がり、レーナのお父さんが門口に佇んで、船の修理の手を休めていた。この船で、船尾にヤマハ印の小型モーターを取り付けて、湾の向こうの半島にある夏の漁小屋に通うのである。

この町にはニトクク一族を始めとして、たくさんの名家がそろっている。今では多く家族がこうした古い木造家屋を止めて、新町のアパートで暮らすようになった。ロクさんもお姉さんの故リージア・ジェレミヤノヴナ・キーモヴァさんも町の新しい地区に立つ5階建てのアパートに住んでいる。作家のウラジミール・サンギさんも近くのアパートに立派な仕事場をもっている。しかしトゥミ川の河口に近い古い町がやはり何となく気を引く。

ノグリキは全体としてニヴフの伝統文化と新しい先進的な文化活動の一つの根拠地になっている。町の北のはずれにはノグリキ郷土博物館もあるし、民族劇団も二つあって、盛んに国際的な公演活動を続けている。伝統的な刺繍や木彫りも盛んで、そのための講習会も開かれている。もちろん文筆や絵画の面でも一流の人達がこの町を根拠地にして活動を続けている。こうして、ノグリキは昔も今もニヴフの生活と文化の重要な拠点であると言えそうである。土地の人達も実際にそう思っているし、そのことを誇りにしている。

ノグリキという町が開けたもうひとつの理由は、石油産業である。これには日本が関わっている。ロシア革命直後の1920年にアムール河口のニコラエフスク・ナ・アムーレで悲惨な事件が起こった。いわゆる尼港事件である。ことのいきさつは「ニコラエフスク・ナ・アムーレ」の項で大まかに書いておいたが、当時の外交上のやりとりの末、結局はソ連側が日本側に代償を払うことで決着がついた。この代償というのが、1925年に締結された「日ソ基本条約」によって取り決められた1925年から1970年までの45年間に及ぶ北サハリン石油・石炭開発権だった。



この開発を進める目的で、日本はコルサコフ（大泊）港からユージノ・サハリンスク（豊原）とポロナイスク（敷香）経由でノグリキまで全長800キロ近くの鉄道線路を敷いた。これが今も私達が利用しているサハリン鉄道である。鉄道は出来たものの、日本はまもなく第二次世界大戦を始めて負けた。その後の冷戦の期間には実際上ノグリキ沖の石油開発事業を推進することは不可能だった。しかし1984年に石油埋蔵地域に隣接して天然ガスが大量に埋蔵されていることが発見されてから、事情が変わった。この頃から日本のい

くつかの企業がアメリカのエクソン・モービル社の傘下で液化天然ガスと石油の開発を進めるようになった。これが石油・天然ガス開発国際プロジェクトサハリンIの始まりである。現在ではサハリン2のプロジェクトが進められている。

ノグリキの町はずれの丘に立つと、これら多国籍企業の事務所や倉庫、そこに務める外国人の宿舎が立ち並んでいるのが遠望できる。ノグリキの西南10キロほどの所にナビル湾が広がっているが、湾の東に連なる砂州の半島を訪ねた時だった。半島の東側がたいへんに騒がしい。大型の工作車がひっきりなしに行き来している。砂州の半島にパイプを敷設しているのだった。このように開発プロジェクトの作業はノグリキの町から離れたところで、生産現場からサハリンの西海岸や南端の海岸に向けて直接にパイプを敷くという仕方ですすんでいる。この作業はノグリキの町の生活からは見えないし、何らかの影響を及ぼしているようにも見えない。事実、プロジェクトとの関係はサハリン州政府を媒介として町の生活と関わりを持っているに過ぎない。ノグリキの人達からすれば、町の周辺環境を外国人が破壊しているとは見えない。それが見えてきたときはもう手遅れなのだが、人々はまだ暢気に生活しているように見える。

### ノグリキ郷土博物館

ノグリキ郷土博物館は町の北の端にある。町のメインストリートと言うソビエト通りを北東に歩いて約20分。道路が半分の幅に狭くなった辺りの右側に、ひしゃげた木造平屋の建物がある。看板をのぞき込まなければ、とうてい郷土博物館だとは想像もできない。しかし軒先には確かに「ノグリキ地区行政府文化局 市立郷土博物館ノグリキ市」という看板が打ち付けられてある。どう見てもれっきとした市立博物館である。



ブリキ張りだがたびしする扉を開けて、窓口でなにがしかの木戸銭を払って一階の大きな広間に入る。海と陸と民族衣装を着た何人かのニヴフを描いた大きな壁画が正面を覆っている。



これは、よくある造作で、古今東西の常だし、それにソ連時代にはレストランを始め、いたるところでこの種の内装がはやったので、驚くには値しない。

しかし案内されて地下の展示室に入ったとたん、珍しいものが広い室内の到るところに無造作に置かれて

いるのに仰天する。学芸員がまず見せてくれたのはニヴフの板船である。櫂を斜交いにもって船の前に立ってくれた。写真ではよく見えないが、船首の底に板が一枚前方に突き出ている（写真上の右端）。波よけの板である。間宮林蔵が『北夷分界余話』に描いたとおりである。船の脇に丸木船がある（右下の写真）がそれで、大変分厚い彫りで、よくこれで



水に浮くと不思議な程である。これには波よけの板はない。製作の時期は分からないという。しかしそんなに

古いものではなかった。

材はトチノキのようだ。

船の大きさは板船とほ

ぼ同じで、今日使われているアムールと称するジュラルミン製のものと同じで、3～4人乗りである。もっともアムールはもう少し幅がある。



櫂も間宮林蔵の描いたものと変わらないように見える。板船にも丸木船にも櫂止めがない。両手で漕いだのだろう。大変に重かったに違いない。

次に目を引いたのはトゥンレンである（トゥンレンの楽器とその伝説については別項の

III-3「トゥンレン」を見ていただ

きたい）。このニヴフ固有の楽器は

白樺の平皿の上に無造作に置いて

あった。楽器の共鳴具であるドラ

ムは白樺製でウサギかキツネの白

皮が張られている。弦は取り外し

てあった。直ぐ横にもう一つのド



ラムが置かれていたが、これも同じ作りで、数センチほど長い。このトゥンレンも新しく作ったものらしい。あるいは、リージア・キーモヴァさんの作なのかも知れない。



左の写真はオロン、あるいはオルンという道

具である。この木桶のようなものはモースとい

うデザートを作るための専用の用具である。モ

ースについてプフタさんの『ニヴフ語ーロシア

語分類語彙集』では「デザート、魚の皮をゼラ

チンとして用いて適宜加工・処理して、そこへ

砂糖・バター・イチゴ、又はキイチゴ、またはガンコーラン、コケモモ、クロマメノキ、

ツルココケモモなどを加えるというレシピで作られる料理」と書かれている。全く魚臭さ

が抜けて、大変においしい、あっさりしたベリーのデザートである。このモースを作るた

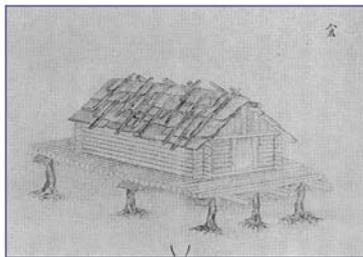
めに、魚、特にサケの皮からゼラチンを取る。まず皮をよく水に晒して、それをゆっくりと棒で押しつぶす。そのための棒が上の写真ではオロンの中に立っている。板に棒を差し込んだ道具だが、ゆっくりと力をかけるので、丈夫にできている。この道具を特にママスとかチヌスと呼ぶ。モースは時間と労力にかかるもてなし料理で、お祝いの品と言ってもよい。それにモース作りの名人は誰それと村で知れ渡っている。モース作りを何度か見せていただいたが、朝早くから準備して大変に手のかかった、見事な料理である。

もうひとつ是非にも紹介しておきたい展示物がある。ニヴフの夏の家と冬の家の模型である。ともにリージア・キーモヴァさんが作ったもので、将来「ニヴフ民族博物館」が



きたときには、この10倍の大きさのものを博物館の中庭に置くのだと言っていた。ここにあるのは、そのための設計図だというわけであった。

ニヴフの伝統的な夏の家は、高床式でネズミ返しもある。これはちょうど間宮林蔵が描いているとおりである。本体は丸木作りで、アザラシの皮で屋根が葺いてある。魚皮のこともあるのだろうか。



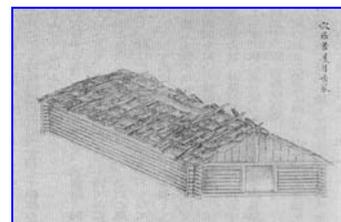
夏の家は漁労で出かけるところに作る。春から10月に雪の降り始める頃までそこに住んで仕事をする。ユー（夜露）が降りる時節になると、マー（トバ＝干しサケ）をつるした竿を下ろして、家のまわりを片づける。冬の家に移る準備を始める。夏の家についても間宮林蔵が精密な絵を残している。それはちょうど、この博物館にあるものと寸

分変わらない。ただ、何故か家のまわりの踊り場が広いし、屋根には丸太が置いてある。本当にそうだったろうと思う。殊にヌイヴォなどの砂州やベンスコエなどの海岸の丘の上に夏の家を造ったら、ひどい風によほど気遣わなくてはならない。

ニヴフの冬の家はすざましい。サハリンもアムールも気温はさほど下がらないのだが、なかなか防御が固い。半地下というよりも地下壕のような住ま



いである。この中に炉を作って一家が暮らす。十分に暖かいだろう。



冬の家も林蔵が描いている。しかしこの方はまだかなり土の上に盛り上がっている。上ものもかなり露出している。この違いはひょっとすると、林蔵がサハリンの西海岸の冬の家を描いたのに対して、リージアのモデルにした冬の家がおそらくはノグリキ近辺の東海岸に作られたものを模したからかもしれない。流氷を渡って吹くオホーツク海からの海風が厳しいから土を深く掘り下げるのだろう。

しかしこうした家は今はもう何処にもない。ノグリキの人たちは、ロシア連邦のどの町でも見られるコンクリート住宅に住みたがる。もっともこのコンクリート住宅がはなはだ危ない代物で、鉄骨一本入っていない。そのために何かあると全体が一挙に崩れる。かつてノグリキの南30キロほどに数千人ほどが暮らすネフチェゴルスクという町があった。この町に1995年にマグニチュード7.6の地震が起こって、22棟あったアパートが全て一瞬にして崩壊して3千人が下敷きになった。ノグリキのコンクリート住宅もそれと同じ作りだから、何か起こったらひとたまりもない。小さく暖かい小綺麗な木造住宅にこしたことはない。それでもノグリキの人たちもコンクリート住宅に住みたいという。ソ連的な考えの名残でもあるし、その意味で、ある種のステイタスシンボルだからであろう。

林蔵が描き、リージアが模型に作った伝統の夏の家と冬の家は、現代のセンスで造り変えれば住みやすいものに生まれ変われるのではないかと思う。しかしそれもリージアが夢見たように、ノグリキの博物館が新しく作りかえられて、伝統的な事物を将来のヴィジョンにそって作り直すという事業が可能になってからの話であろう。

### カタングリの人

2003年の夏、ノグリキの南10キロほどのカタングリ村を訪ねた。古くからのニヴフの漁村である。岸から東に数キロ、島が横たわっている。もっとも正確には島ではない。正確には砂州である。幅2キロ足らずの砂地と浜草をわずかな灌木が生えているだけの砂の島のようなが、南方30キロくらいでかろうじて陸地とつながっている細い半島である。その半島に囲まれた地域をナビル湾という。その細長い半島の中程に実際に立ってみると、確かにオホーツクの荒い波が半島の東海岸の砂浜に打ち寄せているのが見える。そのためにナビル湾は穏やかな浅瀬の海で、魚と海獣を捕るのに減多にない漁場である。カタングリが古くからニヴフの村だったのはそういうわけだったのだろう。



カタングリを訪ねたのには特別な目的があった。沖の島に特別な人物が住んでいると聞いたからだ。私達は4人乗りのボートに乗って、村はずれかの岸边から真向かいに見える砂州の島に向かった。30分足らず走ると、島の西向きに広がる砂浜に着く。砂浜の向こうの草原の真ん中にあばら屋が見える。

小屋に声をかけながら、私達は立てかけてあった戸板をこじ開けるようにしてあばら屋に入っていった。暗闇からのそのそと出てきて、私達を迎えたのはひげ面の老人だった。

それがアナトリー・カヴォズグさんだった。カヴォズグさんは役者である。それもただの俳優ではない。90年代の始めに撮ったいくつかの映画で名優としての評判を確立したロシアきっての役者である。そのうち何本かはノグリキの博物館にもある。とりわけカザフスタンのアルマトイにある「ソン・シネマ」で撮ったものを見せてもらった。しかし残念ながら日本で見られるフィルムは、同じくソン・シネマで「最終段階にて」(u poslednej chorty) (トウキョウ・シネマ蔵) で、これはパルビューノフ監督・脚本で撮ったセミ・ドキュメンタリである。このフィルムにアナトリーさんも出ている。「ニヴフ語をしゃべるかって？あぁ、しゃべるさ。でも本当を言うと禁じられていた。初級教科書も取り上げられてしまった。あの夜の捜査で家中すっかりメチャメチャになった。ロッチャ(ロシア人)はギリヤークをみんな海に追い落としてしまうんだってね。でも生き残った。集団農場を作らされた。いったい何で生かしておくんだよね？」こういう話が続く溜息のどるフィルムである。「当局がニヴフを酒浸りにした。それで何人も死んだ。悲惨だ。その様はきちんと記録しておかないとな」と語る場面もあった。しかし数年後、アナトリー・カヴォズグさん自身がこの島の小屋で酒浸りになってしまった。立派な俳優であるほど、まともにものを考えるほど、生き続けるのが難しいからだ。わずか数年でアナトリーさんはカザフスタンを去り、故郷に帰ってきて、アルコール漬けになった。ノグリキに住む息子さんがときどきは食料を持って様子を見に来る。それ以外は島の小屋でわずかに魚を捕って暮らしている。時には歌う、一人語りもする。しかしつまりは引き籠もりだ。暗い小屋に寝起きして、時に島の東の海岸に出ては、サハリン2とロシア軍の車が巻き上げる埃に向かって怒る。



私達がうかがった時、久しぶりに訪れた客を喜んでくれて、多分いくらかアルコールの度を過ぎたのだろう。ニヴフの古い昔話をアナトリーさん風にアレンジして二つ語ってくれた。それに古い歌も一つ歌ってくれた。

その後で、檻を見に行くのだといって小屋を出て海岸へ向かった。数日前にアザラシ用の檻を仕掛けておいたという。その檻にうまくアザラシが入っているかどうかを確かめようというわけであった。海岸に浅瀬には定置網も仕掛けてあったが、それにはカジカやナメコの類が何匹かかかっていたが、アナトリーさんはこれは要らないと言って放してやった。どうもサケマス以外の魚は食料として尊重されていないようだ。カラフトマス为数匹捕まえて海岸に置いて箱に蓄えて、小さなモーターボートに乗った。数百メートル沖に出ると、檻の目印に立てた棒が見えてきた。檻に近づいて見ると、確かにゴマフアザラシが一匹入っていた。息子のアンドレイ



は苦勞して船の中に持ち上げ、すぐに頭を棍棒で打って殺して、檻に新しい餌を入れて、もとの状態にもどしておいた。アナトリーとアンドレイ親子は岸に着くとナイフでアザラシの喉に10センチほどの切り込みを作った。何故かと思っていると、そこに手を入れてアザラシを引っ張りはじめたのである。そして意気揚々と岸の草むらに引き上げると、そこで手早く解体を始めた。油と肉は貴重な栄養源であり、皮は周囲を紐で張って乾かす。あとで鞣してさまざまに使うためである。この作業手際よく小一時間で済まして、私達はまた小屋に入ってアザラシ猟の祝杯を挙げたものだった。



アナトリー・カヴォズグさんはこうして暮らしていた。たまにはノグリキの町にでることはあっても、砂州の島での一人暮らしが基本だった。ニヴフの知性を代表する役者としての生涯を思い返し、ニヴフの将来について絶望して、一日一日を生きていた。私達のカメラはその生き様のうちのほんの数時間を映像に収めたに過ぎなかった。私達は再会を約して別れた。しかし、次の、その次の年の冬アナトリーさんはその小屋で亡くなったという。

## ヌヴォ村で

ノグリキ村の北のはずれでサハリン第一の川、トゥミ川が海に注ぐ。そこは南北20キロ東西10キロほどの湾になっていて、東には長い砂州の島が延びている。その湾は古くからニヴフの住みかであったし、それにまつわる昔話もある。湾はヌという。仕事という意味ではないだろうか。ロシア人はヌスキー湾という。そのヌ湾の砂州にヌヴォー、つまりヌ村がある。村と言っても夏の漁小屋が二三軒建っているだけだが、それでもノグリキの人は夏になるとヌヴォーをたずねる。

或る夏、タンジナさん一家がヌヴォーに夏の家に居ると聞いて、行ってみることにした。

丁度、リーヂアさんもロクさんも行ってみようというので、リーヂアさんの長男ブラート氏が船を出してくれた。わりに大きなジュラルミン製のモーターボートで、8人乗りだそうである。近くのスーパーで調達した日用品をお土産に積み込んで、ノグリキ市の北の端にある港を出た。始めはトゥミ川の河口を走っていたので、船は滑



るように走っていたが、やがて湾内とはいえ海上に出ると、結構、海風に煽られてボートが揺れる。それに向かい風もかなり強い。全員、飛沫でずぶ濡れになりながらも30分ほ

ども走っただろうか、なんとか低い砂州の島に着いた。

島の西側、ヌ湾に沿ってノグリキに面した辺りに、何軒かの夏の家が建っている。その一つがタンジナさん一家のものであった。もうたくさんさのマー、つまり干しサケが並んでいた。三枚おろしのマーが多い。固くて丈夫だから三枚にするのだそうだ。一家の主婦ナ



ジェージダ・タンジナさんはニヴフが達者で、おそらくノグリキー円でも何人かの数少ない伝承者のうちである。そのナジェージダさんがさっき獲れたばかりのいい皮があると言う。家に北側に回ると、ゴマフアザラシの皮が木製のフレームに張られていた。鞣すまえによく干すのだらうである。靴を作るのだと言っていた。脂は大切に瓶の中にしまっていた。肉は塩ゆでにしてスープにする。その日のお昼の食事にご馳走

になった。

ナジェージダ・タンジナさん一家はこの夏の家とノグリキの家とを往復している。ノグリキの家は町の北西にあって、そこからはトゥミ川の河口も近い。それに直ぐ近くにニトククさんの家もあって、しばしばお喋りに行く。ニトククさんの奥さん、ニーナさんもニヴフがとても達者で、ナジェージダさんとニーナさん



はだいたいニヴフ語でお喋りをしていたようだ。というよりも、このお二人が出会うとニヴフだけの会話ができると言った方が正確だろう。ニヴフ語を日常的に使える人は確かにもうその程度になってしまっている。そしてこのお二人は貴重なニヴフ語話者なのである。しかし2006年春にニーナさんが亡くなった。ナジェージダさんにとってもニヴフ族全体にとっても、そして彼女についてニヴフ語を学んでいた我々にとっても大変に残念なことである。

ナジェージダさんがサケをおろしている間、私達は砂州の真ん中の小高い丘にのぼってベリーを採った。砂州を西側からわずか数十メートル登ると、東側にオホーツク海が見えてきた。波はかなり荒く、長い砂浜に打ち寄せている。小高い丘に立つと西側とは風が全く違う。夏だというのに冷たく痛い。かすかに生臭いだけでなく、さびた機械の臭いも混じっている。沖合のサハリン2のせいだろうか。丘を南に歩いていくと、一番高いところに何本か棒が立っている。近づいて見回すと、石が不規則に並べられていて、まわりには何



かを祭った跡がある。聞かなければ分からない。まだ丘の下のほうでベリー採りをしているロクさんと呼ばれに行く。ロクさんは難しい顔をして言う。「これお墓よ、風葬の跡みたいね。」

ニヴフのお葬式は複雑である。死んだ人の年齢や死に方によって葬儀の仕方が違い、火葬・土葬（風葬）についてのきまりがある。普通に森のあるところでは火葬がニヴフの葬送の慣習だそうだが、この砂州の丘は普通ではない。砂州の東のオホーツク海は夏でも荒い。サケの時期が終わると海は鉛色になる。それから流氷の季節がやってくる。そんなと



き海難に遭ったらひとたまりもない。このお墓はそういう人の葬儀の跡だったに違いない。ここには樹木もない、従って遺体を置く切り株もない、乗っていた船もないという条件を想像すると、風葬がやむを得ない場所ではある。海難者の葬儀にも難しい規則があるが、このお墓では棒が一本しか建てられていない。こういうとき、普通は乗っていた船も遺骸

ともにかざられるのだが、このお墓には船の跡がなかった。それもこの人の海難がどうい

うものだったかを想像させる。

丘のもう少し先にもお墓があった。このお墓の棒は少し短い。さっきのお墓に祭られた人と年が違うのかも知れない。ヌヴォーの砂州にはこうした墓がまだあるのかも知れない。夕方、波が立ってきた。内海でもボートに横波を受けると安全ではない。私達はタンジナ一家の夏の家を辞して、ノグリキの港に戻った。リーヂアは「ああ、たくさんご馳走になった。やっぱりヌヴォーで作るマー（干鮭）はおいしいね」とはしゃいでいた。本当にそうだと思った。風が違う。程よい塩分と水分を含んだ風がその味を作るのだろう。

### ヴェンスコエ村で

ヌヴォーから湾を挟んで山側にヴェンスコエという村がある。海岸の小高い丘が広い台地を作っていて、そこからヌ湾と砂州とその向こうのオホーツク海が見渡せる。



ここにかつてニヴフの大漁業コルホーズ（大規模作業場）があった。ノグリキ近郊の村や部落に住んでいたニヴフたちが近くに移住させられたり、毎日運送されたりして、ヴェンスコエの丘に集められ、そこで集団労働を強いられた。このコルホーズも最初はうまくいっているように見えた。しかしソ連とい

う巨大国家が崩壊すると共に、ロシア人が魚の選別機械から缶詰作りの道具まで、屋根板さえも盗んでいった。それでもしばらくはニヴフ人だけで作業を続けていたが、やがてほとんどの人が廃墟になっていた昔の村へ帰っていった。そして今も残っているのはわずかに二軒、ムヴチク家の親族だけになってしまった。

ある年の夏、私達はムヴチクさんを訪ねた。ご主人は漁に出ていたが、奥さんのリーチアさんが家の仕事をしているところにお邪魔した。リーチアさんは1941年生まれだから、まだまわりでニヴフ語が日常的に話されていた時代に育った。生まれはチャイヴォ村、昔からニヴフが多くすんでいただけでなく、近在からよく人が集まる村であった。チャイヴォ村はヴェンスコエから北に30キロほどにある。チャイヴォ湾の東に長くのびる砂州の上にある。丁度ヌヴォー村と同じように、ニヴフの伝統がよく残されてきた村だったので、その風俗や習慣は北サハリンのニヴフ族の代表的な暮らし方としてよく記録されてきた。

もうひとつチャイヴォが大切なのは、そこがニヴフのサハリン方言の分かれ目をなしているからである。サハリンを代表する川、トゥミ川はサハリン島の真ん中から北に流れてノグリキでオホーツク海に注ぐ。このトゥミ川に沿って、よく似た方言が分布している。人の交流がこの川を中心に行われてきたからである。だからトゥミ川の中流にチルウンブドというニヴフの村があるが、その言葉とトゥミ川河口のノグリキの言葉とは共通点が多い。ところがノグリキから北に30キロも行くと、トゥミ川の影響がなくなる。むしろ北西サハリンの言葉が始まる。だからチャイヴォは、そこからサハリン北西方言が始まるという意味で、サハリンの方言分布の上で、つまり人々の交流の上で大切な分岐点になっている。

ムヴチクさん一家が何時どのような次第でヴェンスコエへやってきたかは聞き漏らしてしまったが、多分ヴェンスコエ漁業コルホーズを作ったときにかり集められたのだろう。あるいは、チャイヴォ湾の島側にはトナカイ飼育を生業とするウイльта人が多くすんでいるが、その人たちと何か悶着があったのかも知れない。しかしこんなことは確かめるべきことではなかろう。もしご本人が書いておけると言われるなら、記録しておくべきであろうが。

リーチアさんは、元のコルホーズの一番奥のあたりでマー（干鮭）を作っていた。三枚下ろしの干鮭が多く、後で食事の時にいただいたのも皮付きの3枚下ろしだった。チャイヴォの習慣なのか、個人的な事情なのかは分からない。ニヴフの人たちは不意の来客を大歓迎する。あり合わせのものを調理してテーブル一杯にご馳走をならべる。飲み物はもともとお茶だが、最近ではペプシコーラの類が流行ってきた。もっとも私達もそのたぐいの飲み物をお土産に買っていったのだが。

私達には、たまたまノグリキに帰ってきていたレーナ・ニトククさんがついていってくれた。彼女はユージノ・サハリンスクの州立民族博物館のキュレータ、かつて知里眞志保さんが務めていた博物館の研究員である。若く美しいお嬢さんで、ニヴフ語がよくできる。お母さんのニーナ・ニトククさんがニヴフ語の達人だったので、親譲り、つまり正真正銘の母語を会得している珍しい若手話者である。中学生のころ何となく民族衣装を着て踊っていたところをモスクワから来た新聞記者に写真を撮られてしまった。その写真が中央の人気雑誌『アガニューヨーク』に掲載された。ソ連邦東端の美女というわけである。そこで大変なことになった。ニーナさんの言うには、モスクワの将校さんからお嫁に欲しいと言ってきた。レーニングラードの学生がラブレターを寄こした。娘はまだ若すぎるからという返事を出すのが大変だったというのである。こうしてレーナは幼いころから有名人だったので、リヂアさんのお孫さん達もレーナにくっついて片時も離れようとしな



そのレーナが手伝ってくれたおかげで、間もなく料理ができあがった。リヂアさんのコルホーズ解体に関する苦労話を聞きながら、ご馳走にあずかった。ときどきはニヴフ語の混じる雑談が小一時間ほど進んだが、一つ難しい問題が話題に上った。ヴェンスコエあたり



りにニヴフ族自治区域をつくろうという計画があるというのである。ノグリキに近く、ヌヴォーも湾の向こうにある。かつてヴェンスコエ・コルホーズも栄えた一時期もあった。ニヴフ族にとってさまざまな因縁のある土地柄でもある。それに北西方言と南東方言とが境を接する土地柄というだけで、ニヴフ全体の自治区域としては格好な場所ではある。その点では確かに有力候補地の一つではある。

ニヴフ語混じりのロシア語でこんな話をしている内に日が陰り、ノグリキに帰る時間になってしまった。本当はリヂアさんニヴフ語で昔話を聞いて録音しておきたかったのだが、怠慢にも、レーナに「いつかやっという」と頼んで、私達はムヴチクさんの家を辞した。リヂアさんは作業用の前掛けをつけて、コルホーズ時代の駐車場らしい広場まで私達を見送ってくれたのだった。



コルホーズ跡

## 5. ネクラソフカの人々

### ネクラソフカへ行く

ネクラソフカは北の町である。北緯 5,40、東経 142.30 というから、札幌の真北 1200 キロの辺りにある。サハリンの北端シュミット半島の付け根にポームル湾という水域があるが、その辺りにある小さな村である。湾を望む景色（右図）はちょうど網走のサロマ湖のように、夏になると赤い花（厚岸草 *salicornia europaea*）が咲き乱れる。立



派に人の住めるところではある。しかしそこへ行くにはそう簡単ではない。稚内からまず汽船でコルサコフへ着いて、汽車でユージノ・サハリンスクへ小一時間、そこからノグリキまで夜行列車で 10 時間かかる。ここで一泊するのはよいが、ここからは汽車がないし、直行のバス路線もないので、まずノグリキからバスでオハの町まで行く。ここはもうサハリン島北端のシュミット半島の付け根であるが、ネクラソフカまではもう一頑張りしなければならない。オハからさらに一時間ほどバスに乗って西に走るのであるが、そのバスが一日に一往復しかない。それもポンコツの乗合自動車がどろんこのがたがた道をのたうって歩くと思えばよい。

しかし何故そんな苦勞をして、その北の町にまで出かけるかと問われれば、それにはちゃんとした訳がある。第一に、この村には昔からニヴフ族がまとまって住んでいた。サハリン島の西部にはもともとニヴフ族の拠点が三カ所あったという。間宮海峡に面した二つの村ルイブノエとルポルヴォー、それとこのネクラソフカの三村だった。このうちルイブノエとルポルヴォーは今では寂れてしまって、ニヴフ人はもう住んでいないという。しかしネクラソフカだけは昔の規模を維持してきた。つまり、現存するニヴフの古くからの村である。だから、この村には、昔からの生活を守ってきた人々と、その人達が受け継いできた伝統的な文化が部分的にでもまだ残っている。第二に、ネクラソフカではニヴフ語の教育が続けられてきた。サハリン島でニヴフ語の教育が一貫して続けられてきたのはこの小学校だけである。大陸側のカリマと並んで、そのために大変な努力が払われてきたし、その成果も優れている。第三に、ネクラソフカはニヴフ語の北西方言の根拠地である。東海岸のチャイヴォまで下がると、トゥミ川流域の方言圏になる。ネクラソフカ村は行政的にはオハ地区に含まれて、経済的・文化的にもその中心都市オハからなにかの影響をうけている。しかしニヴフ族の人口・密集度という点でオハを上回っているし、言語的にはネクラソフカからオハへの影響力の方が強い。第四に、ニヴフ語の月刊紙『ニヴフ・デ

イフ』がこの村で生まれて、いまだに主にこの村で編集されている。編集長と敏腕記者がこの村に住んでいるからである。

こうした理由でネクラソフカ村はニヴフ人とニヴフ語に触れようとするものにとっては、その巡礼の少なくとも一つの大切な目的地なのである。私達の友人タクサミ氏が正当にもまずネクラソフカへ行こうと誘った訳であった。

### ネクラソフカ小学校

1998年の夏はじめてネクラソフカを訪れたとき、私達の車はまずはネクラソフカ小学校のグラウンドに入った。悪路を走ってきたので、予想以上の時間をくってしまった、あたりはもういい加減暗くなってしまっていた。聞けば、一週間ほどはこの小学校の寄宿教室にお世話になるという。そういえば、この村には宿屋というものがない。食堂というものもない。私達一行5人は子供用の簡易ベッドをあてがわれて、食事はそのあたりのキオスク風の店で調達するという生活を余儀なくされた。しかしそれはそれでよい。フィールド・ワークにしてはそれで上等である。そして翌朝、持参のカップラーメンで飢えを凌いだと思ったら、早速お呼びがかかった。直ぐに教室に集まれというのである。

教室ではすでに歓迎の準備が整っていて、先生達が集まっていた。驚いたことにニヴフ人らしい先生が多い。数学の先生も、歴史の先生もニヴフ人だという。ハバロフスクやユージノ・サハリンスクの教育大学を卒業して、郷里に帰ってきたのだという。ニヴフ語担当の若い先生もいる。ネクラソフカでもニヴフ語は日常に使われる言語でなくなって久しい。だから、この先生達もたとえおじいさん・おばあさんから聞きかじっていたとはいえ、生粋のニヴフ語の母語話者であるとは言えない。むしろ民族の母語を学校で習ったのである。選択科目としてのニヴフ語を習って、大学を出てからニヴフ語の教育に少しずつ携わってきたというのである。



ネクラソフカのニヴフ語教育をそこまでに育てた人がスヴェトラナ・フィリモノーヴナ・ポレーチェヴァさんである。ポレーチェヴァさんはもう25年にわたってこの小学校でニヴフ語の授業をしてきた。授業といっても義務教科ではなく、補修の選択科目であるが、年75人程度の生徒が2年間初級と中級の授業を受ける。生徒が多い年では1・2年にわたって4クラスが組まれることもあるという。教材は120ページ程のカラーの立派な教科書で、ポレーチェヴァさんが苦勞して実践的に作成したものであ



る。これをチュンネンル・タクサミ氏と共著という形でペテルブルグの教科書出版社から出した。表紙に書かれた本のタイトルは『ラドゥーガ』(虹)だが、内表紙には『ルイ・ベタシ』(雷の飾り=虹)とニヴフ語の表題が書かれてある。私達は後の方の名前が好きなのでこの本のことをもっぱら「ルイ・ベタシ」と呼んでいる。

この教科書は、他のものに比べて、いくつか違うところがある。まず最初からニヴフ語でニヴフの生活を語るという姿勢を貫いている。次いで、教材の文がすべて著名入りであって、ニヴフの古老たちの名が連なるだけでなく、トルストイの童話のニヴフ語訳もあるという具合である。またニヴフ人の現代の生活のさまざまな局面がニヴフ語で語られて、知らず知らずにニヴフ語を生活語として使えるように作られている。そのために易しいぶんから難しい文へという傾斜をとらずに、始めからすぐニヴフ語を使えるようにするという原則に立っているようだ。そのためか、後ろから3ページ目に次のような文が出ている：

「ニウン ヴォウフ ネクラソフカウフ クックワチ ニヴフグー フムジラー。

(私達の村ネクラソフカにはたくさんの人が住んでいる)。

ヴォウフ コルホーズ『クラスナヤ ザリヤー』イヴジ。

(村には「赤い夜明け」というコルホーズがある)。

フング チョヌンニヴフグー オルボッチグー。

(そこに漁師達が働いている)。

チョヌンニヴフグー トウルフ クァギ グンタ。

(漁師達は冬にコマイを捕る)。

トルヴトガン テギゴー ヴェルゴー ルギゴー グンタ。

(夏になるとカラフツマスや夏サケや秋サケの漁をする)。

ヴォウフ ピラ シコーラ イヴジ、ポチタ イヴジラー、ペカルニヤ イヴジラ、

(村には大きな学校がある、郵便局も、パン屋もある、)

セリソベート ハラ、プロフィラクト ハラ、ヌクル ママジン ハラ イヴジ。

(村議会とか診療所とか雑貨商とかもある)。

ニウン ヴォウフ トウフク ナマタ、ポリュールタ、ピラ スタジオン イヴラハジ

(私達の村では家もいろいろで綺麗で、おおきな運動場も作られている)

ヴォウフ ドームクルトゥーラ イヴジ、ニヴフ アンサンブル「ピラ ケン」イヴラ ハラ

(村には文化の家があるし、ニヴフ族のアンサンブル「大きな太陽」が活動している。)

フ アンサンブル ウク ウムグウ O.A.ニャヴァン・ヤルチュク プウリシジ。

(このアンサンブルはO.A.ニャヴァン・ヤルチュクおばあさんが作った)

アンサンブルウフ ニヴフ ウムグー ハラ、ロチャ ウムグー ハラ プウリシテ ル

テー ハジ。(アンサンブルにはニヴフ人の女性だけでなくロシア人の女性も参加して演奏をしている。)

## S. ポレーチェヴァ



こんな感じでネクラソフカの子供達は先祖の母語を外国語のように習っている。そしてポレーチェヴァさんは熱心であるだけに結構に厳しい先生のようにだ。同僚の先生達もその厳しさを十分に理解して、彼女を敬愛しているように見受けられた。それに、ポレーチェヴァさんはニヴフ語の優れた先生であるだけでなく、ニヴフ語のインフォーマントとしても

貴重な存在である。私達の仲間はポレーチェヴァさんにつききりでお教えを頂いた。

## 月刊『ニヴフ・ディフ』の編集者たち

月刊『ニヴフ・ディフ』(III-3の項参照)は、1990年に刊行された。編集局の代表はリーマ・ハイローヴァさんだった。

発行地はオハで、まだ古い『サハリン石油従業員新聞』の後継紙であると記されていた。この新聞は休刊を繰り返しながらも、数年はなんとか不定期に刊行されていたが、1966年の末には完全に休刊を余儀なくされる。その後さまざまな方面で紆余曲折があつて、ともかくも月刊『ニヴフ・ディフ』は息を吹き返した。



それが最初の刊行から10年後の1999年の5月のことだった。

新生『ニヴフ・ディフ』の編集長にはラリーサ・イワノヴナさんがサハリン州政府から任命された。いい人選だったと評判の人事である。彼女は昔からのネクラソフカの人なので、三日にあげずユージノ・サハリンスクとネクラソフカとを往復している。よく体が続くと思われるほどである。それに、彼女を助ける、と言うよりも、実際には、引っ張っ



ているというべき記者がいる。その人がアレキサントラ・ヴラジミール・フリオンさんである。やはりネクラソフカ人である。アレキサンドラ、通称シューラ(左写真)の姿はサハリン島の何処にでも見られる。ユージノ・サハリンスクやチル・ウンヴドで何か集会があるときまって彼女がいる。そして新聞の次の号には決まって彼女の署名入りの記事が載る。それに至る所に記事を依頼して、着実にとってくる。また書ける人を見つけては記事を依頼する。それを若い同僚の

レーナ・ニトククさんなどと一緒に編集する。彼女の名刺には「記者」としか肩書きを書いてはいないが、大変な編集能力をもっている。若いのに、いわば『ニヴフ・ディフ』の大黒柱と言ってよい。

ネクラソフカはこうして『ニヴフ・ディフ』編集の中心地でもある。それだけの人材をかかえた文化的な水準の高い村でもある。

### ヴェーラ・ヘインさん

ネクラソフカ村にはニヴフ語をきちんと話せて、ニヴフの伝統生活の一こま一こまを普通に再現できる人々がまだ何人かいる。ヴェーラ・ヘインさんもその一人で、もともとはアムール河口から北に30キロほど離れた村の出身で、大陸ニヴフ人の父とサハリン北部出身の母との次女として1929年に生まれた。だからそろ



そろ80才に手の届くお歳になる。彼女がサハリン在住の優れたニヴフ語北西方言の話し手であることはかねてから聞いていたので、私達は1991年の第一回のサハリン訪問以来、誰かがきまってネクラソフカに彼女を訪ねてきた。そしてヴェーラ・ヘインさんのニヴフ語もきちんと記録されている。とくに札幌学院大学の白石英才さんとノグリキの同僚ガリーナ・ロクさんとは彼女の語ったさまざまな種類のことばを丹念に記録して公刊している。その資料の一部はオランダのフロニンゲン大学の刊行物でもあるので、ヨーロッパにも知られた貴重な音声資料として高い評価をうけている。

ヴェーラさんのニヴフ語の名は「プグスク」という。「捨て子」というほどの意味だが、兄姉がみんな幼くして死んでので、この子だけは悪霊から守ろうとしてこんな名をつけたのだそうである。アイヌにも似た習慣がある。わざわざ「醜い」などという名をつけて悪霊がとっていかないようにするのである。お陰でヴェーラさんは長生きして、私達にニヴフ語とニヴフ文化とを伝えてくれているというわけである。



ヴェーラさんはムックリを弾く。アイヌから習ったのかと聞くと、そうではなく、ニヴフにも昔からムックリがあるのだという。それもさまざまな民族がもっている金属製の口琴ではなく、竹種の材で作ったものなので、アイヌのムックリとまったく同じ形で、弾き方にもかわりはない。しかしリズムや響きがちょっと違うような感じがする。直川礼緒さんの『口琴のひびく世界』2005によると竹製のムックリは蝦夷錦と一緒に運ばれたというから、この交易に深く関わったニヴフ族がムックリをもっている

何の不思議はない。問題はルーツと音楽的類型の変化である。この点は専門家に詳しく検討して欲しい。

ヴェーラさんのお宅でモースをご馳走になったことがある。ただいただいただけではなく、その作り方をすっかり見せていただいた。モースはモスともいう。ニヴフ語では母音の長短で意味が変わらないから、単純な語を強く発音すると長くなるだけである。



モースについてはプフタさんの『ニヴフ語・ロシア語分類語彙表』には「ニヴフ料理」の項に「魚の皮をゼラチンとして用いて適宜加工し、それを処理して、そこへ砂糖、バター、イチゴ、又はキイチゴ又はガンコーラン、コケモモ、クロマネノキ、ツルコケモモなどを加えるというレシピで作られたデザート」とある。チョウザメの浮き袋からゼラチンを作ることもあるそうだが、いずれにせよ魚皮からゼラチンをとって、そこへベリーを入れたプリンである。ニヴフ料理はサケやチョウザメなどの魚を主にして野菜を穀物と一緒に食べるだが、レシピは豊富で、テーブル一杯にさまざまなお皿を並べて最大限にお客を遇する。料理をけちると、村中の非難的になる。評判が落ちて、人が寄りつかなくなる。大変に人付き合いを大切にしている人たちである。

ヴェーラさんは朝早くからモース作りの準備を始めた。まずロンとかオロンとか呼ばれるモース作り専用の木桶を出してきてきれいに洗う。ヴェーラさんのオロンはかなり大きく、長さ80センチ、幅25センチ、高さ(=深さ)10センチほどだった。両端の台にはニヴフ模様が彫刻されている。



これに鱗をとったサケの皮を水に潤かしておいたものを柔らかくしごいてして、オロンに入れる。それをママスと呼ばれる独特の棒で捏ねる。長時間ゆっくりと捏ねてゼラチンを抽出する。牛乳を少しずつ加えていくと、とろとろの白い液体がオロン一杯になる。



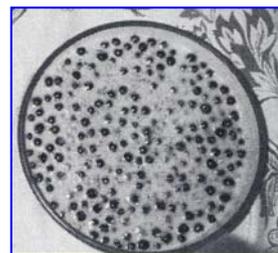
白い液をさらにゆっくりとかき回しながら、そこへベリーを入れていく。ベリーのなかでの最高級はガンコウランらしい。その黒ブドウ色の粒がオロンいっぱいになるくらいに入れてかき回しながら砂糖を加える。ちょうどよい粘りが出てきたら、少しずつガラスの容器に移して、台所のひんやりした所に置いてしばらく寝かせる。



表面が落ちついて固まってきたら出来上がりである。モースはデザートだから、食事がだいたい終わってから、「さあ、モースだよ」と声をかけて、ガラスに入った白濁したプリンをテーブルに並べる。これが一番

のおもてなしである。

魚の皮のゼラチンだから、多少は生臭いと思ったら、そうではない。上質の自然な味のプリンである。ベリーもガンコウランに赤スグリなどを加えて彩りをすることもあるという。



ヴェーラさんのお宅で私達のご馳走になってばかりいたわけではない。ニヴフ語の北西方言について貴重な記録を作ることができた。さまざまな単語の難



しい使い方についても教えていただいた。時にはご主人のピョートルさんもそばにいて、助言をしてくれる。それを私達はできるだけ漏れなく記録した。その資料はかなりの分量なので、まだ一部分しか公刊されていない。ヴェーラさん夫妻のような生粋の話し手が健在である内に、記録の成果をお見せしたいものである。



ピョートル・ハインさんは漁師である。浜にいったみないと誘われたので、私達はカラフトマス用の網を繕うのを見せてもらった。お手伝いしようと思ったのだが、結局はものの役に立つわけもない。ピョートルさんの仕事を見ながら、「最近はやはりここでも魚が少なくなった。しかもコルホーズなどの生産組織が壊滅してしまったために、船も機器も整備できず、ネクラソフカでも漁業の未来は決して明るくない」という話をうかがった。それにロシア人による密漁が横行していることも、不漁の原因の一つになっているという。このサハリン北端の浜も決して安泰ではない。ニヴフの言語と文化を維持しようというとき、基本的な生活を続けるための社会的な条件をまず整えなければならない。そのために私達を何をどれだけどのようにできるかを、いまだにいつも考えあぐんでいる。



厚岸草 in Nekrasovka

## 6. ポロナイスクの人々

かつて日本国有鉄道に樺太東線というものがあつた。南樺太が日本の領土であつたころ、樺太南端の大泊（現 コルサコフ）から豊原（現 ユージノ・サハリンスク）を経て敷香（現 ポロナイスク）までを汽車が走っていた。その頃、北緯49度10分の敷香には日本帝国の最北端の駅があつた。それは昭和20年代の北海道の駅を思わせる小さな木造のいかにも北辺の駅だった。しかし今はその駅跡には極東ロシアに典型的な薄汚れたコンクリートの建造物が立っているだけになってしまつて、人々の賑わいも趣のかけらもない。



ポロナイスクに汽車で行くには、南のユージノ・サハリンスクから北上するか、さもなければ、樺太鉄道の北の終点ノグリキから南下するかのどちらかになる。しかしどっちからくるにせよ、汽車は夜中の3時頃という大変に不便な時間にポロナイスクに着く。しかもこの土地では駅前にタクシーが並んでいるなどという風景を想像するわけにはいかない。だから夜中に誰かに迎えに来てもらう他はない。言い換えると、そのような人を知っていなければ、この駅に降り立つことはできないということである。ポロナイスクに一般人の立ち入りが許されて久しいが、この町を訪れる不便さにかけては、侘びしいどころか、むしろ腹立たしい限りである。かつては3万人かの市民が暮らしていた町がこの50年で殺伐とした荒野に変えられてしまったのである。そのような特殊な破壊の才能をもった人間集団によってポロナイスクだけでなく、実質的にサハリンの全土が占領され支配されて60年余が経つた。そしてチェホフが報告した時代から数えて、先住の諸民族の生活のなかにならず者が押し入つて200年が経つた。そしてサハリンは今もお悲しい。

数年前ガリーナ・ロクさんと一緒にノグリキから6時間ほどかけてポロナイスクにやつてときには、中川さんという青年と湊さんというお嬢さんが深夜日本製の中古車で迎えに来てくれた。中川さんはお祖父さんが日本人だけれども、日本語は全くできないと言つては、「どうぞ」と車のドアを開けてくれた。日本製のポンコツ自動車ですら真暗な町を10分ほど走つて、中川さんの車が止まった先は、海岸に近いサンギさんのお宅だった。サンギさん一家は真夜中にも拘わらず、たくさんのご馳走を用意して私達を待っていてくれた。サ



ンギさんはノグリキ近郊の出身、ロクさんとは旧知の仲で、作家のウラジミール・サンギさんの弟に当たる。そのサンギさんの奥さんがスヴェトラナ・サンギさん、ニヴフ人でポロナイスク博物館の館長である。こうしてポロナイスクで私達はスヴェトラナさんのお宅に数日やっかいになって、ポロナイスクのニヴフやウイルタの人々からさまざまな話を聞くことができた。

### ポロナイスク地域博物館

そのポロナイスクにも立派な歴史民俗博物館がある。それは一応サハリン地域博物館の分館とはなっているが、実は独自の運営方針に基づいた博物館であって、ユージノ・サハリンスクの本館とは異なり、サハリンに住む少数民族の持ち物を多く収集し展示している。ニヴフのサケ皮で造った民族衣装や、裏にアザラシの皮を張り付けたスキーなどはいままでのない。こまごました手芸作品が中部サハリンの地域ごとに几帳面に分類して展示されている。とりわけポロナイスク近郊にある「オタスの杜」(以下の項を参照)にあった遺品をふくめて、旧日本領土だった時代の文物が多い。



展示品のなかにはまだよく分からないものもある。そのひとつに、日本人のものではないかと疑われる写真が何枚か保存されている(右)。敗戦のどさくさに紛れてしまって放棄されていたものが、縁あって博物館にたどり着いたものかも知れないし、特別に謂われ因縁のある写真なのかも知れない。いまのところこの写真の由来ははっきりしていない。いずれにせよ詳しく調べる必要がある。



また古い黒曜石が何個か展示してあるが、産地も年代も特定されていない。北海道白滝産のこともあり得る。そうだとしたら、ポロナイスクと北海道との交易がたちまち5千年も溯ることもあり得ないことではない。白滝の黒曜石が青森の三内丸山遺跡から出てきたことは知られているし、北方の遠くの地に運ばれたことは想像されてきた。それがポロナイスクにあっても一つもおかしくない。これらはきちんと成分検査をして確認すべきことである。



こうしてこの博物館には、近代から太古までのモノがまだまだたくさん解明を待ってい

るようである。そのためにはこまかい分野の専門家の協力が欠かせないが、今の状況では先行きは楽観できない。スヴェトラーナさんをはじめ先住民族の研究者達は国境を越えた交流について詳しい検査をすることに全く躊躇するところはないのだが、ここもやはり財政的な困難をかかえている。ロシア人の研究者のなかにも物分かりのいい人達は決して少なくないが、彼らとてロシアという「国」と関わったところできまって問題が起こる。そしてスヴェトラーナさんたちの苦労は二重になる。まずロシア人研究者と協議して、彼らに彼らの国と交渉させなければ、用が済まないということが多くある。そこで先住民族の



研究者をできるだけたくさん創ろうという計画をかねてから続けてきた。その努力もそろそろ成果をあげつつあると言いきななのかも知れない。もともと今では樺太の全人口のなかで先住民族の人口比率は大変に低い。0.3%しかない。そのなかからすでに、何十人のキュレータと博物館職員

がいるのだから、ニヴフ人やウイльта人の研究者の密度は非常に高いと言わなければならないだろう。大変に知的な人たちなのである。若い人たちなかには日本へ行って勉強したいというひが多い、そのような文化的交流を進めたいと双方でこころから願っているのではあるが、言葉を始めとして問題はあまりにも多い。さらにロシア政府と日本政府という世界でも稀なほどに愚かな外交・行政機構が相手なのだから、一回で通るべきものが何年通らなくても当たり前という仕儀である。

館長のサンギさんのお宅にはいろいろな日本人が出入りする。田中了さん（『戦争と北方少数民族』1994 ほか参照）もそのうちの一人で、ウイльта人のゲンダーヌ（北川源太郎）さんの生涯をたずねて、しばしばポロナISKを訪れた。サンギさんのお宅はこの土地の少数民族の人たちにとって大切な拠り所なので、何かというとキタジマ・リユーバさん（ウイльта）もキム・マサコさん（ニヴフ）などとともさまざな人たちが集まる。田中さんもサンギさんのお宅や博物館でこの人たちとの交流を進めたものだった。

私の同僚の丹菊逸治氏もスヴェトラーナさんから実にいろいろなことを教わった。ポロナISKには未だに日本の姓を名乗る人が多いので、その由来を尋ねて、ニヴフやウイльтаの人々の歴史を掘り起こしている。もちろん掘り起こしてはいけない個人史も多い。胸の内に閉まっておくだけの歴史もある。しかしポロナISKを巡ってニヴフ・ウイльта・アイヌ・日本人がどのように触れ合ったのかを知ることは大切なことである。丹菊氏などによってその歴史が正しく明らかにされることを期待したい。

## オタスの杜

ポロナイスクはポロナイ（アイヌ語で「大きい川」）の河口にできた町である。この町が日本統治下(1908~1945)で何故に敷香（シスカ・シクカ）と名付けられるようになったかははっきりしない。むしろ「ポロナイ」と名付けていたほうがよかっただろう。ポロナイは確かに豊かな大きな川である。サハリンで一番大きい川は中部の山林から北に流れるトゥミ川ということになっていて、一方で同じ地域の南尾根を源にして南に流れ出すのがポロナイは二番目とされている。確かにこちらの方がいくらか短い、しかし河口の水量はポロナイのほうが多いのではないだろうか。

ポロナイを数キロ溯った西側に遙かに山影を望む小高い岸辺がある。その一帯をオタスと呼ぶが、これはアイヌ伝承文学には「オタスッ」という形でよく出てくる地名である。しかしそれがこのオタスと同じなのか、何か別の関係があるのかは分からない。地名の由来もオタ（砂）と関係がありそうだが、この語源ははっきり分からないというのが本当だろう。

オタスの杜といわれる一帯は、南樺太が日本領土だったころ、周囲をポロナイの支流に囲まれて小さな島をなしていたらしい。このポロナイの中州のような小島が歴史に名を刻むようになったのは、1920年代のことである。日本帝国の軍隊は、生まれたばかりの若いソ連に対して干渉戦争を始めた。日本軍は1925年まで北樺太全域を支配していたが、この年の末には北緯50度線まで撤兵を余儀なくされた。同じ年の暮れ、ディミトリ・ヴィノクーロフと称するヤクート人が家族とトナカイを引き連れて敷香の町に現れたという。憲兵隊はこの男を尋問し検査したが、スパイとも判定不可能であった。さまざまな経緯の末、結局は、敷香近郊のオタスの森に住んで、トナカイ飼育を続けてもよいということになったらしい。オタスにはもともと先住民族が住んでいたから、ヴィノクーロフもそこへ行けと言われたのか、ヴィノクーロフが住み始めてから先住民がその地域に集まり始めたのかははっきりしない。もっとも樺太県庁は、最初から先住民をオタスに集中的に住まわせることに積極的だったらしい。樺太の原住民が住む土地として観光の呼び物にするつもりがあったのかも知れない。実際オタスはこのヤクート人の家族をはじめ、次第に先住民族の家族が移住してきて、先住民族の皇民化のためにと称して、1930年には先住民族の子弟のための学校も開設された。日本帝国の北端の町のシンボルとして売りだそうとしたのであろうか、オタスに皇族の訪問を誘致するほどの意気込みであった。後にヴィシネフスキーというロシア人が『オタス』と題する本を書いているが、そのなかに「オタスは美しい檻であった」と書いている。ポロナイ川の畔に広がる丘は、一時期はニヴフやウイルタの人々が住む和やかな部落であったのかもしれない。

1940年代の始めにしばしばこの地をおとずれた言語学者がいた。当時北海道大学理学部でドイツ語の先生をなさっていた服部健さんがその人である。服部さんの言語研究の記述対象はギリヤーク語（ニヴフ語）で、何度も南樺太に渡り、汽車で敷香を訪れては、オタスでニヴフ語の聞き取り調査をなさった。その成果は後に『服部健著作集』2000にまとめられているが、未整理のものがまだあって、それは北海道立「北方民族博物館」（網走）に保管されている。大変に貴重な記録である。



その本に一葉の写真が複写されてある（右写真右の青年）。若い服部さんがオタスで聞き取りをなさっている写真であるが、誰が撮ったのかは分からない。学友のアウスタリツさんかもしれない。

この本の中で服部さんはオタスについて次ぎのように書いている。「この新興都市敷香の片隅であるポロナイ川河口の船着場から北西1軒のところに小さな島がある。この島の岸辺から、2、3町踏込むと、そこは雑草の茂るなかに灌木が立ちならび、わずかな喬木がそびえ立っていたが、当時、人々はここをオタスの森と呼んで、夏には敷香の町の人々との憩いの場所となっていた。ここは南樺太の原住民のうちアイヌ以外の人々の生活の中心をなしていたようである。」「南樺太でアイヌについて数の多いのはツングース系のオロッコでその数は約250人、ほかにキーリンと呼ぶツングース系の一部族が十数人、ギリヤークは約100人いて、生活の都合で諸所に住んでいたが、これらの人々が平素一番多く集まっているのはオタスの森であった。」ここでオロッコとは今では自称のウイルタ、ギリヤークはニヴフと呼ばれる人たちで、服部さんが訪れることのできた時代には、この写真からも窺えるように、オタスも敷香の穏やかな一郭だったのである。



しかし第二次世界大戦が始まって間もなくオタスにも波風が立った。日本軍の特務機関が先住民族をスパイとして利用することを考え出したのであった。当時ソ連とは不可侵条約が締結されていて、ソ連軍との軍事的衝突が起こるとはまだ一般人には考えられていなかったころのことである。それでも先住民達には軍の命令に従って、北緯50度線を越えてソ連領に入り、アレクサンドロフスク軍港の様子を偵察するという任務まで与えられたという。こうして帝国日本が敗戦へ進む過程で、オタスの人々は次第に日本軍に編入されていった。このことが敗戦後に先住民族に人々に悲劇をもたらすことになる。

1945年8月に戦争が終わったとき、敷香の日本人達は内地へ引き上げるために、汽車で南へ向かった。多くの住民が敷香の町を去ったとき、町は日本軍の手によって放火されたという。オタスの先住民にも、さらに田舎へ逃れるひとびとが出た。その後もオタスに居残った人々のなかには日本軍関係者としてソ連軍に逮捕され、「矯正労働」のために大陸の収容所に送られるものも出た。ゲンダーヌさんのようにアムール川中流につくられた強制収容所で刑を受ける人もいた。

第二次大戦後、オタスにはソ連の行政府によっていくつかのコンビナートや漁業コルホーズが作られた。それも1980年代まではなんとか生産活動が行われていたらしい。しかしソ連経済の衰退と共に、オタスの産業も廃れ始めた。ソ連崩壊後のオタスはさらに無惨である。かつてそこに先住民の穏やかな生活があり、そこで服部健さんのような研究者が先住民の人々にことばを教えてもらっていた姿を知っているものにとっては、この廃墟はあまりにも痛々しい。



私達は数年前に再びオタスを訪れた。画家木村捷司氏が描いた「オタス」(網走美術館蔵)の辺りを散策してみようと思った。しかしそこにはもう丘も林もなく、鉄くずが散らかっているばかりだった。日本帝国とソ連とが共同して破壊した荒野に過ぎなかった。



元オタスの杜からポロナイを望む

## 7. ユージノサハリンスクのニヴフ人

ユージノサハリンスクはロシア連邦サハリン州の州都である。サハリン州は、現在の日露関係では、サハリン島全土と千島列島全域を統治することになる。全域で北海道を少し越えた面積をもち、オホーツク海東部と千島列島海域全体の海域を支配する。帝政ロシアとその継承国家等が過去500年にわたって支配を目論んで、第二次世界大戦後やっと目的を果たした北ユーラシア大陸の東端部分である。従って、この地域は古くからロシアと日本を統治する者達が、先住諸民族の存在も利害も一切無視して、領土の帰属を争ってきた係争の地である。



ユージノサハリンスク全景

### サハリンの帰属に関わる日露関係

ロシアと日本との最初の公的な接触は、まず1855年日露通好条約（1855＝安政2年）を結果した。ここではサハリンが日露両「国民」混住の地とすることが定められたのだった。しかし明治維新直後の1875年（明治8年）日本帝国政府はサハリンの国境確定を求めて、千島樺太交換条約を締結する。これによってサハリン島全体が始めて帝政ロシアの支配下に入る。この条約の結果、遅くとも13世紀以降そこに樺太に住んでいたアイヌ人、つまり樺太アイヌが日本帝国国民として北海道に移住させられた。かれらは当初は宗谷に、ついで現江別市近郊の対雁（ツイシカリ）に集団居住を余儀なくされたのだった（II-8「樺太アイヌ」の項参照）。

帝政ロシアにとってサハリン島は、もともと重犯罪人を島流しにするための流刑地だった。アントン・チェーホフが詳細な報告『サハリン島』（1893～95）を残しているように、この時期のサハリン島はロシア中の「人でなし」の檻だった。最初の流刑人達がサハリンに来たのは千島樺太交換条約直後の1879年のことである。その後のサハリンは「外は水、中は地獄」といわれたとおりの有様であったという。事実、当時のサハリンのロシア系住民は、ことごとく凶悪な犯罪人とそれを預かる残酷な看守人達からなっていた。しかしその重犯罪人たちの中にはロシア帝国に反逆してサハリンに送られた人々も混じっていた。政治的流刑囚である。そしてそのなかにサハリンの先住民族に親しみ、その貴重な記録を残したインテリゲンチユアが混じっていた。そのなかから二人をあげれば、ウラジミール・シュテルンベルク（1861－1927）、そしてもう一人ヴラチスラフ・ピウスツキ（1866－1918）である。シュテルンベルクはナロードニキ運動の首謀者

として、1889～1897年に、ピウスツキはアレキサンドル3世暗殺集団の一人として捕らわれて、1891～1897年にサハリンで流刑囚としての生活を送った。そこで二人は知り合い、主にニヴフとアイヌについて研究して、貴重な資料を残した。この二人こそが今日のニヴフ研究の正当な学術的な先達であるというべきである。

サハリンをめぐる事態が変わったのは、日露戦争によって日本帝国がロシア帝国に勝ったことだった。戦後のポーツマス条約（1905）によって、南樺太、つまり北緯50度線以南のサハリン島の南半分が日本領とされた。この国境区分が形式的には第二次世界大戦後の1945年までの40年間に及んで続く。

### ユージノという町

日露戦争から第二次世界大戦終末までのこの期間、ユージノサハリンスクは南樺太の行政的中心として、豊原とよばれ、そこに樺太庁がおかれた。この街の骨格はこの時期に定められたと言ってよい。樺太東鉄道の豊原駅前から東に小高い丘が見えた。かつては旭が丘と言った。この豊原駅から旭が丘を結ぶ大通りに官庁や博物館が置かれ、これと直角に一本の大通りが交叉して、そこが街の商業的な中心地を作っていた。そこには拓殖銀行（現サハリン市立美術館）をはじめ多くの近代的なコンクリート建築が立ちならんでいた。旭が丘に向かう大通りは、官庁や教育施設を含む、行政・文教区、それに直角に交叉する大通りは市民生活のための商店街として整然と区画されていた。そしてこの街の構図は現在も変わらない。もっとも旧豊原駅はユージノサハリンスク駅と名を変えてソ連式の駅舎のコンクリートの建物に替えられたし、旭が丘はガガーリン遊園地になっている。また旧樺太庁舎跡には、ソ連の多くの街に建っていたレーニンの像がいまも健在である。そしてその後ろには行政府の仰々しいが安っぽいコンクリートの建物が並んで立っているが。



第二次世界大戦後、南樺太全域が再びロシア人の支配下に入った。日本の敗戦からソ連の崩壊までの期間、ユージノサハリンスクはソ連共産党が統治していた。しかしゴルバチョフによって始められたペレストロイカの波が極東に及んだころから、サハリンにも研究



者が入るようになった。しかしその場合も中央や現地のロシア人研究者との共同研究という形が普通であった。ソ連が崩壊した年、つまり1991年の夏には日本人研究者7人と「西系の」研究者4人を含む調査チームがサハリン全土を回った。

文部省科学研究費補助金（国際研究）「サハリンの少数民族」（研究代表者村崎恭子）によ

るチームがそれで、これはおそらくサハリン少数民族に関する初めての国際的共同研究であろう。このチームの中に二人のニヴフ人研究者が加わっていて、この人たちが調査の場所を指示し、サハリンの大切な人々との出会いを設定してくれた。その一人はチュンネル・タクサミさんである（献辞「タクサミさん」の項参照）。もう一人はサハリン出身の言語学者ガリーナ・オタイナさんだった。彼女はその数年後の1995年12月に亡くなった。ニヴフの人たちと私達にとって大きな損失である。とまれ、この共同研究を皮切りにサハリンの人々との本格的な交流が始まった。画期的な出来事だった。その後の調査や共同研究をするときも、私達は同じようにまずはともかくにもユージノサハリンスクの駅に降り立つ。そして大抵は近くの安宿に部屋をとる。するとそこにはニヴフ人の誰かがもう待っていてくれていて、小一時間の打ち合わせを行った後には、今度の調査では何時何処へ行くかが決まる。それから一緒にレーニン像の脇の道を東へぶらぶらと歩き出す。お役所やサハリン国立（教育）大学の脇を抜けて、仲間の働くサハリン州立博物館を訪ねる。このようにして再びサハリンのニヴフの人たちとの新しい出会いを始めるのが常である。

#### サハリンの行政府のなかのニヴフ人

ニヴフの人たちはもともとあまりユージノサハリンスクには住んでいなかった。ここはサケの登る川もないし、オットセイの住む海岸もない。ただいろいろな人々が集まる町なので、特別な用事のあるときに行く場所であったし、昔はアイヌの人たちとの交易に出てくるくらいがせいぜいであった。ニヴフだけでなく、ウイльта人も昔からこの地域ではなく、ポロナイスク以北に住んでいたようである。第二次世界大戦以前もそのようだったらしく、樺太博物館資料には右のような数値が残っている。それによると、南樺太全体の、樺太アイヌを除いた「土人」は全体で97戸423人だったという。この内オロッコ（＝ウイльта）が276人、ギリヤーク（＝ニクヴン）が99人だったという。



しかし戦後ソ連の支配の下でユージノサハリンスクがサハリン州の首都となってからは事情が違った。その第一の理由は行政府との関係である。まずサハリン州全域から出向かなければならない役所がここに集中している。北のオーハやノグリキからもさまざまや要求や申請を携えてユージノサハリンスクまで出向かなければならない。未舗装の悪路を600キロも走るか、鉄道で一晩かけて出かけることになる。そしてユージノサハリンスクの行政府には二人のニヴフ人が関わっていて、ニヴフ民族と行政府とをつないでいる。その一人はナジェージダ・ライグンさんで、州行政府の先住民族局長という要職を占めている。





一方とし、サハリン州公機関、サハリン州北方先住少数民族協会（以下「協会」と称する）の L.A.ゲナジェヴィッツを他方として、下記の件に関して以下の議定書に合意した：

#### 1. 議定書の目的

1. 1. 本協定の目的は、経済的改革的条件下の法的保護、本来的生業手段の保護、経済活動に於ける伝統的領分の発展、精神的諸分野の再生、民族文化及び母語の維持と発展などの分野に於ける諸問題の解決のために、北方先住少数民族の経済的社会的状況の安定化と協力関係の強化をはかることにある。

#### 2. 議定書の対象

2. 1. 本議定書の対象とは政府と協会との次の問題に関する協力関係である：

○北方先住少数民族の生活実態問題にたいして政府・公共機関の関心を喚起するための適切な措置をするための準備と実行、

○諸種族の伝統的行動様の保全と本来の生業、文化、言語の保護のための諸種族の発展に関わる法及びその他諸規定の整備、

○北方少数民族先住民族の社会経済的及び文化的発展に関する全連邦的及び地方的プログラムの実現、同時に少数民族の土地の利用と保全、伝統的自然利用の権利保護、

2. 2. 協会の行動に関して政府側から援助を行うこと

#### 3. 双方の義務事項

##### 3. 1. 政府側の義務事項

○政府は、北方先住少数民族の経済的社会的発展の連邦的・地方的計画の策定と実現に協会側を誘導する、

○政府は、国際先住民族の10年に関する共同行動を実行する、

○政府は、先住少数民族の伝統的生活と生業の場における自然資源利用計画と環境自然資源の保護に関して生態的・生態学的アセスメントの実行へ協会側を誘導する、

○政府は、協会側に方法的、情動的及びその他の援助を実行する。

##### 3. 2. 協会側の義務事項

○協会は、社会経済的分野での基準規格の改正の作業に関して、また北方先住少数民族に関わる法規の分野で、同時に諸プロジェクトの作成と実現についても、北方先住少数民族の代表参加を保証される、

○協会は、政府によって作成された北方先住少数民族の社会経済文化的発展に関する地域的計画について提案を行う、

○協会は、政府と合同で施策の遅滞に関して先住少数民族の地域協会に情報をあたえる、

○協会は、住少数民族代表から政府に地域の北方先住民族の生活実態について地域協会支部から得られたデータに基づき、全般的、民族的、氏族的生活状態に関して情報をあたえる、

○協会は、政府と共に北方先住少数民族の伝統的生活実態に関して連邦大統領の指示による連邦の法規、及び政府の正規の政策によって定められ、また北方少数民族の生活と生業に関して、ロシア連邦政府によっ

て定められ実行される監査に参加する、

○協会は、北方先住少数民族の伝統的生活経済圏における資源の利用と保護に関わる生態的生態学的環境アセスメントの実施に参加する、

○協会は、政府関係指導部と北方先住少数民族代表との会合を設定する、

○協会は、その権限の範囲で、先住少数民族の利益に関わる政府の決定や地域の法規について提案・補足を行う、

○協会は、その地域機構を通じて、先住少数民族に議決された政府の政策に関して説明を受ける。

#### 4. 特例

4. 1. 本議定書は次の協同関係を予想する：

○本議定書と直接関係する問題を協議するための政府と協会の協議

○本議定書の枠内での具体的計画を協議・実行するための作業部会の設置

4. 2. 本議定書の変更と補足には双方の協議により双方の書名を付したプロトコルを必要とする。

5. 本議定書の発効と停止

5. 1. 本議定書は関係双方の署名の時点で発効する、

5. 2. 議定書は次の件で効力を停止する：

○両者が合意した場合

○一方が議定書から離脱する場合はあらかじめ（2ヶ月以上以前に）一方から他方へ通告しなければならない、

5. 3. 本議定書は1999年6月28日に締結され、2部作成され、同一の法的権利を有する両者が所有する。

6. 両者の法的住所

693011 ユージノサハリンスク市コムニスチーチェスキエ広場39 サハリン州政府

693011 ユージノサハリンスク市平和広場107, 45番地

ここ敢えて補足すれば、この議定書では「サハリン州北方先住少数民族サハリン地域協議会」が州政府と同等な立場をとっていることである。そしてその法的な根拠を国連人権委員会の提言に求めていること、その根拠がロシア連邦によって公的に承認され法令化されている点に注目したい。これは決して他山の石ではない。ひとつの先例であり、同じ立場の民族集団からの強力な示唆であり援助であると考えたい。

#### サハリン州立博物館

日本帝国統治時代「樺太庁博物館」と呼ばれた美しい建物がユージノサハリンスクの中

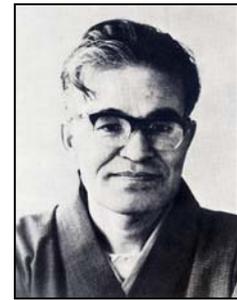
心地に建っていた。1935（＝昭和10）年7月起工、二年後の1937（同12）年7月竣工の鉄筋コンクリート3階建ての日本風建築である（右図）。当時、一階には樺太の植物、動物、鉱物が、二階には3室あって、水産動物室、考古歴史室、土俗室に分かれていた。土俗室はアイヌの部と「オロッコ・ギリヤーク其他」の部に分かれ、それぞれに生活と習俗に関する資料が展示されていたという。



樺太庁博物館は幾種類かの印刷物を出している。研究紀要『樺太庁博物館報告』を始め、『樺太庁博物館案内』や絵葉書と共に『樺太庁博物館叢書』を何冊か出版した。第1輯「となかひ」（広瀬国安）、第2輯「タラバガニの話」（瓜田友衛）、第3輯「にしん」（石井四郎）、第4輯「海豹島と臍臘獣」（村井正雄）、第5輯「樺太アイヌ」（西鶴定嘉著）、第7輯「樺太の食用野草」（福山惟吉・根津仙之助）などである。1941（昭和16）年の予告では、他にも「間宮林蔵」を刊行することになっているが、本当に刊行されたかどうかは今のところ分からない。

樺太庁博物館には言語学者知里真志保（1899－1961）が3年ほど務めていた。

知里さんは東京帝国大学言語学科を卒業してから、1940（昭和15）年に樺太庁立豊原高等女学校教諭（英語担当）として樺太に赴任した。その時に同時に樺太庁博物館技術員を嘱託されたのである。知里さん自身にとって、そして日本のアイヌ語・アイヌ文化研究にとっても、この知里さんの豊原時代は非常に大切な時期だった。1942



（昭和17）年のある時、知里さんは博物館で公開講演を行った。そのとき上の西鶴著「樺太アイヌ」を手にとって激しく批判したという話が伝わっている。そしてこの年に知里さんは「アイヌ語法研究－樺太方言を中心として－」を『樺太庁博物館報告』第4巻第4号に掲載する。これが後に博士号請求論文となる。知里さんは同報告の翌年号にも何編かの論文を発表しているが、どれも貴重な研究であって、今日でもアイヌ研究のための必須の文献である。しかし心臓病を患っていた知里さんは翌年1943（昭和18）年に豊原を去り、郷里の登別に帰る。翌年再び樺太を訪れるが、その後は絶えて豊原を訪ねることはなかった。知里さんは1949（昭和24）年には北海道大学文学部講師に任官して、その後1961年に早逝するまで、病身をおして北大の言語学を率いていた。しかし思えば、知里先生にとって、豊原は最も重大な学術的な時期をすごした土地であったし、その時代の著作はいまだに繰り返し読まれるべき値打ちをもっている。上の写真は北海道大学教授の時代のお姿である（『知里真志保著作集』から、1959（昭和34）年の撮影）。

元の樺太庁博物館はサハリン州立郷土博物館 Sakhalinskij Oblastnoj Kraevedceskij

Musej として今も使われている。そしてその外観が昔と変わらない（左図）だけではなく、



内部の配置も殆ど昔のままのようだ。もちろん、三階の歴史の部には、第二次世界大戦末のソ連軍戦勝にまつわる展示がソ連崩壊後のいまも残されてはいるが。そしてこの博物館は未だにサハリンの学術の中心であって、サハリン先住民族のウイльтаやニヴフに関する研究のセンターとしても機能している。

サハリン州立郷土博物館には「ブラニスワフ・ピウスツキ遺産研究所」が併設されている。ピウスツキ（1866－1918）は1887年頃に樺太に流刑されたとき、刑期を終えた後にも10年足らず樺太に滞在した。1890年頃、同じく樺太流刑にあったシュテルンベルグと出会い、ニヴフ、ウイльта、アイヌに関して多くの資料を残した。彼の残した音声資料の一部がいわゆる「ピウスツキ蠟管」であり、これがポーランド、日本、ロシアの共同研究の結果、データ化された。ピウスツキの残した資料はこれに止まらず、まだ十分に整理されていない手書き資料がたくさん残っている。その一部はニヴフの文化に関するもので、これらは日本の井上紘一さん、コペンハーゲンに住むエカテリーナ・グルージェヴァさんを中心にして整理し研究している最中である。そしてこの作業のセンターとして博物館のピウスツキ遺産研究所が機能しているわけである。ピウスツキにはニヴフに関して「サハリンギリヤークの貧窮と要望」（1898）という論文があるが、むしろ樺太アイヌに関して膨大な資料を残した。樺太滞在の後半はむしろアイヌの研究に没頭していたようである。彼は1905年頃、日本を經由してヨーロッパに帰り、何故か1918年にパリで自殺する。わずか52才であった。

サハリン州立博物館には、ピウスツキ、シュテルンベルグの音声・文献資料や研究成果だけでなく、ニヴフ研究の第一人者クレイノヴィッチ（1906－1985）の資料と蔵書が収められている。この資料の整理に当たっているのは現館長のタチアーナ・ローンさん（写真左）を中心とするグループで、これには若い研究者レーナ・ニトクク



さん（写真右）が加わっている。彼女は北部のノグリキ出身、幼いころからお母さんの闊達なニヴフ語を聴いて育った。おそらくこの世代で一番よく母語が話せるニヴフ人である。月刊『ニヴフ語』紙の編集委員でもある。レーナさんは歴史学者としてすでにくつものすぐれた仕事をしていて、博物館の主な研究要員である。本来の研究だけでなく、博物館の事業にも精を出している。

2001年の秋にはサハリン州立博物館とピウスツキ遺産研究所の共催で国際研究集会

「シュテルンベルグ会議」が開催された。シュテルンベルグ生誕140年を記念して「極東の諸民族と諸文化－19世紀からの視座」と題した共同研究会であった。参加者は約100名、注目すべきは、ニヴフ人の研究発表が多かったことである。故リージア・キーモヴァさんを含めて7人がそれぞれの専門分野で立派な研究報告を行った。ヨーロッパからの参加者と共に日本からも4人が講演をして注目を浴びた。



サハリン州立博物館は、ソ連崩壊後は定期的に研究報告（左図）も出している。知里先生伝統を守るかのように、毎号大きな優れた論文が掲載されている。年一回紀要の形ですでに15巻を越えた。しかしこの報告を手に入れるのはまだ決して楽ではない。未だに売店で買うか、知り合いにおくってもらう他はないが、その苦勞に見合うだけの優れた内容である。

サハリン州立博物館は、最近ではインターネットでアクセスすることができる。まだ重要な文献はアップされていないし、学術情報も決して十分ではないが、将来を期待できるように思える ([www.museum.sakh.com/eng/17stml](http://www.museum.sakh.com/eng/17stml))。



## 8. 樺太アイヌ

サハリン島の南半分には古くからアイヌの人たちが住んでいた。この人たちは、生活と文化、それに方言について、北海道以南に住むアイヌとは違うと自ら意識していたし、北海道のアイヌもそれを認めていたので、その人たちとその子孫を樺太アイヌと呼ぶ。

樺太アイヌは、歴史的に北海道アイヌと違った環境で生きてきた。とりわけ、この人たちは、北海道のアイヌが殆ど和人とだけ接触してきたのに対して、常にニヴフ、ウイルタ、ウリチ、それに大陸側に住むいわゆるサンタン人たちと絶えず交流していたことに特徴がある。かつて黒竜江・アムール川を舞台とする長大な「山丹交易」と呼ばれる貿易ルートがあった。それは日本の江戸時代に蝦夷錦（右は早稲田大学蔵の一つ）が中国や鷹の羽（矢羽用）を江戸へもたらしたルートだった。このサンタン貿易の一番東の端を担っていたのが樺太アイヌだった。そしてそれが北海道アイヌを介して和人に売り渡されていたものであった。樺太アイヌ→北海道アイヌ→和人という通商が成り立っていたのである。



（注：ここで「和人」というのは、だいたい本州以南に住んで、いわゆる日本的文化に染まって、日本語の諸方言を話す人のことを一般に指すこととする。北海道アイヌの人たちはもともとこの人たちを「シサム」と呼んでいた。隣の人という意味である。しかし和人の差別と横暴と苛斂誅求の結果、和人をシャモと蔑称する習慣が生まれた。一番憎いシャモは北海道入植者とその子孫なのであろう。）

17世紀になると、松前藩がサハリンの経営に手を出し始めた。その後幕府との確執を積み重ねながらも結局は幕府と謀って樺太の開発に本格的に乗り出し、アイヌを使った漁場を開き始める。この間にロシア人の南下という国際的緊張関係が始まる。この時期から樺太アイヌと和人の直接的な接触が始まる。この徳川幕府時代の樺太アイヌと和人の関係に関しては、若い研究者によって詳細な研究が始まっているので、それを参照してほしい。特に北原次郎太「樺太アイヌの歴史」『樺太アイヌ民族誌』（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2004所収）と、そこに指示されている研究が貴重である。

樺太アイヌにとって状況が一変したのは、明治維新によって日本帝国が誕生し、列強に伍して帝国主義的領土分割競争に参画したことである。日本帝国は北辺の防衛のために、幕末以来係争中であった千島樺太に関する領土確定を目指してロシア帝国との外交交渉を開始した。これまではサハリン島は日露いずれの領土とも定められていなかった。入り会い状態が承認されてきたのである。いずれにせよ、日露両帝国にとってそこに住んでいる

先住民族などはどうでもよかった。ロシア帝国にとっては、流刑地として使い続けるか開拓するかという用途は特別な関心事ではなかった。今や問題は領土の確定、あわよくば領土の拡張、しかも太平洋への出口を得ることだった。日本帝国は榎本武揚を公使としてロシア帝国と領土交渉をさせた。その結果が1875年に締結されたいわゆるペテルブルグ条約である。この条約は2条しかなく、千島全島が日本に、樺太全島がロシアに帰属するという項目だけから成る。そのために千島樺太交換条約と言いならわされてきた。

この条約によって樺太の役人とその他の和人は全員内地に引き上げた。日本政府は樺太の先住民族のうちアイヌ人からだけ北海道移住の希望者を募った。841人の応募があり、全員宗谷地方に移住を希望したが、黒田清隆北海道開拓長官はあくまで石狩地方への移住を強制した。その結果、全員が対雁に掻き集められ、半数の400人ほどが劣悪な待遇と病気で命を落としたという（和田春樹『北方領土問題』1999）。

その後30年を経て、樺太アイヌに再び重大な状況の変化が起こる。日露戦争の末期1905に日本軍はサハリン全島を占領した。戦後の領土交渉であわよくば樺太全土を取る狙いからであったろう。しかし戦後のポーツマス条約では妥協の結果として樺太南部だけが日本帝国の領土として割譲された。樺太アイヌの本来の故郷、サハリン南部が日本領となったのである。戦後、日本政府はすぐに南樺太の経営に乗り出した。1908年には樺太南部の西海岸5ヶ所に新たに集住地が作られた。近在の川筋に生活していたアイヌがこの集住地に強制的に移住させられたのである。続いて1912年には東海岸にもいくつかの集住地が作られて、東海岸の各地に散らばって暮らしてきたアイヌがこれらのコタンに集められた。このとき、1875年の千島樺太交換条約によって北海道の対雁（ツイシカリ＝現江別市近郊）に移住させられていた樺太アイヌの人々のうち生き残った何人かが再び樺太の郷里の土を踏んだという。

日本領下の樺太（1905～1945）における樺太アイヌについて書くべきことは多い。しかしここでは、次の二つのエピソードだけを書き留めておきたい。

### ピウスツキと千徳太郎治のこと

ブラジスウフ・ピウスツキ（1866－1918）は、アレキサンドル3世暗殺事件に連座して、1889年に流刑囚としてサハリンに送られてきた。彼は刑期中から歩き回れる範囲でニヴフ、ウイльта、樺太アイヌの人々と深く交わっていた。そして1898年に10年の刑期を終えてからは、ロシア科学アカデミーの依頼によって「サハリン島におけるアイヌの生活の概略」など多くの論文を発表するだけでなく、先住民族の生活と文化と言語に関して膨大な資料を集めた。その資料の多くは、彼の故郷のポーランドとサハリンとに保管されていて、現在もなおサハリン州立博物館併立ピウスツキ遺産研究所などで調

査が続けられている。

ピウスツキは先住民の教育にも力を注いだ。サハリンがロシア領であった1903年に東海岸のウチブチ（内淵）にアイヌ児童のための学校を作ったのである。その教師として選ばれたのが、北海道対雁から郷里のサハリンに戻ってきていた千徳太郎治だった。千徳はピウスツキからロシア語とキリル文字を教わり、二人はキリル文字でアイヌ語を表記して手紙を書いていたらしい。その手紙のうちの3通がごく最近サハリン州博物館で発見された。それはピウスツキが1905年6月に日本を立ち去ったことを知らずに千徳から日本に居ると思われたピウスツキにあてられたキリル文字で書かれた私的な書簡である。（〈資料〉千徳太郎治のピウスツキ書簡―「ニシパ」へのキリル文字の手紙―（荻原眞子・丹菊逸治）『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第4号2001）



ピウスツキ  
(ヴェルナス画1912年)

この手紙で千徳は、樺太がロシア領から日本領になり、そのために漁場や規制が変わり、従来の自由な漁ができなくなったこと、日本人が大きな村を作ったので、ニシンの漁場を得るのに不自由になり、いい漁場にも接近できなくなったことなどを伝え、それともに共通の知人の消息を知らせている。

ピウスツキは内淵から北に数十キロさきのアイ村の村長バフンケの娘チュサンマと結婚していた。彼がサハリンを去らざるを得なくなったとき、夫婦には子供が二人いた。千徳はピウスツキに宛ててこう書き送っている「あなたの子供2人は本当に元気でいます。チュサンマは、ニシパの子供であるから、男の子一人、女の子一人、本当にニシパに似ている。顔も似ている、今はチュサンマも元気で暮らしています」と。しかし残念なことにこの手紙はピウスツキには届かなかった。樺太を出なかったようである。

ピウスツキもその後ついにチュサンマの元に帰ることはできなかった。千徳の1929年に出版した『樺太アイヌ叢書』には、いま彼女は元気で白浜（アイよりも数十キロ北の村）に住み、日本姓「木村」を名乗っている」と書いている。

ピウスツキは第一次大戦の最中、何故かパリで自殺する。彼は遂に再びチュサンマに会うことはなかった。彼女は後に目を病み、1937年頃、白浜のコタンで亡くなったという。しかし二人の子供達は第二次大戦終結後に北海道に移住した。そしてその子達もまた、北海道に住んでいた。

#### 知里眞志保「樺太アイヌの生活」

樺太庁博物館叢書第5巻は西鶴定嘉『樺太アイヌ』1942（昭和17）年刊である。

わずか136ページの小冊子であるが、ライチシの沼端ランケ翁の写真を表紙に飾った、当時としては学術的にも優れた記述の書物である。「まえがき」は「アイヌは明治38年樺太回復当時、尚全島の沿岸各地や内淵川流域等に散在していたが、大正元年から三カ年間に落帆、白浜、檜保、新間、多来加、多蘭泊、登富津、智来、小茂白の都合十カ所に結集して保護を加えることとした」で始まる。続いて「アイヌの人種学的位置」の章など7章からなる詳細な民族誌であると言える。



知里真志保（1899－1961）さんは1940年に豊原高等女学校の教諭として樺太に赴任し、同時に樺太庁博物館の嘱託として働いていた。1942年のある日、知里さんは博物館に講演を依頼された。このとき知里さんは西鶴著のこの本をかざして、大声で罵倒したという。その詳細は記録がない。しかし後に知里真志保著作集が刊行されたとき（1973年平凡社）、その第3巻に一編の未発表稿が収められた。「樺太アイヌの生活」（145－109ページ）である。この稿は巻末の解題（著作集編集部編）によると山本祐弘氏との共作で、1944（昭和19）年には出来上がっていたらしい。知里さんが樺太から内地に帰って翌年、博物館での講演の2年後である。解題者は山本氏の稿案が下敷きにあったと述べているが、知里さんの心にあった樺太とはこの本に書かれたそのままの姿であったろう。

「宗谷の海霧の彼方に浮かぶモシリ（「島」、ここ樺太もアイヌの郷里であった。」（中略）  
「白浜は淋しいコタンである。浜辺に建ち並ぶ部落の家々へは、いつもオホーツクから朔風が吹きつけている。樺太の東海岸、汽車で豊原より北上3時間、丁度邦領樺太の中程から少々南よりに位置してこのコタンはある。」とこの本は始まる。知里さんの文としては大変叙情的である。さらに続けてピウスツキ（「ピイルスツキー」と書く）とチウサンマ（「チュッサンマ」と書く）の愛について2ページにわたって書いている。そして知里さんはこの不幸な国際的な出会いを次のような文で締めくくっている。「晩年は不幸な女であった。死ぬ数年前より、かつてのピリカ・メロコポ「美しい娘」も目を病み、盲目となり果て、丁度いまから7年前、淋しく白浜コタンで死んでいった。併し遺児たちは、今も白浜に居住している。」

知里さんは、この本で樺太アイヌの海獣漁と漁労について、その用具の詳細な図を用いて詳論して、白浜コタンの一年の生活をこまかに書き記す。そしてこの本を次のような文で締めくくっている。

「コタンに春が来た。地肌が再び現れ、木原から小鳥の唄が、北の国の夜明けを奏づるように聞こえている。海は明るい色に輝いてくる。夏の世界が開けた。コタンは蘇生した。」

かうして、春が明ければ漁に、冬来れば山狩りにーコタンの生活は続けられていたのであった。」

この景色が知里さんの心の中に存在する樺太アイヌの本当の絵である。このようなアイヌとコタンへの慈しみから西鶴氏の書物を見たとすれば、知里さんの怒りは十分に理解できる。その意味でも、「樺太アイヌの生活」という一編は、知里さんのところをうかがわせて、彼の著述のなかでの名品というべきなのであろう。

### 樺太アイヌの子供達とその未来

南樺太には1942（昭和17）年頃に1300人くらいの樺太アイヌが生活していたという。西鶴『樺太アイヌ』によると、南樺太の約10カ所のコタンに274戸1263人が「分布」していたとある。この中にはロシア・ソ連時代に対雁に強制移住され、その後日露戦争後に樺太に帰ってきた「復帰土人」が含まれていた。この人たちが南樺太の東西の海岸にそった村々に主に漁業に従事して暮らしていた。

1945年の敗戦に伴って「大日本帝国臣民」とされてきた樺太アイヌは原則として北海道に「帰国」することになった。多蘭泊などから輸送船に乗せられて小樽や函館に運ばれた。その後の足取りはばらばらで、さまざまな縁故を頼っては主に北海道の東部に新しい生活の基盤を作ろうとした人が多い。1960年代になって村崎恭子さんが樺太アイヌ語の話者を訪ね、苦勞に末に何人かに会えていくつかの樺太方言の貴重な資料を得ることができた。そのなかに長嵐イソさん（1882－1964）、太田ユクさん（1894－1980）、藤山ハルさん（1900－1974）、浅井タケさん（1902－1094）などがおられた。どなたもすでに高齢であった。それでも多くの方の声がテープに残された。

もう一世代若い樺太アイヌの子供とその子供達も、厳しい苦難と差別を超克して健在である。

「私の父方は岩手県人だが、祖母の母方の祖父母は樺太アイヌである。（中略）私の家族の



ように日本にほとんど縁故のないアイヌ達が再び北海道へ移住させられた、（中略）引き揚げは手荷物一個しか許されなかった。北海道に家とか仕事を用意されているわけではなかった。（中略）8月20日私達一家は余市に上陸した。そこで二軒長屋に住んだ。私はその翌年に生まれた。両親は仕事と食べ物とをさがさなければ、その日その日を生きていけない。私が20歳になるまで日雇いを続けていた。」（中略）「1980年関東ウタリ会が結成された。



図6 ウトロの海岸で会った3人、左からハルさん、イソさん、ユクさん、1962年

1989年関東ウタリ会は東京都の委嘱を受け、実態調査を行った。東京には517人のアイヌ世帯があることが分かった。東京を除く関東近辺の実態は分かっていない。関東ウタリ会の活動をしていてよかったなあと思うことがある。」北原きよ子「北海道生まれの私と関東生まれの息子と」『新版アイヌからの呼びかけ』（関東ウタリ会1997）

北原さんは関東ウタリ会の結成に関わって、何期か会長を努めた。北海道時代に激しい民族差別といじめを経験したが、関東にもそれがあつたという。北海道のよりも無知であるだけにあまりにも馬鹿馬鹿しい差別といじめであった。しかし彼女は正当な克服の道を示して、強く立派に息子を育て上げた。優れた母である。いま樺太アイヌは引き揚げ後の世代の、さらに次ぎの世代に担われている。社会的状況もそう悪くはなっていない。樺太アイヌの新しい世代は、北海道アイヌと共に日本の主要な先住民族としての誇りをもって、世界の先住民族の運動を指導して行ってほしい。1993年の世界先住民族会議を北海道でアイヌの采配で成功裏に開催できたことは、アイヌ民族が世界の先住民族運動を指導する力量をもっていることを示したものであった。特に北東アジアの先住民族はアイヌ民族との連帯を熱く望んでいる。ニヅフの人たちは北海道へやってくる、アイヌと協同で定期的に民族文化祭を開くことをさえ希望している。



### III. ニヴフの言語と文化

#### 1. ニヴフ語の姿と形

##### ニヴフ語の音と文字

ニヴフ語では、日本語でこういうところをこんな音で話す：

こんにちは。何処へ行くの？           カスカズィアー！ チ ルシャトウホ ヴィヴィジンガー？  
お店に行くの。                           ニ エスポ ドウトホ ヴィヴィヂラー。  
ちょっと待って。一緒に行くから。   ニニャク ヌンガルマヤー。 ウグルトウ ヴィヌイテ。

ニヴフの人たちは1920年代の末まで自分のニヴフ語の文字を持っていなかった。長い物語も口伝で受け継いできたものであった。しかしロシア革命の初期に旧ロシア帝国内の少数民族も自分の文字を持つという文化運動が始まった。そのとき最初に考案されたのはローマ字のアルファベットだった。それを使った教科書も作られた。下左図の教科書は1933年刊のニヴフ語教科書の表紙で、「ユルービトグ



ウ」(読本)と書かれている。この本は1930年代末までもアムール河口やサハリンの村の学校で使われたという。しかし1935年にキーロフ暗殺事件が起こって以来、ロシア革命は当初の理想を放棄し始めた。いわゆる一国社会主義の道をつき進む道を選択して、まもなくスターリンの恐怖政治が始まる。この時期になると、ニヴフ語をラテン文字で書くことは禁止されて、ロシア文字で書く方式が導入された。ニヴフ語の教科書はすべてキリル文字を少し変形した文字に書き

換えられて、教材の内容も大政翼賛的になる。革命万歳、偉人レーニンという文言が並ぶようになる。それでも先住少数民族のための母語教育は維持されてきて、アムール下流のカリマ村やサハリンのネクラソフカとノグリキではニヴフ語の教科が途切れることなく守られてきた。下右図は1980年代までサハリンで使われてきたニヴフ語教科書の冒頭の1ページ、第一課「勉強しよう」である。編者はサンギさんとオタイナさんであった。この教科書は1989年の刊で、ニヴ



フ語の教科第二年用の読本である。サハリン方言のニヴフ語教科書としては最初のもので、非常によくできている。そのため、ソ連崩壊後の今日でも、内容を選択しながら、まだこの本を使っているところがある。

ニヴフ語をロシア文字によってではなく、独自の文字で書こうという動きはいままで一度もなかった。ニヴフ民族は現在、全体としてロシア（＝キリル）文字圏にあるので、ロシア文字が使われて当然であろう。問題は文字ではなく、ことばそのものである。もうニヴフ語を母語として使える人が数えるほどしかいなくなったのであるから、文字はどうあれ、ニヴフ語を使えるようにして、できれば、日用言語として復興できるかどうかである。

### ニヴフ語の音韻

ニヴフ語は独自の音韻システムをもっている。それは母音、子音、半母音に区別できるが、このなかで母音は比較的易しい。日本語のア・イ・ウ（非円唇）・エ・オに相当する音に、もう一つ唇を突きだしウ（円唇）を加えた6母音である。これを今使われているロシア文字、それに対応するラテン文字、さらに国際音声記号 IPA93SIL で書くと次のようになる。

#### ニヴフ語の母音

仮名	ロシア式文字	ローマ字	IPA93SIL	備考
ア	а	a	a	
イ	и	i	i	
ウ	ы	y	ə~ɯ	非円唇
エ	е/э	e	e	
ウ	у	u	u	円唇

一方、ニヴフ語の子音はとても難しい。近隣の言語、特に日本語やアイヌ語、それにツングース系のウイルタ語などに比べて、数だけでなく、閉鎖音の系列も多い。しかも難しい摩擦音もある。子音のシステムについてもいろいろ論議されているので、どのシステムを選ぶかに迷うが、ここでは左図のような白石英才氏のシステムを見てみよう。左の表は白石氏の博士論文（Topics on Nivkh Phonology, Groningen, 2006）で用いた子音音素表である。表中に WSN とあるのは、ニヴフ

語の西部方言のことで、アムール下流とサハリン島北西部で話されている方言の子音音素であることを示す。

2.2 The Consonants						
WSN has the following consonants.						
(8)	Aspirated plosives	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	q <sup>h</sup>
	Non-aspirated plosives	p	t	c	k	q
	Voiceless fricatives	f	ɸ	s	x	χ
	Voiced fricatives	v	r	z	ɣ	ʁ
	Nasals	m	n	ɲ	ŋ	
	Lateral		l			
	Glides	w		j		h

しかし以下では、音韻論的な問題についての論議を避ける意味で、これらの子音を、カタカナを基本に、それにてできるだけわずかに手を加えて表わしてみよう。もっとも、それでは、子音の発音に関わる口蓋の位置などが暗示されるだけで、カナはもともと音

節文字だから、どうしても母音が聞こえてしまう。それでも無理矢理にカタカナ表記すると、次の表のようになる。もちろんニヴフ語の子音が暗示されるだけで、実際の音はかなり違う。とりわけ、日本語ではどこにも現れない音、例えば f や l は表しようがないので括弧内で示した。軟口蓋のングやルシは、近似的にしか表しようがない。正確には上の音声記号による子音音素表を見てほしい。

近似的な子音音素表

	← 口蓋 →					後	備考
	前	唇	歯裏	硬口蓋	軟口蓋		
帯気閉鎖音	プフ <sup>(1)</sup>	トト	チチ	クク	クク		
無気閉鎖音	プ <sup>(2)</sup>	トゥ <sup>(2)</sup>	チ	ク	ク		チは c(破擦音)
無声摩擦音	フ(f)	ルシ <sup>(3)</sup>	ス	フ	ハ		
有声摩擦音	ヴ	ル <sup>(4)</sup>	ヂ	グ	ハハ		zがない
鼻音	ム	ン	ニュ	ング			
側面音		ル <sup>(1)</sup>					l : r は対立しない
半子音	ウ		イ			フ(h)	

註1) 強い呼気をカナの重なりで近似的に示す。

2) タ行音の子音部分を近似的にウの段で示す。

3) 巻き舌音の摩擦音であるが、ルに近く発音されることが多くなっている。

4) 舌尖の震え音で、巻き舌音と併用されるが、巻き舌音の代用になる。

特に注意すべきは、上の表で無声閉鎖音に対応するはずの有声閉鎖音がないことである。プに対するブ、トゥに対するドゥ、クに対するグ、クに対するグが欠けている。それは、ここで採用した白石氏のシステムでは、この無声鎖音対有声閉鎖音を硬い声立てと軟らかい声立ての違いであると見て、その音の前に何も来なかったり、無声音があるときには、硬い音、無声音が、母音や有声子音が前に立つときには軟らかい有声閉鎖音が現れると考える。「清音と濁音」の差は条件的な音の違いと考えるのである。これは上の表がニヴフ語の音素のシステムを示したからで、条件によってニヴフ語には有声閉鎖音、b, d, g, G が使われることには変わりはない。

### ニヴフ語の語形

ニヴフ語では名詞や動詞の語幹は割にしっかりしていて、数や格や人称などによって語幹内部の母音や子音が交替したり、語尾が激しく変化することはない。

名詞の例：ムウ：舟

チョ：魚（主にサケ・マス）

      エリ：河・川

      トウフ：家

名詞は語幹のまま主語か直接目的語として使われる。**多数を表す**ときは語幹にーグゥ（ークゥ、ーフゥ）をつけて、ムウーグゥ、トウフークウのようにする。これらの語形は、それぞれ舟や家が多数ある場合を示す。しかしーグゥが付いていない語形が一つを表すとは限らない。つまり不定冠詞つきのように単数を指すのではなく、むしろ一般語形というべき形である。ニヴフ語の名詞には単複対立があるのではなく、多数でなければ一つだという訳ではない。

日本語「デ、カラ、へ、マデ」に当たる**格助詞**がある。どれもいわゆる斜格で、それぞれにきまった意味をもって名詞の語幹の後に付く。例：

      トウヴーウイン：家の中で

      トウフトホ：家へ

      ポポーホ      ：小屋から

カカハーキル：槍で

ニヴフ語にいくつの斜格があるかははっきりしていない。上の四つはいいとして、比較を示す格、限定を示す格を立てるという意見もある。どの格の形も前にどのような音がかかることによって語頭の音が変わったり、語中の母音が落ちる。例えば、方向を表す「へ」に当たる格助詞は、トホ、ドホ、ロホ、ルッフ、トウフのように変わる。

語幹の語頭の子音は変わりやすい。これはニヴフ語の特徴のひとつである。

名詞の語頭の子音も、その前にどんな音があるか、それを主にする名詞句が全体としてまとまった概念を作るかによって、だいたい硬音から軟音へ変化する。例えば、

トウフートホ ヴィヂ：家へ行った。

メル ドウフートホ ヴィヂ：私達の家へ行った。

ケ ルフ：夏の家

動詞語幹の語頭でも子音が変わる。例えば、

エヴヂ：ものを取る

イフ ニウング ムウ ボルヂ：彼が私の舟を取った。

ククルウズ ポルジ：贈り物を受け取った。

副詞の語頭でも同じような音の変化がある。例えば、

イフ パルク プブルド カカウヂ：彼だけが来なかった。

ニ フジ ヴァルク アフニヂラ：私はこれだけが欲しい。



このような語頭子音の変化がどのような理由で起きるのかについては、きちんとした規則がまだ立てられていない。ただ、硬子音から軟子音へ、閉鎖音から摩擦音への変化が、その直前の音に応じて引き起こされることははっきりしていて、そのときに概念的なまとまりを作るという意識が条件として働いているのだろうと思われる。その他の音韻の変化もいくつかあるが、その動因や条件もまだはっきり分からない。

### ニヴフ語の動詞のさまざまな形

ニヴフ語には動詞と形容詞との間に形態上の違いはない。性質などを表す一群の動詞があるだけで、共に動詞である。また助動詞専用の用言もないので、用言はすべて動詞の特別な意味や機能の表れである。

動詞には主に接尾辞が付いて、複合的な語形を作る。しかし接頭辞が一つだけある。それは再帰代名詞のププゥーである。他の接辞はどれも、日本語と似て、接尾辞で、語幹の後ろにさまざまな機能の接尾辞がたくさん付く。述語文では動詞が文末に立つ。普通の会話文では、その後ろに日本語の「ね、よ」に当たる終助詞ラァが付くことが多い。

上の初級教材の1ページには、二人の女の子が編み籠を持っているが、その絵の下に、次のように書いてある。

ドーラ、ムルクウ ルシヨダ：手伝って、かご運ぼうよ！

この文のドーラとルシヨダが動詞で、それぞれ「...を手伝う、...を持つ（扶える）」の意味の他動詞である。それぞれの語幹はドー、ルシヨで、それにラとダがついて上のような意味になる。

動詞には終止形がいくつかある。そのなかの一番普通の終止形をあげると、日本語の動詞と同じように、動詞語幹にいくつかの接辞をつけて、最後に**ヂ**、**チ**を付けた形（南東サハリン方言ではその代わりに**ントゥ**、をつける）である。ドーラとルショダのそれぞれの終止形はドー**ヂ**、ロー**ヂ**、トー**ヂ**；ルショ**ヂ**、トト**ヂ**のようになる。この**ヂ**、**チ**を付けた終止形（サハリン方言：**ントゥ**）は無時制で、現在の事柄も今までの事柄が表現できる。アオリスト時制に近い。

はっきりとまだ起こっていない事柄を指すときだけは、語幹に**ヌ**という接辞を付ける。

例えば、

プウトゥ ニ パラハ ヴィ・ヌ・ジ・ラァ：明日僕は山へ行くつもりだよ。

この**ヌ**は未来形ではなく、未然（未存在・未実現）のイベントを示す接辞である。

動詞は語幹に**ラ** (la) を付けて、名詞を修飾させることができる。ウル**ヂ** (よい) の語幹ウルーに**ラ**をつけて、

ウル**ラ** ニヴフ (いい人)、ウル**ラ** ルフ (いい天気)、メル ピル**ラ**  
 ヴォ (私達の大きな村)

となる。

動詞語幹が直接に名詞に付いて名詞を修飾することもある。このときは合成語であるのか連体修飾であるのかなかなか区別がつかない。ニヴフはよく**猟・漁**をする。獣を**ンガ**、魚を**チョ**というが、それを捕ることを**ンガグウングヂ**、**チョグウングヂ**という。**グウングヂ**が**猟漁**を表す。そこで**猟師漁師**は、この動詞語形から、終止形接辞の**ヂ**をとって、直接に**ニヴフ** (ひと) につけて表す：

ンガグウング・ニヴフ (猟師)、チョグウング・ニヴフ (漁師)

ニヴフ語には否定の「ない」に当たる語がいくつかあるが、よく使われるのに**カカウヂ**という動詞がある。この動詞は「ものがない」という場合は、**チョ カカウヂ** (魚が居ない) のように動詞としてそのままに使うが、助動詞的に「...しない」というときには、否定される動詞の語幹に**ドホ**をつけて、それに続ける。また、この語は**ヂ**を**ク**に変えて「いいえ」というときにも使う。例えば、

カカウクラ、ニ ウルグトゥ ピトゥグウ ユルヂ スモ・ドホ カカウヂラ  
 いいえ、 私 よくは 本を 読む 好む (こと) を しません。



ニヴフ語には、日本語と同じように、英語の and に当たる並列の**接続詞がない**ので、動詞を二つ以上重ねるときは、二通りの場合がある。一つは前の動詞が後の動詞の**目的語**になるときで、上の文のユルヂ スモヂ (読むことを好む) のように、前の動詞は目的語並である。

もう一つの場合は、日本語のテ形のように、語幹にートゥ、ールウをつけて**分詞化**して重ねる。ートゥはそれが付く動詞が1人称単数であるか、何人称でもとにかく複数であるとき、ールウは2人称・3人称の単数の時だけに付くという面白い制限がある。例えば

ニイ メオトトゥウ ルショトゥ ンガングントウ ヴィヂ  
私 武器 手にとって 猟に 出かけた。  
フ バハ トトルシュゲ カルガラル フムヂ  
この 石 浜辺で びかびかして いた。

この他にも特別な意味を持つ動詞接辞がいくつかあって、日本語の活用語尾のような役割をはたして、「のときに、のために、ながら」などの意味を表す。

ニヴフ語の動詞にも**自動詞と他動詞の区別**がある。自動詞と他動詞が組みを成すときには、自動詞の語幹は閉鎖音で始まり、それに対応する他動詞の語幹は摩擦音になる。そのとき他動詞の語幹にグ、ウが挟まれることが多い。例えば、

ポルヂ (倒れる) : ヴォルウヂ、ポルウヂ、ボルウヂ (倒す)

古くからニヴフ語にあったと思われる動詞で、語幹が エ、イ、イ で始まる他動詞がある。意味は直接目的語が一般化されていて、「誰かを、何かを...する」を表す。例えば

エヴヂ (誰か・何かが好きだ) : ポヂ、ボヂ、ヴォヂ (...を愛する、を好きだ)

ニヴフ語には、**受身形がない**。その代わりに、再帰代名詞ピピイを前に付けて「自分を...する」という形で受け身的な意味を表す。また、使役形はグウという接辞を語幹につけて表現する。このとき、させられるのが人間であるときにだけそれに付ける格アッハがある。もっとも、イヌが大切なニヴフ人のことだから、犬が被使役者であってもアッハを付けることがあるが。

ニイ プフ・オグラ・アハ トッフ・トゥホ エグ・グウヂラァ  
私 私の子を して 家 に 帰ら せたよ。

使役やアスペクトなどの、日本語で言えば動詞的な要素が動詞に連なって、**長い動詞複合体**をつくることがある。例えば、

トゥ ギンス・ク モルシカトウフムガァ、スクウ ニウング イニヴググウクウトウ

この 悪魔共 生き残って いたら、全部 われわれ 人間達を 殺して  
 イニィ・グトゥ・ヌ・ チ・グ・ダァ  
 食べ・てしまう・だろう・な・多・あぁ

この文で、「生き残っていたら」にあたるニヴフ語は分詞形のモルシカトウに助動詞フムの  
 +仮定語尾ガァがついた複合形であるし、その前にあるクウットウは、「殺す」トゥがつい  
 て分詞になっているので、丁度日本語のテ形に当たる。文末の動詞複合体イニィ・グトゥ・  
 ヌ・チ・グ・ダァは、主動詞（イニィ）+完了+未然+終止+多数+終助詞という構成要素か  
 ら成っている。文末にあるグは悪魔が多数だし、食べられる方の人間も多数で、事態その  
 ものが沢山であることを示すのではないだろうか。

このような動詞複合形を見ると、ニヴフ語は日本語とよく似た動詞述語文を作ることが分  
 かる。アイヌ語は日本語のすぐ北にあるのに、言語構造の型は日本語と似ていない。ニヴ  
 フ語はそのさらに北にあって、日本語とは直接接触していないのに、構造のタイプが似て  
 いる。不思議な言語配置である。

ニヴフ語の数の数え方は5が基準になって、6から10までが違った語尾をつける。北西  
 方言と南東方言でも少し音が違うが（南東方言では語尾ガンのところをングとするなど）、  
 何より特徴的なのは、人を数えるときと獣魚を数えるとき、網、舟、櫓、布を数えるとき  
 に、語尾を少しずつ変える点である。例（服部健 1955 から）

	人（東南）	獣など（東南）	網（南東）	舟（南東）	櫓（南東）
1	ニェヌン	ニアアン	ニボルウ	ニムウ	ニイルウ
2	ミィエン	マアルウ	ミボルウ	ミムウ	ミイルウ
3	チャツカルウ	チャツカルウ	チボルウ	チェムウ	チェエルウ
4	ヌルウン	ヌウルウ	ヌボルウ	ヌムウ	ヌウルウ
5	トトオルン	トトオル	トボルウ	トオムウ	トオルィ
6	ンガハ	ンガハ	*	*	*
7	ンナムクウ	ンナムクウ	*	*	*
8	ミンルウ	ミンルウ	*	*	*
9	ニィウニベン	ニィウニベン	*	*	*
10	ムウホ	ムウホング、 ムウホス	*	*	*

ニヴフ語の文末の助詞は優しい。確言的な言い終わりにはラァ、ダァがつき、疑問の時に

はンガアを付ける。どれも後ろ上がりの音調が付く。

確言的： ニィ パルロホ ヴィヂ・ラア〔僕は山へ行く。〕

質問1： チ ルシャトゥホ ヴィヂ・ンガア（あなた何処へ行くの？）

質問2： セタ ボヌヂグ・ラア（砂糖、要りますか？）

質問2が質問1よりも丁寧なようだ。

命令・要望・希望の表現はかなり複雑で、次のような特徴がある：

1. 希望・誘いの表現では

私一人の希望で：ウグルトゥ ヴィヌクタア みんなで行きたいな。

誘うときは：プットゥ トットゥ アルスゥ ヴィダア 明日朝イチゴとりに行こう。

のような形がある。

2. 「命令」では、相手が一人の時と二人以上の時を区別する：

一人の時：イニ・ヤア お食べなさい

二人の時：イニ・ベェ お上がりなさい

二人の時の形は丁寧表現になる：エナヂ ヴォトゥ ヤム・ヴェ 別のをおとりなさいよ。

3. 禁止の表現は「命令」にタアを前置きする：

タア ムイチユベェ 病気になるんじゃないよ。

上ではニヴフ語のわずかな特徴を少ない例で示そうとして、ニヴフ語の姿をさわって見たに過ぎない。いろいろ分からないところが沢山ある言語なので、できるだけ沢山の人の研究してもらいたい。しかしい総じて、ニヴフ語は決して難しい言葉ではない。見るほどに何か懐かしい感じがする。ずいぶんと昔かも知れないが、隣同士であったような気のことばである。

## 2. 『ニヴフ・ディフ』（ニヴフ新聞）

『ニヴフ・ディフ』という月刊新聞がある。「ニヴフ語」という意味である。A3版1ページ裏表2ページ、カラー上質紙の新聞で、発行部数はだいたい250部で固定している。編集主任はラリーサ・イワーノヴァさん、編集者兼記者にアレクサンドラ・フリユーンとレーナ・ニ



トククさんたちである。ラリーサさんとアレクサンドラさんは北部の小村ネクラソフカに住んでいるが、レーナさんはノグリキの出身で、ユージノ・サハリンスクの郷土博物館の

学芸員、ノグリキとユージノ・サハリンスクを頻繁に汽車で往復している。毎度、車中一泊の旅である。

『ニヴフ・ディフ』はサハリン州政府が後ろ盾になった公的な性格の新聞であって、サハリン・エナージも財政的な援助をしている。そのお陰でときどき美しい多色刷りの号を出す。発行部数は決して多くはないが、何故か、すぐにサハリン一帯のどこの村にもとどく。出たばかりの『ニヴフ・ディフ』を民族衣装を着けた老人が畑を背にして読む写真がある。チルウンヴド村のドミトリー・クルクさんで、実際に『ニヴフ・ディフ』の定期購読者で、この復刊第1号を手にして本当に喜んだ一人であることには間違いない。それでも、何だか日本の政党新聞の広告みたいで、ちょっとわざとらしい写真に見える。しかしニヴフの人達にとってこの新聞は間違いなく財産なのである。月一回の発行日には、先住民族古来のネットワークを使って、たちまちにして配布されて、必要なところには必ずきちんととどく仕組みになっている。これはニヴフ人社会のごく当たり前の日常の姿の一コマである。例えば、ある朝、初物のサケが獲れたとする。その夕べには都会のアパートから山奥の田舎までニヴフの家では皆初サケを食べている。『ニヴフ・ディフ』も同じルートで配達されているのだろう。古くからの先住民族の社会とはそういうものなのだと何となく納得してしまう。

### ニヴフ語の文字（説明の都合から一部前述と重複する）

ニヴフ語は独自の文字をもたなかった。だからニヴフ語で書かれた文献も知られていない。しかしこの人達は昔から優れた文化をもっていた。ただ他人の文字を借りて自分のことばと文化を映すなどという生き方をするには、あまりにも誇り高かったのだろう。そう言えばアイヌ民族もそうだった。和人の文化に接触して、鉄や塗り物はすぐに手に入れたが、文字は受け入れなかった。アイヌの人達には本名を呼ばれたり実名を当てられたりすると、魂が盗まれるという話が沢山あるほどだから、ことばを書いたら、ことばに込められたところが盗まれると思ったのだろう。アイヌの人達と同じように、ニヴフ人達も心を文字に移し変えたら、言霊が飛んでいってしまうと思っていたのかも知れない。

19世紀の末にシュレンクやシュテルンベルクなどの帝政ロシア時代の知識人が来たときも、1920年代の末にクレイノヴィッチが本格的なニヴフ研究を始めたときも、ニヴフ人は文字を使おうとしなかったという。だが、もちろんニヴフ人達はロシア人に触れるより遙か前から、文字というものを知っていた。13世紀半ばに元王朝がアムールとサハリンを行政的に支配したとき、彼らは蒙古文字に触れた。法律や規則がモンゴル文字と漢字で書かれて発布されたからである。また清朝時代には、間宮林蔵が報告しているように、ニヴフ人も盛んにサンタン交易に参加していたので、その気になれば漢字文化を導入する

ことも出来たはずだった。しかしニヴフ人達は、アイヌ人達と同様に、文字にそっぽを向いて暮らしてきた。

しかしロシア革命が起こってからは、そうはいかなかった。その頃まだ若くて情熱に燃えていた革命ロシアは、社会主義の理念を宣伝するために、しかし同時に先住民族文化の発展のためにも文字を作った。最初はローマ字をベースにしたニヴフ語アルファベットが作られ、ローマ字式アルファベットによる教科書も発行された。

ニヴフ人を含めたロシアの領土内に住む先住民族の言語に文字を作るという仕事は1925年から始まった。この年の末、サンクト・ペテルブルグ大学（当時のレニングラード大学）に北方労働学部という先住民族の教育・研究機関がつけられた。指導者はV. G. ボゴラス・タン教授、著名なチュクチ語の研究者である。この学部は、全ロシア共産党中央委員会幹部会常任委員会付属北方少数民族協力委員会、通称「北方委員会」の管轄になり、その直接の指導下に置かれた。

開講の日10月11日を目掛けて全国からボロをまとった一文無しの学生がレニングラードに到着した。その中にニヴフ人もいた。「ギリヤーク（＝ニヴフ）のモグチは一家4人でやってきた。一番下の子はまだ4歳だった」とボゴラス・タンは書いている。一ヶ月遅れて開講された北方労働学部は、革命的な情熱に燃えて『ソビエト的北方』、『タイガとツンドラ』などの雑誌を出して、ソビエト建設の理念と新しい医療と教育とを郷里へ持ち帰るべく心血を注いだ。彼らはまず文字を作った。『タイガとツンドラ』年報3号（1931）には「万国の労働者よ、団結せよ！」というスローガンが15の先住民族言語で紹介されている。ニヴフ語では

「Colanigevun sik kurmih vopure!」と書かれている。サハリン南東方言である。モグチ一家はサハリンのトゥミ河流域からやってきたのだろうか。

『北方諸民族の言語と書記法』第3巻「パレオ・アジア編」が発行されたのは1934年だった。ギリヤーク語（＝ニヴフ語）はクレイノヴィッチ著でまだラテン文字である。



時を同じくして、ラテン文字によるニヴフ語教科書（1932）も出版された。これもクレイノヴィッチ編である。ハードカバーで絵入りの90ページ、優れた教科書である。ところが、党機関からすぐにクレームがついた。難しすぎる、冗長である。イロハから初めて、とにかく字が読めるようにすることが先決



であるというのである。ラテン語の表記についても党内で異論があった。

北方委員会の担当者は、民族はそれぞれ固有の言語を持ち続けて固有の文字を持っていていいはずだという「レーニンの思想」を持っていた。いずれロシア文字もラテン化されるのだから、少数民族がその国際化を先取りすればよいと考える人もいた。しかしレーニンの死（1924年）とともに事情が変わった。その後、トロツキーの追放（1925～1929年）と併行して、はっきりしたスターリン主義的な反動がやってきた。1935年以降のソ連の全体主義化とともに、文化の側面でも国家主義的保守化が始まった。まずラテン語書記法が潰された。少数民族はロシア語で『プラウダ』が読めればよい、民族性とはつまり地方色豊かな観光アトラクションとして残せばよい。それでガス抜きができれば十分であるという本音が見えてきた。1937年にはニヴフ語にもロシア文字の書記法が制定された（セルゲーエフ『ソビエト北方の少数民族』1955）。この時期には、少数民族出身の活動家たちが「民族主義的偏向」を理由に何万人と犠牲になった。それと共にラテン語教科書に描かれたような地方の医療と教育と自律的文化の向上という思想自身が反逆罪と認定されるにいたった。そして間もなく戦争がやってきた。

第二次世界大戦は「大祖国戦争」と呼ばれ、「カチューシャ」などの軍歌によって国の津々浦々まで愛国心という狂気が支配した。

戦勝の熱狂が冷めて、冷戦時代が進行するうち、文化政策にもいくらか安定の兆しが見えてきた。1961年にはクレイノヴィッチ編『パレオ・アジア諸語の統一音声表示プロジェクト』報告が刊行される。少数民族言語のロシア文字化はもはや既定の事実であったが、ここでそれが確定した。その後、多少の修正は試みられたが、このプロジェクトの書記法は、だいたい今日も使われているニヴフ語の書き方である。

## ニヴフ語の新聞

ニヴフ語による最初の新聞は『ニヴフスカヤ・プラウダ』だった。1932年1月1日発刊で、1935年までに11号が刊行された。最初はラテン式の表記だったという。しかしこの新聞は残っていないので、いつまでそのままだったかは分からない。1936年には「民族主義的な偏向を防ぐために」刊行を停止され、モスクワ編集の中央機関紙『プラウダ』が全国に行き渡ったという。しかしこの間もニヴフ語による小出版物とニヴフ語教科書はわずかながらも刊行されていた。

ロシア文字によるニヴフ語アルファベットがサハリンで公式に使われるようになったのは第二次世界大戦を経て1953年からだったという。その頃には、ニヴフ語の教科書も全面的にロシア文字の表記に変えられてはいたが、いくつかの地域の初等教育で使われ続けられてきた。しかし新聞という情報宣伝の最も有用な用具はソ連共産党とソ連政府の機

関紙に限られてきた。この原則が揺らぐためにはソ連時代末期のペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）を待たなければならなかった。

中央の情報公開政策に、サハリンのソ連共産党の本部が遅ればせながら動き始めたのは、1998年になってからのことだった。彼らもニヴフ民族の地方新聞を作るという決議を行って、1990年1月1日には『サハリン石油従業員』と題する新聞が発行された。この新聞は、ニヴフ語新聞『ニヴフ語』の前身になるというものの、基本的には北部の都市オハを中心とする地方紙でしかなかった。当然、制作者も読者もオハ市やノグリキ町に限られていた。最初の編集長はオハに住むリマ・ハイローヴァさん、記者はアレキサンドラ・フリウンだった。しかしその後は新聞の発行は停滞気味だった。むしろ殆ど休眠していたと言いきかかも知れない。事実1997年にはわずかに3号が発行されたにすぎないし、1998年には1号も発行ができなかった。

### 『ニヴフ・ディフ』の刊行

1995年に「行政とマス・メディアとの協力に関する措置」がロシア共和国の全国的な行政指導措置として公布された。サハリン州政府でも何らかの形でこれに対応するための論議が行われた。この議論の中で大きな役割を果たした二人の女性がいた。一人はナジェージダ・ライグンさん。当時すでにサハリン州北方民族局局長の立場にあった。もう一人はサハリン州議会北方少数民族選出議員のアントニーナ・ナチョートキナさん。共にニヴフ人である。この二人がそれぞれの場でサハリン州の行政がまず関係をもつべきマス・マスメディアはサハリンの先住少数民族の新聞にはほかならないと論陣を



はった。ニヴフの文化人達もこの二人の努力を支えた。その一人が、作家ウラジミール・サンギさん。つとに世界ペン・クラブ会員としてもロシア作家同盟の会員としても著名な方である。さらに、北方サハリンのネクラソフカとノグリキの小学校ではニヴフ語の授業が続けられてきたが、それぞれポリエチェヴァさんやシチャジリーナさんというニヴフ語の先生が長年にわたって努力をしてきたおかげである。ニヴフ語を守り、ニヴフ語新聞の読者を育ててきた人々である。それにサハリンにはいくつもの民族劇団がある。ざっと名を連ねただけで、ヴィアフト村の「美しい土地」、チルウンヴド村の「かもめ」、ポロナイスク市の「すばらしい刺繍」、ネクラソフカ村の「大きな太陽」、ノグリキの「北の地の風」、ヴァル村の「こんにちわ」など。とくに「こんにちわ」は同じくサハリンの先住民族のウイルタ人を主体にした舞踊劇団である。



ナチョートキナさんとライグンさんは、こうしたサハリン全域の文化運動を背景にして、

それを束ねる情報機関を作ろうとしたのだった。そして文化運動の方も二人のニヴフ人高官にとって強力な後ろ盾になった。こうしてニヴフ語のニヴフ人のための新聞が公的に認められ、公的な情報機関という立場をもつことになった。



1999年5月1日号が新生『ニヴフ・ディフ』の第1号であった。この月刊新聞は上の「措置法」の基づく州政府の公的なメディアである。そのために、編集長も州政府の任命である。新生号以来の編集長はネクラソフカのラリス・イヴァノヴナさんである。おとなしいがしっかりした中年婦人である。編集主任のアレクサンドラ・フリユーンさんと古い友達で先輩格、同じ村でのいわばインテリ仲間である。アレクサンドラさんはノグリキの故リージア・ジェレミャーノヴナさんの末の妹、我々仲間の同僚ガリーナ・ロクさんの直ぐ下の妹に当たる。何年か前、ユージノ・サハリン

スクからノグリキ行きのおんぼろの小型バスでご一緒したとき「あなたがあのカネコさん、私はシューラ。よろしく」と言う。それ以来シューラと呼ぶことになった。その後もサハリンへ行くと、いつでもどこにもきまってシューラがいる。ふと横を見ると、見慣れた姿が肩にカメラをぶら下げて古いビデオカメラを回しているというぐあいである。

『ニヴフ・ディフ』の記事をシューラと一緒に書いてきたのは若いレーナ・ニトククさん（サハリン州立博物館学芸員）。彼女はノグリキの出身で、ニヴフ語の類い希な伝承者ニーナ・ニトククさん（2006年10月没）の愛娘であった。初めてレーナを生家に訪ねたとき、ニーナさんが写真を一枚持ってきた。10歳代後半の晴れやかな少女である。「このレーナの写真は『プラウダ』に載ったんですよ。そしたらね、モスクワあたりの兵隊さんから嫁に欲しいって手紙が来てね」。そこでレーナが部屋に帰ってきたので、その話の続きは知らずじまいである。その有名な写真は『ニヴフ・ディフ』合併号の表紙に載っている。多分、編集主任が企画したことなのだろう。レーナは事実上一番若いニヴフ語のネイティブ・スピーカーである。



新生『ニヴフ・ディフ』には編集協力者も記事の作成に参加した。かねてからネクラソフカでニヴフ語教育を続けてきたポレーチュヴァさん、その他にノグリキの劇団「大きな太陽」を率いるベッセノーヴァさんなどが毎号コラムを書いている。書かれた記事はラリーサとシューラが住んでいる北のネクラソフカかノグリキで何

日かけて編集されて、誰かが原稿を背負って汽車か車でユージノ・サハリンスクまで運ぶ。そこでレーナがもう一度記事を点検して博物館の近くにある「サハリン書籍出版社」に持ち込んで印刷という段取りになる。

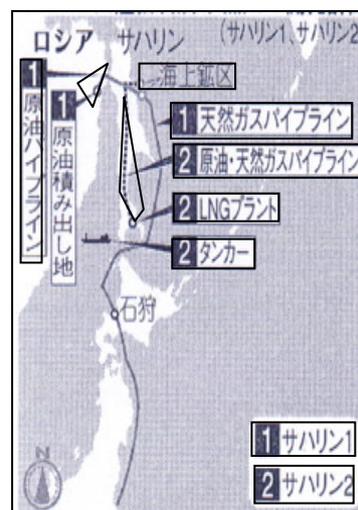
新聞の発行部数は原則250部、しかしロシア連邦内だけでなく世界各地に散らばっているニヴフ人にも発送するし、私のようにニヴフ人でないのに毎号欲しい言う人のためにも何部かとおかなければならない。だからサハリンだけの定期購読者はかなり少なくなる。だいたい200人前後だという。サハリンの全人口がいまのところ54万人として、そのうちニヴフ人の人口は約0.3%という数字がある。これで計算するとニヴフ人は約1600人ほどということになるが、実際にはもう少し多い。約2000人ほどだろう。新聞購読者数は10人に1部と見て、200部あれば、だいたい間に合うということである。

1999年6月に新生第2号を発行したとき、発行号数をNo. 2(89)とした。「サハリン石油従業員」時代からの通算番号をつけたのである。こうして2006年度は180号代になる。これで前身の『サハリン石油従業員』発行以来、16年もニヴフ語新聞が続けて発行されてきたことになる。ロシアではまだコンピュータもろくに動かなかった時代からカラー写真入りの紙面が作られるようになった。編集者の大変な努力があったし、財政的な困難もあった。1999年11月号からは、1ページの右上に小さくサハリン・エナジーのロゴを入れることになったが、これは『ニヴフ・ディフ』がこの会社の財政的かつ技術的な援助を受け入ったためである。2002年に発行した記念合冊号の表紙(上掲)でも右上のニヴフの伝統文様に並んで黄色のサハリンをあしらったロゴが見える。

## サハリン・エナジーと『ニヴフ・ディフ』

サハリン・エナジーというのは、サハリン島北東部大陸棚の石油・天然ガス開発プロジェクト、サハリン2を進める国際企業体である。この会社は、オランダのロイヤル・ダッチ・シェルが55%、日本の三井が25%、三菱が20%を出資している国際的開発事業で、1994年から掘削と輸送の準備を始めた。現在は輸送パイプラインを建設中であり、最近ロシア政府との緊迫した関係についてしばしば新聞紙上にもその名前が登場する。

もう一つサハリン1と言われる石油・天然ガス開発事業がある。これはアメリカのエクソン・モービルが主体で、日本企業もわずかに参加している。もともとは石油・天然ガスを



サハリンから大陸のアムール河中流の都市ハバロフスクを經由して中国などへ輸出するつもりだったが、2000年の6月にロシア政府は、国内生産物はすべて国内消費で外国には売らないと言い出した。すべてをロシア企業「ガズプロム」が窓口になると主張し始めた。外国企業にやらせておいて、ある程度できたら取り上げるというのは確かにロシアマフィアの常套手段ではある。

サハリン2の事業主体サハリン・エナジーにも同じ問題がある。ここにも自国内産物という理由で出来上がったなら横取りされる危険があった。この場合の口実は、サハリン2がロシアの環境を大規模に汚染しているということになろう。2006年10月には実際にロシア政府がこの口実を使って事業認可を一部取り消すと言ってきた。実際に2007年4月ロシア企業ゴスプロが企業の指導権を握ることになった。事業の進展を見て難癖をつけて分捕るという方式が国際的通称の通念や倫理を無視して通用したのである。

サハリン・エナジーがサハリンで深刻な環境問題を引き起こしていることは紛れもない事実である。環境問題に関する国際的 NPO、特に FoE「地球環境と人々の暮らしを守る国際環境 NPO」の FoEJapan や NPO Russian Environment などはサハリン石油・天然ガス開発にともなう環境破壊について詳細な調査をして、何度も大きな抗議行動を組織してきた。

サハリン1, 2の開発地域はノグリキ市の南東沖から数百キロ北のオハ市の南東に及ぶ。この一帯の海岸はオホーツク海に面して長く延びる沖島が切れ切れに続いていて、サハリン本島と砂州のような沖島との間の内海は漁業の宝庫である。オホーツク海に生まれ、あらゆる海獣と魚がいる。とりわけオハ南東は希少動物のコクジラの生息・産卵地である。陸地も温帯北部の植生が豊かで、とくにコケモモとさまざまな種類のイチゴが自生している。このコケモモを唯一の餌とするトナカイが飼育されているのがヴァル村を中心とする一帯で、先住民族のウイльта人たちが今もわずかながら（総勢200人足らずという）、トナカイ飼育によって生計を立てている。丁度この地域がサハリン1と2両方の作業区であって、微妙な大気の変動で繊細なコケモモが生きていけないことになる。それに伴ってサハリンのトナカイ飼育も成り立たなくなる怖れがある。サハリン1はサハリン島東岸に太いパイプラインを敷設して、そこから西海岸へさらに数本のパイプラインを敷く。間宮海峡の一番狭いところ、ラザーレフ岬にパイプをつきだして大陸と結ぶ計画だが、どのような工事になるかはまだ明らかにされていない。

サハリン2では今のところノグリキからサハリン島の中央をまっすぐ縦断してパイプラインを南端のコルサコフまで敷く計画である。オオワシやテンの棲む深い森を切り開いて、太いパイプを南端の港まで通して、そこから船で原油と液化天然ガスを日本へ輸送する計画もある。

一方でサハリン・エナジーはこの開発がサハリン島の自然環境に与える影響をよく知っている。またサハリン2が先住民族の土地を汚染し、生業を破壊し、深刻な環境汚染を引き起こすこともよく認識している。そのためにこの企業体は詳細な環境アセスメントを実行した。先住諸民族の生活環境、オオワシとコクジラの生態、アニワ湾の汚染可能性、パイプラインが河川を越えて敷設される時の問題、土壌汚染など、多くの項目にわたって詳細な調査が今も行われている。ロシアの環境団体、先住民族の団体とのやりとりも頻繁に行われている。

サハリン・エナジーの戦略的環境アセスメントに伴って出てきたのが、先住民族との関係の問題だった。まずは、ウイльта族のトナカイ飼育地域が問題になった。ウイльтаは主に北サハリンのチャイボ・ヴァル地域で冬場コケモモが生育できる環境を必要とする。しかしちょうどその地域に縦1本と横3本のパイプラインを敷設する予定があった。東西に伸びる3本のパイプはサハリン1のものだが、サハリン・エナジーはこの生態変化にも配慮した。またニヴフ人の居住地の環境汚染の可能性も深刻な問題であった。ノグリキ沖、チャイボ沖の漁業問題だけでなく、沖島の生態変化とアザラシなどの海獣の生態に及ぼす影響もアセスメントの対象になった。さらにオホーツク海全体に及ぶ生態変化もニヴフ人の漁労にとっては深刻な問題である。

こうしたアセスメントの過程でサハリン・エナジーはサハリン州政府の先住民族局と頻繁な対話を続けることになった。その担当者がライグンさん先頭とするニヴフ人のグループであった。ここで、まず環境アセスメントの内容を詳細で正確に先住民族と相談することが求められて、サハリン・エナジー側はむしろすすんで承知した。住民の声を聞き、意見を交換するパイプを太くする必要があった。そこで『ニヴフ・ディフ』の話が出てきた。サハリン・エナジー側はその出版に財政的及び技術的支援を申し出たという次第である。これは先住民にたいする償いとか先住民族局との取引と評価するべきではないだろう。むしろサハリン・プロジェクトのような国際的開発事業の将来のあり方に関わる倫理的問題であって、環境アセスメントの効果であると評価すべきだろう。サハリン州政府のライグン局長もナチョートキナ議員もそのような見解をもって、サハリン・エナジーと接しているように見える。



世界の環境問題に関するNPOはサハリン・プロジェクトに強い関心を寄せている。そしてその成果は少しずつ上がっていて、州政府の行政などに生かされてきている。これからも独自の調査によって必要な抗議を続け、交渉を進めていくべきである。しかしい問題はロシア政府と結んだ石油マフィアである。彼らの策謀にこそ国際企業体も環境NPOも十

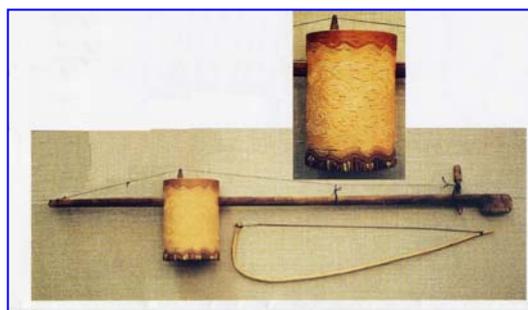
分に注意しなければならないだろう。

### 3. ニヴフの民族楽器トゥンルウン

#### 「ニヴフのヴィオラ」

北サハリンのニヴフ人にはトゥンルウンと呼ばれる珍しい民族楽器がある。リーヂアさんもトゥンルウンを作ったことがあった。それは見事な芸術的な作品で、いまもノグリキ市地域博物館に飾られている（右図）。

この民族楽器は一弦琴の一種で、典型的な形は右の写真にあるリーヂアさんの作にみることができる。楽器は長さ1メートル未満の軸を中心に構成される。材質は主にカラマツ。経は2.5乃至3センチ。軸の上端、つまり右の写真の右端にあたる部分には、ちょうど馬頭琴のように、装飾が施されることがある。しかしそれは馬の頭ではなく、クマの頭のように見える。



楽器の本体は軸の下から3分の1あたりについている円筒で、その上部を軸が貫いている。この円筒は伝統的には白樺の樹皮で作られる。その音色が一番美しいという。リーヂアさん作のトゥンルウンも円筒は白樺であるが、その上下に別の色の樹皮が被さり、本体には切り込みの装飾がついている。伝統的な製法では円筒の上張りとは床張りは魚皮のこともあるという。しかしリーヂアさんのトゥンルウンでは共に白樺の樹皮で作られている。これもまた伝統的製法のひとつなのだろう。円筒の上に木の突起を立てて、そこへ弦を載せる。これで円筒が共鳴器の役割を果たすことになる。円筒はこの楽器の第一の共鳴器であって、作りも材質も音色に決定的な影響を持つ。

軸の上端に高さ10センチほどの棒を立てる。ここで糸を止める。糸は馬の尻尾の毛で作る。何本かを寄り合わせて、炭を塗る。動物の腸を細切りにして殆ど繊維状にしたものを使うこともあるという。もちろんこの方が丈夫で扱いやすいだろうが、これも音色に関わる。上端の棒から弦を張って円筒の上に乗せて、軸の下端に結ぶ。ここには棒を立てないのが普通だという。軸に直接に結びつける。楽器の本体はこれで完成する。



弓はヤナギの細枝を撓らせて、それに糸を張る。糸は馬の毛でもよいし、鯨の髭を使うこともある。弓はわりに小さく、20センチ未満のことが多い。リーヂアさんの弓も15

センチしかない。材質は馬のたてがみの毛である。

しかしこの楽器の一番の珍しさはその独特な演奏法にある。左の写真は、リーチアさんの妹ナターリア・ジェレミャーノヴナさんがトゥンルウンを演奏している様子だが、ナターリアさんは

弦に舌を当てている。これで弦の震えを制御できる。弦を指で押さえるのと似た効果が生まれる。もちろん制御の力は指よりはるかに弱く柔らかい。しかしそれだけではない。弦の振動が舌と口腔を伝わって、口室一带に広がる。口腔の大きさを調節すると、音が口室にこもって響く。つまり舌を弦に付けることによって口腔が共鳴器になる。このような演奏法をとることによってトゥンルウンは二つの共鳴器をもつことになる。第一の共鳴器は円筒、第二に共鳴器は口腔である。口腔を共鳴器に使う楽器はいくつかの種類があるが、よく知られているのは口琴である。金属製の口琴ホムスもアイヌの木製口琴ムックリもともに口腔を上手に使って見事な音色をだす。トゥンルウンはこの口腔の共鳴を弦楽器に使う。こうした円筒と口腔の二つの共鳴器に対話させながら演奏をすすめることができる。しかも舌を弦に当てていないときは口が自由なので、歌が歌える。軽い音の歌声をトゥンルウンに乗せて歌うことがしばしばであるという。

歌とトゥンルウン演奏とにさかさまな役割を与えることもある。語りにトゥンルウンを使うときがそれで、むしろこれがトゥンルウンの本来の使い方だったのかもしれない。「狩りの歌」、「熊狩り」などの語りにトゥンルウン演奏が伴奏的に使われるという。また子守歌にあわせることもある。

しかしこの楽器の音色は非常に優しく、ひ弱い。派手な音調にはまったく向かない。西洋楽器に喩えれば、決してヴァイオリンではない。せいぜいヴィオラであろう。それもひ弱な音調で演奏されたヴィオラに似ている。しかも美しく悲しく優しい音調に限られる。トゥンルウンの代表的な研究者ナターリア・アレクサンドロヴナ・マームチェヴァさん（サハリン音楽大学教授）はこの楽器を「ニヴフのヴィオラ」と呼んだ（「ニヴフの<ヴィオラ>トゥングルウン」サハリン博物館紀要 IV、1997 pp.214-239）。この喩えは当たっている。

トゥンルウンの起源は分からない。アイヌ民族文化の中にはトンコリのような琴のタイプの弦楽器はあるが、弓で弦を弾く類の楽器はないから、トゥンルウンは北海道に関係する南方起源ではないようだ。14世紀にはアムール河一带とサハリンが元王朝の支配下にあったから、モンゴル文化の影響かも知れないという意見もある。しかしニヴフの生活と交流の範囲は昔からアムール河中流域をはるかに西方に超えていたから、14世紀以前からニヴフがこの楽器をもっていたという可能性もある。ニヴフの民族文化の中でまだ分かっていないことのひと駒である。

## トゥンルウン伝説



この楽器の起源については伝説がある。悲しい物語で、トゥンルウンが一人息子を失ったニヴフのお母さんによって作られたという話である。マームチェバさんのロシア語訳から重訳して紹介する。

「小さなニヴフの村に女がひとり住んでいた。取り立ててきれいな人ではなかった。来る日も来る日も退屈に過ぎていった。その人の暮らしはいわば誰がみてもおもしろいものではなかった。そこへある日幸運が舞い込んだ。その人に息子が生まれたのだった。その人は息子をとてもかわいがっておいしいものだけを食べさせた。願いは息子が立派な人になることだけだった、大きな、力持ちの、猟師として優れた男になることだけだった。息子は、海に出たらアザラシを捕って、タイガに入ったら獲物を担いで、川へ乗り出したら魚を持って帰ってきた。いつも母は息子の帰りが待ち遠しかった。息子のためにモースを作ると、きまって海を司る神、タイガの神、天の神に捧げるのだった。

だがどうしたことだろう。息子はある日狩りにでて、帰ってこなかった。明日になれば帰ってくるだろう。だが明日も息子はまだだ。ひょっとして一番恐ろしいことがという思いを払いながら、母は、どのニヴフの女とも同じに、ものも言わずに息子を捜し回った。目を見開いて海を森を探し回り、川岸を北に南に駆け回った。力が湧き母を変えた。心の中に火が燃え、つんざくような声を出して息子の名を呼び叫んだ。一日中叫び続けた、そして夜もなお。次第に叫び声は弱まり、悲しみの歌に変わっていった。何日経ったことだろうか。鳥たちはもう南へ旅立ち、木々の葉も悲しげに地を覆い、海は黒々として、もはや泡立たない鉛色の波が岸边に氷の塊をざわざわと打ち寄せていた。女は声を失った。彼女はぞっとした、息子は母の声をもう聞けないのではないかと。そして震える手でトゥンルウンを作り始めた。それだけが母の叫びの歌、哀しみの歌を伝えるようにと。

その女はもうとうにこの世にいない。だがその母が作ったという楽器トゥンルウンはいまでもニヴフの女に人たちの手で歌われている。その静かな音を聞いてごらん。その歌に悲しみと嘆き、それとともに希望の声が聞こえないだろうか。幸せへの願いがひょっとして満たされるのではないかという希望の声が。」

(作者とニヴフ語原文不詳)



#### 4. ニヴフの古い歴史についての仮説

##### ニヴフ人の歴史

ニヴフの人たちは何時から今の居住地区、アムール下流とサハリンの北にいるのだろうか。それとも、この人達の先祖は昔どこか別の所にいたのだが、何らかの理由で今の土地に移ってきたのだろうか。そして彼らの母語ニヴフ語はどこかの誰かと親族関係を持っているのだろうか。つまりニヴフ民族とニヴフ語のルーツはどこにあるのだろうか。

これらの疑問に対しては実は答えはない。ニヴフの文化と言語についての優れた研究者であった服部健さんは、かつて次のように書いた。

「邦領南樺太の北辺に吾々日本人と同じ様な肌色と同じ様な形状を備えた毛髪を持ち、その他の肉体的な特徴も大体吾々と同じ様な、然し国籍のない異人種が居住している。ギリヤーク族とトゥングーズ族とがこれである。(中略)

由来、北海道・千島及び樺太に居住するアイヌに就いては人種学的にも土俗的にも多く語られ多く書かれた。バチェラー氏が明治10年の頃来朝し、居を北海道に定めた頃からアイヌ研究が起り、その後、日本原住民の問題とむすびについて学会に波紋を投げたことは、世人の良く知る通りである。(中略)

ギリヤークはアイヌと共に古シベリア民族の名の下に包括される人種である。古シベリア民族の中にはアイヌ、ギリヤークの外にエスキモー・アレウト・カムチャダール・チュクチ・コリヤーク・ユカギール等が含まれ、その名称はトゥングーズ等を含む新シベリア民族という名称に対立するものである。古シベリア民族はその居住地域がアジア大陸の東北部よりチュクチ半島を通過してアメリカ大陸の北辺に渡り、更にグリーンランドまで及んでいる。(以下略) 服部健「ギリヤーク」(「北海道帝国大学理学部会誌」第5号 昭和1



2 = 1937年)

服部さんが70年前にこう書いているように、その頃、ニヴフの人たちは「日本国民」であった。同胞だったのである。彼らとの間に国境が敷かれたのは第二次世界大戦後のことだった。それ以前、和人は間宮林蔵の時代からは北の隣人として付き合いしてきたのだが、その交流が何時頃始まったのかはいまだに分からない。それはニヴフ人の歴史があまり昔までは辿れないからである。

ニヴフ民族の通史はまだ書かれていない。歴史文献上でニヴフ民族と思われる集団について論及されたのは紀元10世紀くらいからのことである。この頃、中国の史書では、ギレミといわれる種族がアムール川河口付近とその先に住んでいることが書かれていた。この種族については、明代にも言及されていて、そこで書かれている文化的な特徴は、近代以降の中国史書の記述によく似ているので、これが今日のニヴフのことと考えてほぼ間違いないといわれている（佐々木史郎「ニヴフ」『講座世界の先住民族』東アジア明石書店2005等）。またモンゴル帝国が13世紀なかばにアムール地方に勢力を伸ばしていたとき、ギレミは元（＝モンゴル）に服属していたと思われるが、彼らはクイ、つまりアイヌの人たちがギレミの土地に侵入して困るので、鎮圧して欲しいと元に頼み込むということがあった。アイヌ軍は非常に強力で、一時は元の軍隊をアムール中流まで追い込んだという（財団法人アイヌ文化振興・研究機構『アイヌ民族に関する指導資料』2000を参照）。

それ以降もニヴフ人とアイヌ人との交流は続いたらしく、アムール河口の村カリマにはアイヌ人の墓があるし、私の先祖はアイヌ人だというニヴフ人やウルチ人が今も居る。しかもサハリン島内の伝承だけではなく、大陸側のアムール下流にこのようなアイヌと混血した人々の話がある。

日本本土（本州島と四国と九州及びその周辺の島々をまとめてこう呼ぶことにする）の古代から中世にかけての時代、つまり5～13世紀に北海道の東部のオホーツク海南岸一帯、すなわちサハリン島南部、北海道北東部、千島列島を含む範囲でひとまとまりの文化圏があった。この文化はオホーツク文化と呼ばれる。それは北の海洋民が作ったものらしく、主に漁労で生活して、ブタとイヌとを飼育していたことが考古学的な知見から知られている。

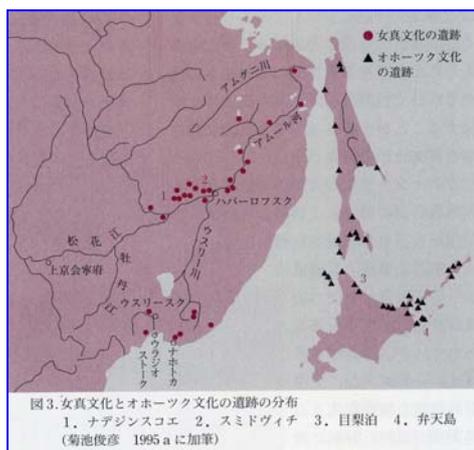


図3. 女真文化とオホーツク文化の遺跡の分布  
1. ナデジンスコエ 2. スミドヴィチ 3. 目梨泊 4. 弁天島  
(菊池俊彦 1995 a に加筆)

さてこのオホーツク文化の担い手は誰だったかという問題について、それがニヴフ民族であったという主張がある（菊池俊彦『東北アジア古代文化の研究』北海道大学出版会19

95他)。それは「唐代の史料に見えるサハリンの住民である流鬼（ルキ）に、また中国の金代・元代（1271－1368）の史料に見える吉里迷に対比されると説明し、この吉里迷はアムール河下流域のナナイ民族がギリヤーク民族を指して呼ぶギレミに対比されることから、オホーツク文化の人たちはサハリンの住民であるギリヤーク、すなわちニヴフ民族に相当するという解釈が発表された（新北海道の古代2『続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社2003、194頁担当：菊池俊彦）。

この説が本当だとすると、ニヴフの人たちは本土の古代に当たる昔から、オホーツク海東南部に独自の文化圏を構えた古い民族であったことになる。

ニヴフ民族の歴史をもうすこし溯る上で、一つの考古学的な手懸かりがある。それは、青森市郊外の南西4キロほどの丘の上に三内丸山の遺跡との関わりからの推論である。三内丸山遺跡は、種々の遺物の炭素分析から推定する限り、西暦紀元前3500年から紀元前1000までの約1500年間続いた村落の跡であるという。実年代に換算すると、今から約5千5百年から4千年前に栄えた都会であったことになる。

この三内丸山遺跡からはさまざまに加工された黒曜石が大量に発掘された。それはすべて蛍光X線分析法を用いて分析されて、その原産地が特定された。黒曜石のうち縄文時代早期末までのものは比較的近い地域から得られたものであるが、中期、つまり紀元前3000以降になると、遠隔地からの交易品目が多くなる。とりわけ重要な論点は、三内丸山遺跡から出土した黒曜石の原産地の分布はこの遺跡に住んでいた人々の交易の範囲をそのままに反映すると考えることができるのではないかという点である。どこから黒曜石やヒスイが持ち込まれたのかが分かれば、それが交易の範囲であると分かる。従って、それら原石の産地を特定することによって、いままで推定された限りで、三内丸山港を中心とした交易圏の広さがほぼ正確に推定可能である。



三内丸山の交易圏の中心に三内丸山村そのものがあつた。常時500人の村民をもち、近在の人々が集まり、祭祀を執り行う施設を持った地域センターであり、その港はかなり広い地域からの舟を寄せ集める一大貿易港であつたらしい。他に同等以上の遺跡が発見されて分析されるまで、この推定は意味を持つので、この交易圏の中心は、この縄文のメガロポリス三内丸山村そのものだったとしよう。

次いで、このセンターを中心に、同心円を描いて交易の範囲が四方に拡大していたと考えられる。この第二の交易圏は、北は、北海道の南部地域を、南にはヒスイの原産地である本州中部山岳地方を含んでいたであろう。人々は、北海道東北部を中心とする黒曜石の産地、網走の白滝から三内丸山まで陸と海を越えて運んできた。また南からは、本州中部

の山岳地帯からヒスイを運んで来た。それが陸路だけで運ばれたのか、日本海沿岸を經由したかは痕跡がない。しかしおそらくは陸路と後に「北前」海路と呼ばれた沿岸海路とを利用したものだったろう。この三内丸山に中心を持つ広い交易圏を、三内丸山広域通商圏と名付けておこう。

一方、三内丸山が栄えた1500年もの間、東北海道からサハリンのほぼ全域を超えてアムール河下流に及ぶ石刃鏃の文化が広まっていたことが知られている。この時期の文化複合体の比較検討から加藤晋平氏は次のような重要な仮説を提出している。「今から七千年前、(中略)南樺太と北海道東半部とは同一の種族集団が存在していたことを示している。おそらく、言語的に共通した集団であったろう」(加藤晋平『シベリアの先史文化と日本』六興出版1985)。この推定が正しければ、三内丸山の1000年以上前に、北海道東部から南サハリンまでを含む範囲で、一つの文化圏が存在していたことになる。そして加藤晋平さんは、アムール中流から下流域にかけては、石刃鏃とともに「アムール編目文」を持つ平底の土器を持つ文化が、三内丸山とほぼ同時代の3500-2000BCに成立していたという証拠をだして、「(前略)以上の事実、北海道東部とアムール中流部は、1000キロの距離があるにもかかわらず、その生活様式はほとんど異なっていなかったことを示している」。この推定からすると、北海道東部から北に広がる文化圏はアムール河中流まで及んでいたことになる。これはちょうど紀元後に成立したオホーツク文化圏の範囲と大部分で重なり合う。オホーツク文化圏を担った人々はかつてもう少し北西のアムール中流地域と関わり合いをもっていたことを示すのかもしれない。これが三内丸山交易の広域文化圏とすぐ北につながる地域文化圏であったろう。仮に古西オホーツク文化圏と名付けておこう。



図7 今から5000年頃前の日本周辺の諸言語

域文化圏とすぐ北につながる地域文化圏であったろう。仮に古西オホーツク文化圏と名付けておこう。

古西オホーツク文化圏はさらに北西に広まっていた可能性もある。またそこからはある異なった文化圏が始まっていたのかも知れない。日本とロシアの最近の共同研究の結果、アムール河中流のノーヴォペトロフカやもう少し南のハンカ湖近くのコンスタンチーノフカには、アムール下流のコンドン遺跡に先立つ一千年も前に、すでに進んだ石刃鏃文化があったという。この文化は、黒曜石の石鏃を付けた狩猟用の弓矢を使用していたという点でも先進的な文化であったことが明らかになっている。この古い文化圏を仮に古東ツングース文化圏と名付けておこう。

ここでは、さしあたりこの文化圏がニヴフの先祖の人々と比較的迂遠な関係にあったので

はないかと想像して、この文化圏の存在を想定し、その名付けをするだけにしておきたい。特に、ツングース族の源郷がどこかとか、その移動が何時始まったかという難しい問題に抵触するからである。

日本とロシアの研究者によるこのような研究を重ね合わせてみると、環日本海を取り囲んでいくつかの交易圏が重なり合って連なっている様子が分かる。第一に、真ん中に三内丸山の交易文化圏そのものがあつた。第二に、それと同心円を描いて、糸魚川以北の東北地方全域と北海道東部までに及ぶ広域の三内丸山交易圏があつた。この第二の文化圏、三内広域文化圏は、北海道東部で別の石刃鍬交易圏と接触していた。これが第三の文化圏である。それは、白滝からサハリン島のほとんど全域とアムール河下流域を含んでいた。それはサハリンの前期新石器時文化(=イリチンⅡ)とアムール下流域のコルドン文化圏とを加えたものであつたろう。これを仮に古西オホーツク文化圏と名付けておこう。この第三の文化圏の範囲はオホーツクからアムール中・下流域に至る広がりをもっていたとおもわれる。

次いで、この文化圏の西にはアムール中流から中国東北部の黒竜江の流域を含む別の文化圏が接していたのではないだろうか。これを仮に古西ツングース文化圏と呼んでおこう。アムール河はハバロフスクで黒竜江とウスリー河に分かれ、一方が中国北東部へもう一方が南のハンカ湖へ向かうが、そこまでの広い地域が第四の文化圏に属することになる。この地域では、紀元前5000年紀から狩猟用の石刃鍬を含む前期新石器文化の遺物が発掘されている。これはちょうど三内丸山とほぼ同時期である。しかもそこには縄文・織布文の平底土器が発見されているという(上の加藤晋平さんの著書から)。新石器時代後期の平底土器はこの地方の当時の生態系と結びついているらしい。この土器の使用が堅果植物を食料として利用していたことを示すと考えられる。日本海をはさんで三内丸山とアムール河中流域の両地域で同じ時期にナラ・シナノキ・ニレなどの果実を土器で調理し、雑穀の栽培をする文化が存在したのであろう。

これらの文化圏から西へ行くと、そこは朝鮮諸族の古い先祖である古プヨ・ハン族とツングースの文化交易圏である。ツングース族の先祖が紀元前4000-3000にアムール河中流と中国東北部で形成されたとすれば、この頃この地点からツングース族の拡散が始まったのであろう。それと共に古朝鮮族は次第に朝鮮半島北部から後には半島南部に及んで、固有の文化を発展させたのであろう。

このように日本海を巡る文化交流圏の連鎖が、北回りでは三内丸山から白滝へ、樺太からアムール上流へ、アムールを遡り朝鮮半島北部へと繋がり、南回りでは縄文時代の中期まで比較的人工の少なかった日本本土西部から朝鮮半島南部へと繋がり、さらに琉球から九州へ、遼東半島から朝鮮半島南部を経て日本本土西部へと連なる。日本海を巡るそれぞ

れに異なった文化圏の連鎖はこのように一巡して完結した様子を見せる。北ではアムール河下流から更に北方へ向かって、また本土西部からは渤海湾へ、九州からは琉球列島へと連なる。日本列島がユーラシア大陸東端の砂州のような地域でありながら、とりわけ黒潮と対馬海流に挟まれようになってからは、多彩で豊かな植物生態系のおかげで人々と物が北と西と南とから吹き溜まったように、それぞれの地域で安心して定住し、そこにいくつかの多分に類似の文化を創造してきたのであろう。その文化圏の連鎖をおおまかに図示すると上の図（金子亨「言語の起源」中島平三編『言語の事典』2003朝倉書店）のようになろう。

さて、これらの文化圏の主な担い手は誰だったのだろうか。この質問を別な表現に改めてみると、それぞれの文化圏で通用していた言語はどんなことばだったのだろうか。三内丸山を囲む一番狭い同心円ではおそらくひとつの言語が通用していただろう。これを仮に三内丸山語と名付けておこう。それでは、この三内丸山語を取り囲む大きな同心円はどうだろうか。その言語は三内丸山語と同じだったろうか。仮にそこにいくつもの違った言語があったとすれば、それは三内丸山語からできた広域の通商用語をもっていたかもしれない。逆に、多かれ少なかれ類似の言語が通用していたなら、それは三内丸山語の方言だったかも知れない。もし第二の推論が当たっているならば、本州中部から北海道にかけて三内丸山語の諸方言が広まって使われていたことになる。

ところで、言語が5000年くらいでは、そこに人々がある程度に定着している限りで、根本の姿・形をそう大きく変えないものだとすれば、三内丸山語は現在日本近辺にあるどの言語と似ているのだろうか。例えば、今のアイヌ語と三内丸山語とは根本において同じなのではないだろうか。あるいはアイヌ語の古い祖先は三内丸山広域語、あるいはその一方言だったのだろうか。

これと類似の答えのない質問をもう一つ出しておこう。もし、オホーツク文化の主な担い手がニヴフ民族だったとすれば、上の図の古西オホーツク語は、オホーツク文化を担っていた言語と同じだったのではないだろうか。だとすると、それはニヴフ語の祖先なのだろうか。つまり、ニヴフ語は三内丸山の時代からずっとこの地域に生きてきたのだろうか。

ついでに答えのない質問を重ねておくと、第二の広域の三内丸山通用語が三内的リングア・フランカであったとすれば、その広域語と西日本の西南日本語とはまったく違った言語だったのだろうか。まだ水稻文化が大陸を出でていなかった時代のことであったとして、諸倭族の小集団がまだ日本列島弧の西南に散在していた時代であるとすれば、北の広域語と西南日本語はまだ根本において同一の言語の諸方言でしかなかったのだろうか。だとすると、日本列島弧には三内丸山語の諸方言が行き渡っていたのだろうか。

人々がまだ比較的小さな集団で日本列島弧の周辺でゆっくりと動きながら定住し始めた

頃、つまりベーリング海橋が沈んだことの影響が北東アジアに現れ始めた頃、人々は日本列島弧とその対岸の地域でも孤立した集団と交易圏を作り始めたのかも知れない。だとすると、ニヴフ語はこの時代から古い時代のオホーツクの地域で自らは海洋的生活を中心に文化圏の連鎖を構成する人々の共通語だったのかもしれない。



## 5. ニヴフの人たちのこれから

### ニヴフ研究のこれから

これまでニヴフの言語と文化の研究を担ってきた人たちを思い起こすと、ニヴフ民族出身のひとが多いのにむしろ驚く。総勢わずか4千人の民族のなかに、言語学者のオタイナさんがいた。ニヴフ語教育者のプフタさんがおられた。民族劇団の組織者であり画家でもあったキーモヴァさんが居た。俳優のカヴォズグさんもいた。それに加えて優れた言語文化の伝承者の方々が何人もいた。そしてこの方々がわずかこの10年ほどで亡くなってしまった。ひとりびとりのお姿を思い起こして、謹んで哀悼の頭を垂れる。

しかしチュンネル タクサミ氏は健在で、ゲルツェン記念国立教育大学附属北方民族大学（ペテルブルグ）のパレオアジア講座の講座主任として働いている。そこにはガシーロヴァさんも北方民族大学博物館長を務めながら、毎年何人ものニヴフ人の学生にニヴフ語を教えている。サンギさんも詩人として作家としての活動の傍ら、サハリン州の先住民族のために懸命な努力を重ねている。そして何よりもその次の世代が育ってきている。そのちばん大きな力は月刊紙『ニヴフ ディフ』だろう。編集長のラリーサ・イヴァーノヴァさんを始め、編集委員のシューラ・フリウーンとレーナ・ニトククの二人はニヴフの言語

文化を守り育てる事業において最大の貢献をしている。この新聞がでていること自体が前の世代とは比較にならない状況を作り出している。その裾野の広がりからニヴフ言語文化の研究と維持育成に若い世代をどう作り上げていくかがこれからの課題であろう。ペテルブルグだけではなく、ハバロフスクの大学で学ぶニヴフの子供達も増えてきてはいる。問題は、そのための社会生活的な基盤をどのように広げていけるかである。そきでは日本の大学も役立つ可能性もある。さまざまな国際学術交流協定によって先住民族の子弟を安く受け入れる方法を考えたいものである。



ニヴフ言語文化の研究は国際的には決して盛んではない。ロシアでの研究者がまだ育っていない。ロシア人でフィンランドに住むエカテリーナ・グルージェヴァが若い世代の研究者として活発な活動をしている。他には、ドイツに住むヨハンナ・マティセンが理論的な文献的研究を進めている。いまのところそれ以上に若い世代は育っていないようにみえる。

日本では、服部健さんが亡くなって以降やっと1990年代からニヴフ言語文化の研究がグループとして成立した。もっとも人数はわずかに数人である。しかしそれを中心にニヴフ語データの処理の面でも何人かの研究者が協同の作業をし始めている。とりわけ中川裕、丹菊逸治、白石英才の各氏らが収集し整理した言語データは貴重であって、これがニヴフ語のデータベースを作る上での基盤となるだろう。またニヴフ語についての理論的研究もいま緒についたところである。これからの世代はまずこのデータから出発して研究を始めるのが望ましい。1960年代以前の文献は遡及的に問題にするべきなのであろう。より若い世代の研究者が出てくることを望む。

## ニヴフの人たちのみらい

一つの民族の未来について、その言語の将来について思いを馳せることは難しい。何一つ分からないというのが正しいのだろう。自分の属する国民や自分の母語の将来について語ることもさへも唇が寂しい。まして如何に隣の人たちとはいえ、ニヴフの人たちの未来について何事かを言うなどとは到底できることではない。

しかし同じ日本国籍をもつアイヌの人たちの未来については同国民としての共同の責任がある。そして今少し迂遠になるが、私が夢見る東アジア共同体のメンバーとなるであろうニヴフの人たちについても将来は共同の運命があり得ると思う。その立場からならば、やはり何かを言わなければならない。

## (1) 閉塞状況

何度かカリマを訪れて、知り会えたカリマの友人グリーシャの嘆きが念頭を去らない。絶対的な閉塞状況のなかでグリーシャは毎日「シトー チェラーチ!? (どうすりゃいいんだ)」と頭をかかえていた (I-1「カリマ村の人々」)。アムールの魚はもう捕れないし、食べられない、他のいい仕事は将来ともありそうもない、つまり、暮らしが成り立つ見込みはない。ロシア政府は多分なにもしてくれない。村々に散らばって暮らすニヴフの人たちや先住民族の人たちがまとまって何かをするという機運はない。若い者はアルコール浸りで、現金を手に入れる道はニコラエフスクとかハバロフスクに出て土方をするしかない。村は人口減で疲弊するだけである。

この状況はけっしてカリマ村だけに限られているのではない。インノケンチェフカ村についても未来は決して明るくない。ここは確かにまだいくらかは働くことができる。ロシア人村長とことごとに対立しながらも、漁業協同組合は健在であった。しかしアムール河漁業に全面的に依存した旧コルホーズ型の収奪的漁業はいずれにせよ時代遅れであるし、それを克服する計画についての論議はまだ生育してない。アムール河口の村々の崩壊状況も先に見たとおりである。しかしこれらアムール下流地域の村の生活状況はロシア極東地域のどこにでも見られる。漁業資源を枯渇させ森林資源を壊滅させるだけで、将来的な展望をもてるようなプロジェクトはまだないし、アムール州政府が先住民族の生活状況を視野に入れた政策を将来にわたって計画する能力があるとも思われない。400年に及ぶロシア人支配によって汚辱され放置された少数先住民族の姿は、ちょうどスモリャークなどのソ連型の民族学者が描いたような「未開社会」に生きてきた美しき「開発対象」のままである。

目を転じて、カリマとノグリキとを比べてみよう。サハリン北部の町ノグリキに、大陸のカリマと同じ質の「閉塞状況」があるだろうか。ない。ここには石油天然ガス国際企業体があった。いまではロシア企業のゴスプロに支配されてはいるが、ともかくも国際的産業活動という背景がある。それにともなって一般的インフラ構築のための需要がある。ニヴフの人たちの生業も多彩であって、失業率は高いが、漁業に依存しなければ生きていけない状態ではない。この違いは何によるのだろうか。この問に対する象徴的な答えは、「サハリン州政府とサハリン州北方少数民族協議会地域委員会との間の協力に関する議定書」(1999)である (II-5「ユージノサハリンスク」の項、p.96)。この議定書を作るには長い間の多くの人々の努力があった。その全過程を含めて象徴的に、ここにサハリンの先住民族の社会的政治的な意味づけの違いが見える。

## (2) 「議定書」のみらい

「議定書」当事者は一方がサハリン州政府自身、他方がサハリン州北方先住少数民族協会である。その目的は、「経済的改革の条件下の法的保護、本来的生業手段の保護、経済活動に於ける伝統的領分の発展、精神的諸分野の再生、民族文化及び母語の維持と発展などの分野に於ける諸問題の解決のために、北方先住少数民族の経済的社会的状況の安定化と協力関係の強化をはかることにある」とされている。

ニヴフの人たちを含む北方先住少数民族は、自分の生活の場で地域の社会的経済的状況にインテグレートされている。それは現在のロシアの極東地域の社会生活環境そのものである。従って、それは当然サハリン州と沿海州、ハバロフスク州とでは環境的・行政的に異なる。それは、この地域の状況の中で、「議定書」のための前提的状況である。原則の問題として、少数民族であることの社会的不平等はソ連時代に建前として存在しなくなって久しい。むしろ少数民族であることによる特惠条件のほうが目立つくらいである。従って、「議定書」が問題とするのは、サハリン州住民という一般的前提条件を越えたところで、北方先住少数民族としての諸権利を主張し、その実現を双方で合意することであった。

しかし「議定書」にはまだ不足がある。ニヴフ民族としてはさらに生態的で伝統的な生活を創造するべく、独自のテリトリアが欲しいという要求がある。その最大の論客はウラジミール・サンギさんである(II-2の項)。サンギさんの言う「総合的民族教育計画」を具現するための自治区が「議定書」の先に見える。そこではニヴフ民族の相互扶助体制を創造するために、ニヴフの生活そのもの、植物的・動物的生態系、海・河川の水系、自然系、利用可能な海洋資源の系、精神文化、それにももちろん言語を一切取り込んだ生活空間を作ること」が計画されている。そのためには「さしあたり大きな土地はいらない。まずは30キロメートル平方ほどの広がり、32キロの海岸域、サケ・マスが遡上産卵する川が二筋。そこを根拠地にして民族の伝統的な生活空間を創造すること」だという。

テリトリアは民族の囲い込み地ではない。むしろ根拠地であるという。サハリン州市民としての一般的社会経済状況に上乗せした「固有の領土」と考えられている。私はこの実験が成功してくれることを心から願う。一方で、では、大陸では、例えばカリマ村自身が一つのテリトリアとして再生して「閉塞状況」を克服することはできないだろうかと自問する。そしてそのための現実的条件は何だろうかと考える。それにはやはりテリトリアをインテグレートすべき社会経済的状況が前提されるであろうし、この前提を作ることから始めなければならないのではないかと思う。

### (3) 今はロシア社会の中でも

タクサミへの献辞のなかで記したように、彼は最近の本『北方先住諸民族の発展の諸問題』2003の中で、「20世紀の100年間はロシア領内の北方諸民族にとって「もう止め

てくれという嘆き」の世紀だったとして、状況は新しい世紀を迎えた今日も変わらない。」と書いた。しかし彼は、北方民族がこの閉塞状況から脱出して「生態的安定を回復して」「生態共生を自主的に構築する」ことが可能だとして、サンギさんと同様に、「そこで自由に快適に暮らし」「多面的な生活の総体を創造的に構築できる」自分の領土を持つことが許容されなければならない」と主張する。問題は、その領土、テリトリアがロシア共和国の中で、それにインテグレートされた制度として構築されなければならないという点である。

先住民族は、定義上、植民地内で生き延びたひとびとである。ニヴフたち北方先住少数民族は、ロシア人の極東侵略によって「先住民族化」された。今日ではスタートゥス・クォである。タクサミはこの状況を「それはあくまで世界の一部であるという意味合いだった」という。従って、将来ニヴフの人たちが世界のどこの共同社会にくみこまれていようと、「統治の全段階で北方民族の代表者達による運営が可能な北方地域」を創設できるはずだということである。夢である。私は彼の夢に上乘せをしようと思う。そのような「北方地域」は将来の「東アジア共同体」内部の一地域であってほしい。

(2007年4月26日試稿、千葉大学病院和漢診療科病室で)